

貞操観念あべこべな生活。

モンロー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺、提督。素人童貞。ひよんなことから貞操観念の逆転した世界に迷いこんでしまったけど、これはこれで楽しいかも知れない。

何番煎じでしょうか。世界観に対するツツコミはご容赦下さい……。

Hな回のタイトルに「★」を付けますね。

(18. 7. 2 R-18にタグ変更しました。迷惑かけます。

目次

1.	1
2.	4
3.	9
番外編：提督、現実を受け入れるべし	15
4. ★	18
5. ★	31
番外編：龍驤のハッチひらかせてーや (★)	41
6. (前)	56
6. (中)	61
6. (後) ★	74
番外編：私の本当の性癖は (★)	93
7. (前)	106
番外編：処女(どうてい)三人寄れば姦しい／奥手なエースのバーニング・ラブ (★)	118
7. (中)	133

「はあー、美少女になって童貞共を惑わしてえ」

——とある鎮守府、提督執務室。時刻は0時を回っている。

木製のどっしりとした机に両足を投げ出すようにして椅子に座った男——提督が、大きなため息を吐きながら呟いた。

その顔は疲れ気味だ。激務による連日の徹夜に嫌気が差しているのだろう、欲望を心の内にしまっけていられない程には参っている様である。

「……何言ってるんだ、俺……。いくら秘書艦が席を外してるからって……」

自らの言葉に嘲笑いつつ、机の上で組んでいた足を下ろして立ち上がる。

「コーヒー飲んで再開すつかあ」

彼は執務室の隅に設置してあるコーヒーマシーナに目を向けると、手元のコップを持ち上げて歩き始めた。その歩みは、おぼつかない足取りといった表現がぴたりと当てはまる。

「あーぐわんぐわんする。そろそろ寝ないとなあ」

——彼は、まだ知らない。

「……あっ!？」

よく磨かれた床に足を滑らせ——

「うおっととつとつ……な——!」

ゴンツ!!

——気を失った後に、目の当たりにする世界を。

+

ゆつくりと瞼を開けた俺の眼前に映し出されたのは、見慣れた天井だった。

「んん……あつれ……?」

ここ、俺の部屋だ。提督に与えられる、執務室の隣の。確か俺、執

務中に休憩がてらコーヒー取りに行つて……いつの間に寝てた？

まあいいや、そんな些細なこと。ベッドの感触に全てがどうでもよくなりそうだ。

……そういえば、窓から差す日光が普段よりきついな。つてことは……。

「今何時だ……？」

俺は枕元の目覚まし時計を手にとると、寝ぼけ眼をこすりつつ、顔の前まで持つてくる。そして……驚愕。

「ヒトヨンマルマル!!」
「一四〇〇!!!」

ヤバイヤバイヤバイ!! 何時間寝てるんだよボケ!!!

一瞬心臓が止まった俺は文字通り跳ね起きる。朝も昼もすつぽかして眠つてたとなつたら、本日分の執務をまた徹夜でこなさないとならなくなる。

そんなの嫌だ!俺は咄嗟に制帽だけ掴むと、執務室に繋がるドアを勢いよく開けた。

「ごめん! 寝坊した!!」

俺の視線の先には、机に座り秘書仕事をこなす吹雪の姿。

「え? ついさつき寝たばかり——つて!」

彼女はその視線を手元の紙から俺の方へ向かわせると……ぼしゅつと音を立てて真っ赤になった。

「しし、司令官っ! 服っ……服!」

「は? 服?」

え、起床の衝撃のせいで服の事なんて思考の外だった。ハッ……まさか俺、今現在吹雪に視覚的なセクハラしちゃってる……!?

それはマズい。ただでさえ昨今はセクハラで訴えられる提督が多いんだ。俺は冷や汗をダラダラ流しつつ、自分の首から下へゆっくりと目を向けると……。

……え? 普通やん。

恐る恐る自分の格好を見れば、普段の提督の制服から詰襟とその下のYシャツを脱いだだけ、要するに下着のシャツと制服のズボンとிட்டた出で立ちだった。

これ、ずぼらで暑がりな俺にとって、普段通りの格好だと言っている。

うちの鎮守府の艦娘なら全員見慣れてるし、もともと今日の前にいるのは秘書艦の吹雪だ。一体何がダメなんだ???

「まて吹雪、今の格好の何がいけない？ 教えてくれ」

「何がって！ ええと……！」

俺の質問に、吹雪は頬から煙を出しながら目を右往左往させているだけ。何を答えあぐねているんだ？

「なあ、……もう！」

痺れを切らした俺は吹雪に詰め寄る。

「わっ」

ずいっと目の前まで迫ると、驚く彼女の両肩を軽く掴んだ。吹雪をしつかり見つめながら俺はゆっくりと口を開く。

「はつきり言ってくれないと分からないって」

「ひゅっ、おっぱ……胸！ 胸が……透けて……」

「むね……胸？ 俺の？」

俺の首の少し下の一点を凝視しながら、しどろもどろに答える吹雪。最後の方なんて消え入りそうな声で上手く聞こえなかった。

「ここがどうしたんだよ？」

俺は確認のために、着ているシャツの胸元を掴んでぐいと下へ引っ張った。

——ここだけの話、自分の体には自信がある。鍛えてるしな。何かおかしいことがあるならばつきり知らせて欲しい、俺の胸に異常があるのか？ …そんな軽い感じの行為だったんだが…

「~~~~~っ!!//// ……はふん」

「わっ……おい！ 吹雪！」

一度限界まで目をかっ開いた吹雪は……幸せそうな顔をして気絶してしまった。

「……なんでやねん」

そう呟いた俺の声は、誰に届くでもなく執務室の空気に溶けていった。

火照った頬、だらしなく緩んだ口元。吹雪はそんな状態で気を失っている。執務室の床に横たわった彼女を両手で支えながら、俺は必死に推理していた。

失神なんて、余程の感情の高ぶりが無ければ起こらないだろう。そして吹雪は俺を見て、怯えるような、竦すくむような目をしていったんだ。まてよ、もしかして……。

「艦娘にしか見えない幽霊とか？」

そんなのが俺の胸元に憑依してたりして。

うわっ！ やだなあ、お化けなんて深海棲艦だけで充分だ。自分で言っついて背筋がゾクゾクする。

もしかして除霊とかしなきゃいけないのか!? そんなスキル無いぞ……。

あ！こういう時に頼れる艦娘がいたわ。あいつ。

「……とりあえず明石の所に行くかあ」

明石の開いてる保健室で吹雪を寝かせて、ついでに俺も診て貰おう。

うちの鎮守府の明石は、酒保・開発室・保健室……と数多の居場所をもつスーパー便利屋、じゃなくてスーパーウーマンなのだ。

あいつなら幽霊が憑いてても、除霊魚雷とか作ってくれるだろう分。そう考えた俺は吹雪を背負って部屋を後に……しようとして、今の格好は（艦娘にとつて、少なくとも吹雪にとつて）良くない事に気付いた。

暑いけど仕方ねえ、詰襟着るか。

「吹雪ごめん、ちよっと待っててな」

俺はしぶしぶ自室のクローゼットから詰襟を取り出すと、袖を通した。Yシャツは着ていない。あれまで着たらそれこそ熱死するわ。

詰襟の内側でもう既に籠り始めた熱にちよっぴりイライラしつつ、改めて吹雪を背負った俺は執務室のドアノブへ手を掛けた。

「おーい明石、いるかー?」

鎮守府庁舎一階、『保健室』とプレートの下げられたドアを前にして、俺はその部屋の中へ届くような声を張る。しばらくして、パタパタと向こう側からドアへ近づく足音。

「はーい…あら?提督じゃないですか」

がちやり、と開かれて顔を出したのは、桃色の髪にエツちなスカート
の明石。

「よかった、ちょうど保健室に居てくれたんだな」

「はい、備品の確認に」

酒保に居たり開発室にいたり明石は忙しいからな。

「しつかりしてるのはいいが、無理は禁物だぞ。お前が倒れたらこの
鎮守府は立ち行かなくなる」

「いえいえ、提督こそお身体には——つて、吹雪ちゃん!」

一瞬俺の首元から脚までスーツと視線を流し、ちよつぴり頬を赤く染めた明石は、直後にぐったりとした吹雪に気付いた。ん? 吹雪に目が行くまでの様子に疑問を感じたけど…まあいい。吹雪の容態の方が大切だ。

「吹雪、執務中に様子がおかしくなつて気を失つたんだ。とりあえず
ベッドに運ばせてくれないか」

「ええ、もちろんですよ! 入ってください」

「済まない」

明石は俺達を通すと保健室のドアを閉め、ベッドに横たわらせた吹雪に軽く触れた。

「…うん。とくに問題は無いみたい。疲れたんでしょう、寝かせてい
れば大丈夫ですね」

「そつか…よかった」

シャツと仕切りのカーテンを閉めながら、安心そうに笑みを浮かべる明石。俺もほつと胸を撫で下ろす。

そしたら、今度は俺を診てもらおう番だ。

診察用の椅子に座ってPCを立ち上げた明石の横に、さらつと当たり前のように俺も腰かける。病院のよくある診察室のような風景だ。

「なあ明石」

「なんでしよう？ もう吹雪ちゃんは大丈夫——」

「さあ、除霊してもらって俺も執務にもどろう。」

「俺の体…診てくれないか？」

「はい……はい？」

ぴしっ、と明石の流暢にキーボードを打ち込む指が固まった。

「いま、俺の身体を見ろ」と？」

「え？ うん、診てほしいんだけど。胸」

「むむ胸っ!?!」

おわっ！ なんだよ急に。異様な速度で俺の方へ向き直る明石。心なしか鼻息が荒いような…。

「なんか俺の胸がおかしいんだ」

「えっ」

「触診とかできる？」

「ええええ!?!」

とりあえず明石に診察してもらって、何ともなかったら吹雪がおかしかったってだけの話だ。

そんな風に心の中で思いながら、クイツと詰襟のホックを外しにかかると。

「ちよ、提督?! Yシャツは?!」

「着てない、暑いだけだし。邪魔だろ？」

襟がだらしなく開かれ、胸元に冷房の涼しい空気が入り込んだ。最高。

「あわわわわっ、こういうのは私の部屋とか、そういうホテ…でするべきじゃ……!?!」

「(こ)じや駄目なのか？」

「ええあっ」

もう第2ボタンまで外した。あと1つも取れば診察に問題ない格好になるだろ。

詰襟のせいでじつとりと濡れた鎖骨の窪みに、首元から垂れた汗が流れ込む。ん、なんだか明石の視線が釘付けになってるような……？

……とその時。

「えつと、その……」

「なに？ もうちよつとで胸出せるよ」

「~~~~っ！」

顔と髪が同じ色に見えるほど赤くなってわなわな震えてた明石が、ふいに立ち上がった。

「どしたの」

「こ、こういうのはじゅ、順序が大事だと思いまふっ！」

「は？ ……あつ！ おい！」

「失礼しましたっ!!」

彼女はそれだけ言うどドアまで駆け出し、バタム、とすごい勢いで出ていってしまった。

取り残される俺と吹雪（寝てるけど）。あいつPCもそのまままでどこ行ったんだ。

「…なんだよ順序って……」

わけがわからん。もしかして診察券とか要るのか？

「というか、ここお前の使ってる部屋だろ……」

この鎮守府、一体どうしちゃったんだよ？

†

保健室のドアから廊下へ出て、頭にクエスチョンマークを浮かべながら執務室へ戻っていく提督。

そして、その様子を遠くから窺う1つの人影があった。

「ふんふん…そういう事ですか…フヒヒ」

物陰に潜んでいる彼女の伸びた鼻の下に、赤い液体がさらりと流れる。

「これはワンチャンあるかもですねえ！ …あ、鼻血が…ふごとつ」
薄紫の髪をひよこひよこしながら、彼女はティッシュを鼻の両穴に
詰め込んだ。

3.

保健室から執務室へ戻った俺は、机に突っ伏して頭を抱えていた。現在時刻はヒトゴーマルマル一五〇〇。俺がベッドから飛び起きてちようど一時間ほどか。……一時間!? 経過時間に対して内容濃すぎないか？

吹雪は失神するわ、明石は逃げるわ……俺、そんなに嫌われてたっけ？ ストレスで禿げそうだ。

「うーん……」

とはいえ、ここで唸ってたつてどうしようもないよな。俺のポリシーはポジティブシンキング(ということにしよう)、悩むより解決策を模索するんだ！

そう胸に決め、がばつと起き上がる俺。すると、以前買ったもの
持て余していたラジオが目に残まった。そうか、これだ。

「日常会話のネタを増やして艦娘とコミュニケーションだ！」

そう言い終わるや否や、ラジオに手を伸ばして電源ボタンを押し
た。会話が弾めば好感度も上がるだろ！ いや、上がってくれ！ 頼
む！

微かな希望を胸にしつつ、周波数のメモリを注視する。

これ、たまに使つても洋楽垂れ流しチャンネルを開いてばつかだつ
たしなあ。真面目そうな番組を探そう。

『ガガ…打った！ しかし打球は僅かにラインの…』

…アツハハ！ お前は妄想逞しい女子中学生か…

…男に嫌われないために。女のエチケツ…』

「ふああーあ、…まだ寝足りねえのかな」

ぼーっと聞き流しながらつまみを回す。昼下がりにゃ、まともなの
やっつてないかも。

『ザーツ ……そうですねえ。現在の日本が抱える問題として…』
「おっ」

あつたあつた。このチャンネルね。さーじゃあ仕事、再開すつかあ
！………とその時。

………コンコン。

『ひれいかーん!』

ん?…この声、あいつだ。なんだか少し鼻声のようだけど。

「入っていいぞ」

「ひつれいします!」

入室を許可すると、薄紫の髪を後ろにまとめた少女——青葉がドアから顔を出した。…その鼻には、捻ったティッシュが詰められている。

「おい、どうしたんだそれ」

「ふあい!」

俺が指摘すると、彼女はハツとした顔をしてティッシュを素早く抜き取った。

「…さ、さつき壁に顔ぶつけちゃって…アハ、アハハ」

「どんな勢いでだよ」

青葉は照れ隠しのようになり笑う。俺は呆れ顔をしながら手元の書類へ目を落とした。

「ティッシュなら酒保で売ってるぞ、悪いけどここには無いから…:ん?」

ぬつ。そんな擬音が似合うくらい、突然俺の机に影が落とされる。顔を上げると…至近の距離から、青葉が俺を見下ろしていた。

「そんな用事じゃないんです…:…提督う」

「えっ?…なっ」

急に猫撫で声となった青葉。彼女はその手を伸ばし、俺の頬に優しく触れる。

すらりとした綺麗な指先に目を奪われていると、気付けば彼女の顔がさつきよりも更に近くへと寄っていた。

突然の事に反応が遅れて思わず目を丸くする。勝手に顔が熱くなるのを感じ、羞恥で心臓が鼓動をいつそう強くした。

「おまつ、何のつもり——」

「言わなきゃダメですかあ……?」

「……」

吐息が鼻先にかかるほどの距離。俺と青葉はたったそれだけの距離で、しばらく無言のまま見つめ合った。

——青葉の顔、綺麗だ。頬を朱に染め上げ、目は潤んでトロンとしている。彼女の綺麗な双眸に引き込まれ、俺は視線を外せずにいた。そんな空間を最初に破ったのは、青葉の方からだった。適度な湿りを保った唇が開かれ、俺に向けて言葉を発する。

「司令官…私の大事なものを、司令官に貰って欲しいんです…」

「……っ」

「だから…司令官も私に、初めてを下さい」

……………。

……オイオイオイ。死ぬわオレ。なんだこれ普段読んでるエロ漫画か？ 素人童貞の俺にはどうすればいいのか分からねえ。とりあえずキスすればいいのか？

でも待て、これ俺、犯罪者にならないか？ もしバレたら、たとえば双方同意の上でも俺が一方的に憲兵にぶつ殺されるんじゃないのか……!?

でも、据え膳食わぬは…って言うよな!? よーし、するぞキス。キスするからな。……ってやっぱり無理！ 捕まりたくないもん！

「司令官……」

「おっふ」

俺が心の中で遲疑逡巡を繰り返している内に、青葉の顔がゆっくりと迫ってくる。

どどどうしよう。あつ、唇が触れ――

ガタンツ!!

「えっ」

「へっ!?!」

突然、執務室に響いた音。ビックリしてお互いふっと我に返る。

音の鳴った方を見れば、床にラジオが転がっていた。青葉が机に上半身を乗り出した弾みで落ちたんだろう。しかも、その衝撃で音量のつまみがグイッと回っていた。ほぼ最大の音量で、ラジオから音声が流れる。

『――近年増加している、女性による紳士暴行事件ですが――』

『――女は狼。気を付けなければなりませんよね――』

「……」

「……」

……は？ 女性による紳士暴行？

なんだそれ？ 俺は自分の耳を疑いながら前へ目を向けると……

顔は青ざめ、滝のように冷や汗をかく青葉の姿があった。

「……青葉?」

俺の疑問の眼差しをどう誤解したのか、彼女は「ひっ」と小さく溢すと、半開きの口から絞り出すように声を発した。

「す……」

「す?」

刹那。恐ろしいまでの脚力で後ろへ飛び退いた青葉は、空中で変形するかのように土下座を形作り、フローリングの床へ着地した。そして、絶叫。

「すみませんでしたああああ!!!」

さつきまでの猫を撫でるようなそれはどこへいったという張り上げられた声。果てしないクオリティのジャンピング土下座。そしてそれを視覚と聴覚で一身に受ける俺。なんだこの光景。

えっ??? なに? なんで?

「どうか、どうか憲兵にだけはあああ!!」

「まっつて、青葉、なあ」

「ああああ!!」

「おい!」

俺は100点満点の土下座を披露する青葉の元に駆け寄り、無理やり起き上がらせる。

青葉の顔は鼻水ダルダルに真っ赤なおでこと、なんとも情けない状態になっていた。先程とは180度意味合いが違う潤んだ瞳の彼女に、俺は問いかけた。

「質問なんだけど、いいか?」

「はひ?」

「紳士暴行って……なに?」

+

……なんだよ、それ。

「青葉、冗談じゃない、んだよな……」

「社会の摂理じゃないですか!嘘なんてつきませんよ!」

青葉曰く、世の中の女性は性欲を持て余し、男性はそれらを忌避しているらしい。

俺の知ってる社会の通念とこの世の中の常識は……貞操観念が男女で逆転している。つまり……「処女は捨てるもの」であり、「童貞は守るもの」だと。

彼女を信用しきれずテレビもラジオもつけて確認したけど間違いない。これは……事実。

「でもさ、青葉はさつき、俺に初めてをあげるーっていったよな？」
「えと、それは……」

これってつまり、『俺の童貞やるからお前の処女よこせよ！』って女に迫ったのとイコールってことなんだよな……？ ヒエツ。

「……キモツ」

「うっ……。そ、それは司令官にも原因があるんです！」

俺の何気ない一言がグサリと突き刺さったみたい、青葉は膝から崩れ落ちる。言われてみれば、なんだか俺と同じ童貞臭が青葉からするよな気がしなくもない。

「原因って？」

「私、見たんですから！ 明石さんを身体で誘惑する司令官を!!」
「……え」

え、もしかして俺が診てもらおうとした時？

あの時の明石がキョドってたのって、勘違いをしてたのか？ エツチな方向に？

ってことは吹雪も俺の胸を見て……？

……そういうことだったのか。頭の中ですべてのピースが噛み合ったような感覚。でも……。

どうしても言いたい。俺は深呼吸すると、声を張って青葉に突っ込んだ。

「おまえら中学生か!!」

番外編：提督、現実を受け入れるべし

とある鎮守府、深夜。

広大な施設の目と鼻の先、波打つ海にやや欠けた月の光が乱れて映る。空から海からと照された鎮守府庁舎は、その煉瓦レンガの重厚な赤をやわく浮かび上がらせていた。

穏やかな風に乗れ、波の音ねが陸おかに届く。そんなごくごく平凡な夜に、とある一箇所だけが地獄の様相を呈していた事を知る者は居ない。

——現在その中心で泣き叫ぶ、提督以外は。

「おおおおおおおん…おおおおおおおん…」

ここは提督私室。明かりの消えた部屋、他愛のない番組を映すテレビの前には、持ちうる全ての希望を打ち砕かれたかの様な提督が声を上げ続けていた。

彼は何故この姿となったのか？ …その理由は、今から数時間前まで遡る。

†

——提督が発狂する数時間前。

「まじかよ…ここ、異世界って事か…?」

青葉を追い出した後に夕食を終え、執務を再開した俺。

…が、ここが貞操観念だけが逆転した世界だということを知って、はいそうですかと割り切って職務に集中できるほど俺は賢くない。目の前の文書に意識が行かないのは当然の事だろう。

しかも秘書艦ふぶきが未だに保健室で寝ていることもある。それらが相まって、書類は一向に捌けずにいる。

「あーくそ、中断だ中断。あれを見よう」

だが、別に前の世界でも集中が途切れることくらい幾度となく経験している。そういう時のために、俺は秘策を持っていた。これを使えば、俺は精神的、身体的休息を経てベストコンディションへとなることができるんだ。

机の一番下の引き出しに手を掛ける。そこにはシンプルなケースに入ったブルーレイディスクが何枚か丁寧に並べられていて、そこから1つ取り出すと、俺はそそくさと私室へと入っていった。

「ふんふん♪」

鼻歌交じりに私室のテレビの電源を点け、それに接続されたブルーレイプレイヤーのラックにディスクを差し込む。

何を隠そう、このブルーレイディスクは……ゆるゆりの録画だ。AVなんかじゃないぞ。

百合はいい。最高だ……。俺はテレビの画面の前で正座待機する。もう間もなく再生されるな、あかりんを呼ぶ準備をしなきゃ。俺はスーハースーハーと呼吸を整える。

よし！ 始まった。俺は両手を口の横にそえて声を発した。
せーの！

提督 「あっかりくん！」

男共の野太い声 『たっかしくん！』

そうそう、このコールが無いと――

……。

……………ん？

「……………ふえ？」

たっかしくん？

この瞬間、頭の中で最悪のシナリオがよぎった。その間0.3秒。俺の全身の毛穴という毛穴から汗がぶわっとにじみ出る。

待て…待ってくれ…貞操観念が逆転…異世界……つてことは。

走馬灯にも似た俺の果てしない思考の渦は、目の前に流れる番組によつて半ば強引に断ち切られた。

たかし 「はアーアーい♪」

提督 「」

たかし 「ゆるばら、はーじまーるよー！」

う…うわあああああああ!!!

野太い声と共に画面下から現れたのは、たかしだった。…誰だよたかしんって！ こんな丸刈り筋肉ダルマが影薄いキャラな訳ねえだろ！

俺は瞬時に再生停止ボタンを凄まじい指圧で押し込み、ディスクを取り出した。これは、悪い夢だ、疲れてるんだ…。気を取り直して、桜trickを見よう。な？ それが終わったら執務に戻るんだ。

心の中で必死に自分を励ましながら、執務室へと引き返す。俺は引き出しの前で屈むと、桜trickを探し始めた。

「ええつと…」

あのアニメのディスクには、しつかり『桜trick』って油性ペンで記してある。記してある筈なんだけど。

…おかしいな、『薔薇magic』しかない。ねえ…ねえ…僕の桜trickはどこ？ こんな明らかに明らかなアニメ知らないよ…。

いや、再生してみないことには…。やってみよう。ポチっ。

——この行為が、提督の精神を崩壊させる決定打となったのはいまでもない。

4. ★

B e e p B e e p B e e p ! ! !

時刻は〇六〇〇^{マルロクマルマル}。夏という事もありとつくに空高くへ登った陽の光が、カーテンを突き抜けて窓から届く。：俺がこの世界に迷い込んでから初めての朝だ。

「…んあ」

まぶたの重さに目を開けられぬまま、俺はやかましく鳴る目覚まし時計を止めるために、腕を音の方向へと伸ばす。カチリ、という音とともに目覚まし時計は黙り込み、提督私室は静寂に包まれた。

「んんん~~~~っ」

大きく伸びをして、俺は起き上がる。

「さーて、メシメシ」

例えへんな世界へ飛ばされたって、提督として職務を全うしなければならぬのは変わらない。これでも1つの鎮守府の主なんだという自負が、俺の頭を冴えさせる。

…ってのは嘘。内心不安で一杯なんだけど、トップがガクブルしてるのを部下に見せるわけにはいかないし。

まあ好きだったアニメが地獄みたいな内容になってたけど、それはそれだ。ひとまずはいつも通り朝飯を摂って、執務を再開しよう。

†

……やっぱり詰襟暑いよ!!

俺は上下を寝間着からしつかりと制服に着替え(ただしYシャツは着ていない)、食堂に向けて歩いていった。艦娘達の反応を見るに、もうシャツ1枚で出歩けないのか…これは結構なストレスになるなあ。

せめて襟のホックだけでも外しておこう。そう思い立って首元へ手を掛けていると、廊下の隅で何やら立ち話をする艦娘達が目に留まった。あれは……秋雲と浦風、それに深雪だ。

「提督の夏服、ズボンの生地ホンツト薄い。パンツを透かさない為に色々気を付けてる提督とか、妄想捗るう！」

「かーっ、最高じゃねえ！ そういえば二人とも、提督さんの新しいブルマイド買った？ ぶちシコれるわ」

「ちつちつ、お二人さん遅れてるう。写真や妄想より、昨日の司令官の方が過激だったって話、知ってるかい？」

「ほお……っ？」

三人とはまだ距離があるから会話の内容は聞こえないけど、きつと可愛らしい話題なんだろう。駆逐艦の年相応な、これまた可愛らしい笑顔にほっこりする。

なんだかとても仲良さそうだ。あの組み合わせは結構意外だな。近づいたらちよつと声掛けてみるか。

「……そうしたら、吹雪に近付いて来た司令官が！」

「ふんふん！」

「下着姿のまま、あいつの肩を掴んで！」

「ふんふんふん!!」

「下着をずらして——」

「おはよ。俺がどうかした？」

「——へっ？ ほげええええええ!!」

「おわっ！ 何だよ!？」

ポン、と俺の胸元くらいの身長しかない深雪の頭に軽く左手を置きながら、心穏やかに三人に話しかけた——んだが、何だかすごいビビられた。ショック。

「しし司令官っ！ い、いつから聞いてた!？」

「え、お前たちの話を？ いや、俺の名前が出てたくらいしか聞こえなかったぞ」

「そ、そうなんか」

「ほっ…」

なんだよ気になるじゃないか。…まあ、乙女の会話を詮索するのもあれだし、聞いたあたりはしないでおこう。

「そういえば深雪、お前今日遠征だろ。早く朝飯食べて準備しとけよ？」

「お、おう…」

「じゃあなー」

手をヒラヒラと振りながら、三人の元を後にする。何だか三人とも俺の方を向いた途端に顔を赤くしてたけど、どうしたんだろう。

†

提督が3人の元を離れ、食堂へ向かっていった後。

「なあ、今…司令官の…」

「うん、襟のホック外れた。見えてた」

「…うち、ちよつとトイレ行って来るけえ／＼ このまんまじや

ご飯に集中できへんわ」

廊下には、提督の胸元を見て頬を朱に染め上げ、悶々とした駆逐艦達を取り残されていた。

†

廊下の突き当たりにある、両開きで固定された大きなドア。その奥からは、食欲をそそるいい匂いや食器の擦れる音、艦娘達の活気ある声が廊下まで届いていた。

ここは食堂。朝昼晩と鎮守府の腹を支える重要な場所である。

…とまあそんな説明は置いて、俺は食堂に足を踏み入れた。混み具合は…普通かな。朝食は6時から8時までの間の自由なタイミングでご飯を食べてもらってルールにしてるから、結構人足がバラつくんだ。

「あ、提督ーっ、…っ！／＼／＼」

「おーす」

俺を見た艦娘がニコニコと手を振ってくれる。当然俺も笑顔で返す。うんうん、我が鎮守府の上司と部下の仲は良好だ。

朝食を受けとるカウンターの横に設置してある、今日のメニューのイチオシとささやかな挿し絵の書かれたブラックボード。これの前に立ち止まった俺は、何を食べるかに頭を悩ませる。

今日の日替わりセットは…パンにオムレツか。うーん、常設の焼き鮭定食も魅力的だし、白米かパンかで迷うなあ……。

…と突然、悩んでいる俺の元に駆け寄る艦娘が一人。

「提督っ」

「お、明石じゃないか」

「はい、おはようございますー！」

昨日男子中学生ばりの勘違いをして俺の前から姿を消した明石じゃないか、という言葉は心の中で押し殺す。すると、明石は済まなさそうな顔をして、上目遣いに俺を見つめた。

「提督、昨日はすみません」

「え、どうしたんだ急に」

心の中を読まれたかのような明石の台詞にギクツとなった。どうやら勘違いをした事くらいは流石に分かってんだな。

…と思ったんだけど、次に明石の続けた言葉に俺は啞然とする事になる。

「提督の気持ちを踏みにじるような真似をしてしまいました」

「はっ」

「提督。私、必ず貴方に見合うような女になりますから。それまで待っていてくださいー！」

…おい、これって…もつと勘違いしてないか!?

「ええと……」

「それはそれとして提督！ 一緒にご飯食べましょう?」

「あ、ああ…うん…分かった……」

段階、段階…と呟く明石に手を引かれ、俺は弁明の余地なく朝飯を

食べる事になった。

明石なあ：どうすんだこれ。あいつを傷付けたくは無いし、上手いこと解決策を探らないと。

†

やけに馴れ馴れしくなった明石と朝飯を食べて私室に戻った所で、昨日の俺は（ゆるばらシヨックにより）失意の底で風呂にも入らずに寝てしまったことを思い出した。：つてことは、下着も替えていない。

「……あつー！」

やばい、今身に付けてる下着を洗濯してもらう為には、あと5分以内に浴場横の洗濯所に向かわないと。俺は替えの下着と垢擦りを持って、急ぎ足でそこへ向かった。

「おーい、鳳翔ー！ー！」

この鎮守府は、各艦娘の洗濯物や鎮守府の掃除を鳳翔が進んでこなしてくれている。彼女が洗濯を始めるのは朝の決まった時間であり、それまでに間に合わなかったものは次回の洗濯に回されてしまう。

服や下着を最低限の量しか持っていない俺にとつて、洗濯を一日逃すというのは大惨事（穿くパンツが無くなるんだし、大珍事のほうがいいか）につながる。俺は洗濯所に着く前から鳳翔を呼び止めようと必死になっていた。

「お呼びですか、提督？」

「お、おはよう鳳翔！ もう洗濯はじめちゃった!？」

「いいえ、まだですが」

ゆつたりとした仕事で洗濯所のドアから出てきた鳳翔は、穏やかな笑みを湛えつつ俺に受け答える。よかった、まだ始まっていなかった。けど鳳翔の仕事の邪魔をしないためにも、早く脱いで渡さなきゃな。

「わるい、俺の下着も洗ってくれ。今すぐ脱ぐから！」

「ええ、いいですよ——って、ちよつと！」

「え、なに？」

ん？あの鳳翔が急に取り乱したような声色で話しかけてきた。珍しいな。

「ここで脱ぐんですか……!?」

「あー、はしたないよな……ごめん！むこう向いてて！」

「は、はいっ！／＼／＼」

くるつと180度身体を回した鳳翔は、なんだか余裕がないといった感じでそわそわしている。俺が洗濯を始めるギリギリで来たから怒ってるのかな。

上は詰襟を脱ぎ、下はベルトを外してストンとズボンを落とす。ちやつちやとシャツ、パンツを脱ぎ、改めて制服の上下を着付けた。いわゆるノーパン状態だけど、すぐに風呂入るんだし良いだろう。

「終わったよ。はい、これ」

「あう、はい……」

「悪かったな。よろしく頼むよ」

今までつけていた下着を手に持ち、鳳翔に渡す。さあーて、もう心配事はない。ゆつたり風呂に浸かろうか。俺は洗濯所を後にした。

+

しゆるしゆる。ばさっ。

今、私——鳳翔のすぐ後ろで、提督が服を……下着を脱いでいます。ばくばくと鳴る心臓と勝手に熱くなる両頬を感じ取りながら、提督が呼び掛けてくれるのを待っていました。

「終わったよ。はい、これ」

そして振り向けば、提督の手には上下の下着が。私は口から心臓が

飛び出そうになるのを必死で抑えて、それを受け取りました。あ、温かい…。

これは、股間に悪い。

「悪かったな。よろしく頼むよ」

じゃな、と洗濯所を後にする提督。洗濯所にポツンと残される私。両手に伝播する温もりに気をとられ、ろくな返事もできないままに提督を見送ります。

静かになった部屋の中を、まるで私の心臓の激しく打ち付ける音だけが支配してしまったかのように思えて。いつの間にか私の頭は1つの事しか考えられなくなっていました。

「提督……」

下着を手渡しされるとするのは、それほど私が信頼されているという証なのでしょうけど。

——ごめんなさい。

「……てい、とく」

ごめんなさい——。私はこれを目の前にして淑女で居られるほど……出来た女では無いんです。

†

気付けば私は、両の手で彼のパンツを鼻先まで持ち上げて居ました。そしてそのまま、呼吸。

…クン、クン…

「……はあっ」

提督のものがあつた場所から漂う独特な臭みが、私の鼻腔から頭を突き抜け、全身に緊張を促します。

……くん、くん。

落ち着きを完全に失つた私は、呼吸が浅く乱れていることにも気付かず、意識が弛緩していくままに身を任せていました。

くんくん。

じわじわと全身に熱が生まれて、身体中の汗腺と秘所からにじみ出る水分が、私の服…下着をじつとりと濡らして。目元に涙が溜まり、視界が潤みます。

それだけでは飽き足らず、私はパンツを裏返し、股間と臀部とを繋ぐ布の部分に鼻を寄せると——また一呼吸。

くんくん…くん。

「…っ、っー」

先程より一回りも二回りも濃い匂いに、心臓の昂りは最高潮に……。

頭、おかしくなりそう…。もう我慢できない。

私の右手は提督のパンツから離れ…胸、へそ、鼠径部と身体を下つて、袴の上から股へと寄り添い。

そして――

…しゅり、しゅりっ…

「んうっ」

しゅっしゅっ…しゅっ…

――刺激、それに伴う快い感覚。

ごめんなさい、ごめんなさい提督。私は……。

しゅっしゅっしゅっしゅっ。

「はっ、はっ……」

紅潮した顔でパンツに鼻をうずめ、ひたすらに快樂を貪る。

性に目覚めたばかりの女子中学生か、盛りのついた獣のように自らの肉欲を優先するさまに、何故だか恥ずかしさよりも興奮が勝っていました。

…しゅっ…ちゅっくちゅっ…。

いつの間にか、袴の上からでも粘り気を帯びた水音が聴こえるほどに、その激しさと気持ち良さは増していました。

「提督…提督…んっ」

羞恥や罪悪感を押し退けて、頭の中は興奮でチカチカとしています。す。

口から垂れた涎も、ぽたりと足の間から垂れてくる液体も気にしている余裕はなく、ただひたすらに秘部に甘い快感を送り続ける事しか

出来ず。

——ぞくぞくっ。

「っ……！　もう……？」

やがて快感の波が普段のそれでは考えられない早さで秘所に収束していきました。…右手の指先で擦り続ける、淫らな肉芽の先端へと。でも、私の頭はそれを拒否していました。

——いやっ、まだ…終わらせたくない。

——嗅いでいたい。続けていたい。気持ちいい。いきたくない。やだっ。気持ちいい。気持ちいい。気持ちいい…。

「はあ、はあっ…はあっ！」

くちゅくちゅつくちゅつくちゅっ。

しかし勝手に荒くなる吐息と強まる右手の圧に、私の願いは簡単に却下されてしまいます。

鼠径部が痺れ…いく感覚が近づいてきて。

「…っ、いく…！」

ああ…もう、駄目え…っ！

——いくっ！

…あ——。

「——ふうふうつつ！ んんっ、んっ……！」

限界を越え。

視界は白み。

——秘所の、幾度の収縮。腰が勝手に跳ね、膝ががくがくと震えま
した。

「はあ、はあっ……！」

抑えても抑えても、殺しきれない声。それと共に私が一度目の絶頂
を迎えるまで、それほどの時間は掛かりませんでした。

†

大浴場、更衣室。この時間帯は艦娘は利用しないため、提督おれが独り
占めできる。やったぜ。

さあ、服を脱いで風呂へ——という所で、重大な事に気がついた。

やべ！靴下を洗濯に出すの忘れてた！

先程まで靴を履いていた事もあり、もう一つの下着の存在を完全に
失念していた。

これも洗濯を逃すと大変だ……すぐ鳳翔の所に戻らないと。俺は靴
下を手に持ち、裸足で革靴を履くと廊下に出た。

とその時。

『——ふうふうつつ！』

隣から声が。あれ？この声、鳳翔か？ まあいいや、靴下靴下！

「悪い、鳳翔！ 靴下も——ん？」

「はっ…、…っっ!？」

ばつと洗濯所に顔を出した俺の目には、顔を上気させた鳳翔と――裏返しになった俺のパンツが映った。

そして、俺に気づいた鳳翔はみるみる目を丸くして黙り込む。

「……」

「……!!」

えっと、どういう状況？

真つ赤な鳳翔に、裏返しのパンツ。……あ、分かったかもしれない。これはつまり……。

「なあ、鳳翔」

「は、はい」

「……ごめん！ パンツを洗濯するときは、裏返しにしないといけないんだっただよな！」

俺は両の手のひらを合わせ、精一杯申し訳なさを表現しつつ彼女に謝った。

「っ！ え、ええ。次からは気を付けてくださいね。あと、靴下もまだ間に合いますよ」

「助かった！ ありがとう」

今度こそ洗濯するものは全て出したはず。そう確信した俺は、再び浴場へと戻っていった。

†

解体。その二文字が、提督に自慰を見られた私の脳裏をよぎりました。

「……」

「……!!」

こんな姿を見せられて、提督は怒っているかもしれない。もしかしたらこんな私に落胆しているのかも。

どうしましょう、こうなったら舌を噛みきるか…と迷っているところに、突然提督からの謝罪が。

「ごめん！ パンツを洗濯するときは、裏返しにしないといけないんだったよな！」

——え？

勘違いしているのでしょうか…？ 手を合わせて腰を曲げる提督を見ながら、私は戸惑いました。

「ええ。次からは気を付けてくださいね。あと、靴下もまだ間に合いますよ」

戸惑いながらも半分冷静に、口から出任せが飛び出しました。

「助かった！ ありがとう」

そう言い残してまた去っていった提督の背を見ながら、私はハッと気付きました。きつと、提督は私の痴態に気付きつつも、私のために空気を読んでくれたのですね。

はあ…：…なんていい男。女を立ててくれる気遣いも、寛容さも持ち合わせている。

私の…：私の男にしたい。小さく火の点けられた欲望は、心の中でみるみる内に大きくなっていったまま、頭の中を支配していきました。

5. ★

「はふう〜」

大きく息を吐きながら、ゆっくりと湯船に浸かる俺。

んああ…最高。心の洗濯とは良く言ったもんだ。この大浴場の湯に洗われて、心が次第に蕩けていくような感覚に包まれる。

「……」

肩の少し上にまで湯が来るよう沈み込むと、俺はリラックスした脳みそで改めて現状を整理する。

「……洗い場の石鹸、大分すり減ってたな」

あと1回分も身体を洗う量は無さそうだな。

「……じゃなくて」

両手でお湯を掬って、ぱしやりと顔に打ち付ける。この風呂場の事なんかどうでもよくて……考えるべきは、今の俺の状況のこと。

ちよつと前から世界がおかしい。俺に対する艦娘の反応が今までと変わっている。なんとというか、元の世界の童貞共おれたちを見ているような……、オトコとオンナで価値観があべこべというか。

一回、艦娘の心境を俺に置き換えて考えてみよう。この世界ならそれが通用するはずだ。

「えーと……」

まず、美人（）な女上司がいて、俺がその部下で。そいつは男とおんなじノリで絡んでくれる。チラリズムとかにもあんまし無関心で。でも、俺は童貞だから自分から手を出そうだななんて夢にも思わないんだ、勇気が無いから。しかしオカズは山盛り。シコリまくり。

……つまり。

「そうだ……」

そうだよ。

つまり俺は……いつも通りでいいんだよ。俺が今まで通りに振る舞うだけであいつらが勝手に興奮・発散してくれるんなら。

性欲を持て余してる艦娘にとつて、変にムラムラを溜め込むより断然良いじゃん。近隣住民相手に強漢事件なんて起こされたらたまつ

たもんじやない。

娘のように接してきた艦娘達だ。俺から誘う気もないし、向こうからも襲ったりしないだろう。よっぽどの奴でもない限り。

「…うんうん、俺は変わる必要ないんだなあ」

湯船の縁に背をもたれかけ、顔を上に向ける。なみなみと注がれ続ける湯が、タイル張りの床へ溢れる音が心地良い。なんだか頭がすつきりしたぞ。

しばらくそのままで一息つくと、頭に乗せた手拭いを落ちないように押さえながらザバツと立ち上がる。

軽く体の水気を落とし、がらがらと磨りガラスの引き戸を引いて脱衣場へ。

「パンツパンツ、と…」

頭にバスタオルをかけ、自分の服の入った脱衣かごからボクサーパンツを取り出した。

とその時——。

「ツ!? し、しし司令官っ!」

「…んあ?」

脱衣場の出入口から、素っ頓狂な声が。

「お、朝潮じゃん」

振り向くと——顔を真っ赤にした朝潮が、目を真ん丸にしながらこちらを凝視していた。……がすぐに浴場の暖簾の向こうに顔を隠す。

「ぐ、ぐ、ぐ、ぐめんなさいっ!」

「へ?」

朝潮型一番艦・朝潮。沢山の姉妹を纏めるお姉ちゃん艦だ。

そんな彼女も今は艦装を外し、通気性の良さそうなシャツと短パンをしつとりと汗で湿らせた出で立ちだった。偉いな、朝練してたのか? そんな彼女の肢体は成長期を主張するまろやかな曲線を描いていてなかなか艶かしい。

「っあの、そのですね! 朝の鍛練を終えたので、朝風呂をとでも思いまして、その——」

そうそう、言い忘れてたけど、うちの大浴場は男湯・女湯の隔てが無い。まずもってここは艦娘用であって、提督の利用なんて考えられていないのだ。この場合、悪いのは完全に俺の方。

「と、とにかく、また出直しま——」

それにしてもすごい慌てようだ。あのしつかり者のこんな姿が見れる日が来ると思ってたから、ちよつと笑える。そんな風に思いながら、俺は手で招きながら朝潮を引き留めた。

「まーまてまて。早く風呂入って疲れを取りなつて。俺もう出るし。脱ぐのが恥ずかしいなら絶対見ないようにするからさ」

「えっ！　そ、その、私は構わないのですが、司令官はそれでいいのでしょうか……」

「俺は全然気にしないよ。元はと言えば、俺が変な時間に風呂に入つたのが原因なんだ」

「う、うう……」

俺からの冷静な物言いの説得に押し負かされたのか、朝潮はしばらくしておずおずと脱衣場の暖簾をくぐつた。

「……失礼します」

「はいよ」

「……ッ！」

その顔はさつきと変わらず真っ赤なまま。普段の堅物さは何処へやら、だ。……と、彼女は視線をこちらに一瞬向け、すぐに床へと落とした。

……ん？　俺は改めて現在の自らの姿を確認する。

身に付けているのはパンツのみ、それに首からタオルを下げた姿。ああ、これは刺激的かも。

さつき風呂場で至った結論通り、俺はなるたけ艦娘^{かのじよ}たちの性事情に無関心でいようと思う。それがあいつらの発散の手助けになるなら、それ以上の事はないし。——という事で、俺は自らの肌を惜しげもなく朝潮に見せつけるのだった。

今、俺の後ろの脱衣かごに衣服をしまっている朝潮。頭を拭く俺を半分恥ずかしそうな、半分血走ったような瞳でこちらをチラ見している。隠してるつもりなんだろうがバレバレ……。すげー視線を感じるし、めっちゃ興奮してそう。

「司令官」

「どうしたの？ うん？」

朝潮の声に振り向けば、全裸にタオルで股間を隠しただけの彼女の姿が。少しドキツとする。

「いえ……。すみませんでした。それでは」

「いやいや。ごゆっくり」

律儀に先程の事を謝る朝潮。彼女はそう言い残し、摺りガラスの引き戸に手をかけると浴場へ入っていった。

本当に、女の方が肌を見せる事に抵抗が無い。まだまだ慣れないなあと思いつつ、さっさと服を着てここを後に——しようとして。

「……あ、石鹸」

身体を洗う石鹸の全部が全部、もう小さくて無くなりそうだった事を思い出した。朝潮が困るだろうし、渡しにいけないと。

俺は脱衣所の備品置きから石鹸を一つ取り出して、引き戸の前へ寄る。……。ん？ 耳をすますと、湯口から響くのととは別に水音が聞こえる。ちゅくちゅく？ みたいな。

ああ、そうか。少ない石鹸で必死にタオルを泡立ててるんだな。もっと早く気付くべきだった。

がらり。

「悪い悪い。朝潮、新しい石鹸を——」

そこで俺は。

「んツ、はあ——は？」

ちゅくつ……。。

「え——」

左手を胸に、右手を股間に置いて忙しなく動かす朝潮と目が合った。

何分間硬直しただろう。いや、本当は何秒間だったのかもしれない。

とにかく、俺が手に持っていた石鹼を滑らせて落とした音が浴場に響くまでは、確実に二人の時間は止まったままだった。

こちらに身体の右側面を向ける形で、顔だけ俺を正面に捉える朝潮。俺の目に、バスチェアに腰掛ける丸いお尻と、頂点が充血した乳を弄る左手と……中指をピンと張って股間のある一点をくにくにと押し潰していた右手が飛び込んでくる。

え……これ、もしかしなくてもアレ、だよな。

理解が追い付かない。そんな俺と目を突き合わせつつ、脱衣場に入った時よりも顔を真っ赤にした朝潮。彼女は両手をそのままに、焦点の合わない目でわなわな震えながらぼつりと呟く。

「こ、これは……司令官の裸を見てしまったので、触って、います」

「……う、うん」

何の意味があるか分からない突然の自白に、俺はうんと頷くことしかできない。

「だから……司令官のせいです」

「そっ、か……」

——はい？

混乱、の2文字につきる。羞恥心で脳ミソがオーバーヒートして、今していた行為の説明を始めた駆逐艦と、ただただ相槌を打つことしかできない提督^{おれ}。

頭がボーっとしてきた。これはこの浴場の気温のせいか。それとも……。

「朝潮の乱されたメンタルを……平常に戻す必要がありますので、自慰が必要です。自慰を続けます。メンタルを乱した本人である司令官は、責任を持って……最後まで見ていて下さい」

「……うん」

朝潮も自分も、今めちやくちやなこと言っている。それしか分からない。とにかく彼女の言葉に従う。

俺は後ろ手に浴場の引き戸を閉め、こちらに身体を向けた朝潮の前にしゃがみこんだ。

「いよいよ」

彼女の目を見る。すると朝潮は、両手の動きをゆっくりと再開させた。

「ん……っ」

しなやかな左人差し指でなだらかな胸元の肌色と桜色の境をなぞり、何週目かに一度、それに親指を足して突起をやさしく啄む^{つば}。

くに。くに。

二指で僅かに乳頭へ圧をかけるたび、朝潮の整えられた眉が悩ましく歪みを見せた。

ちらり、ちらりと俺を盗み見る朝潮。しゃがんでいる俺と座り込む彼女の視線は同じ高さだ。目の前で悶えている、淫らで、上気した……美少女。

彼女はその視線を少し下にずらすと、いつの間に怒張っていたのか、俺の股間で脈打つモノに少しだけ目を見開いた。更に昂ったのか手の勢いを強めつつ、そこばかりを凝視し続ける。

「ッ……い」

右手は下腹部を刺激している。突っ張った中指を上下させ、僅かに産毛の生え始めたクレバスを行き来したかと思えば、その最中に指へと絡んだ透明な粘性の液を湛えながら、別の指で陰唇を左右へ押し開いた。

柔く指を押し返そうとする張りのあるひだを歪ませながら、露^{あらかわ}になる中身。まだ誰にも踏み入れられていない最奥部から溢れだす蜜は、てらてらと浴場の照明を淫らに反射していた。

その中でもフードを被った真つ赤な芽に狙いをつけると、粘性を塗り込むようにして押し潰す。

くり。くりゆっ、くに。

「っ……はあっ！ん……」

きゅつと目を瞑る。呼吸が乱れる。吐き出される息は温い。時折自ら塗り込んだ液で滑ったかのように素早く肉芽を擦れば、普段の朝潮からは想像もつかない嬌声が。

投げ出すように開かれた両足の間で行われるそれに反応して、年相応の可愛らしいお腹がひくりと、淫裂下の菊門がきゅつとすぼんだ。彼女の全身が、まるで別の生き物とでも言うように、野放図に反応を示している。俺はその様をただ眺めていた。

くに、くに、くちゅ、ちゅくつちゅくつ。

そんな様子が幾らか続き、水音ばかりが勢いづいていく。やがて、朝潮の蕩けた表情は一転して、切迫した目で俺を見つめ始めた。

「司令っ、官……！ しれい……っ」

「ん」

俺を呼ぶ声。

「はぁ……っ、はぁ……ぁー！」

ちゅつくちゅつ、ちゅつちゅつくちゅつ。

きれいな両膝ががくがくと震える。姿勢は崩れ、尻が少しずつバスチェアの前にずれていた。座席でいうリクライニングの形とでもいうか。

秘所の充血も、粘性の量も最高潮。もうすぐいくのだろうが、何か物足りなさうだ———とと思ったところで、朝潮の爪先が、彼女の体重を支えながらも突っ張っていることに気付いた。

「朝潮。足、伸ばしたい？」

「ッ！ ……」

ボーっとした頭で訊く。悩ましい顔でこく、こくと激しく頷く彼女を見て、俺は朝潮の望みのままに、背中側に回った。

「はぁ……はぁ……ぁっ！ あ……っ！」

後ろから腰に手を回す。張りのあるその肌は熱を帯び、淫らな匂いでクラクラする。

「いいよ、足ピーンってして」

なんとか意識を保ちつつ、耳元で囁いた。直後、俺を背もたれのようにして徐々に体重を預ける朝潮。

浴場の鏡越しに、彼女のすらつとした太ももが、きれいな足先が一直線になる様を目にする。それにつれて、朝潮が自らを責め立てる手も、嬌声も、激しさを一層増していった。

「司令官、わたしっ、なっちやう……！」

ぢゅっ、ぢゅっぢゅっぢゅっ。

肩越しに見る朝潮の恥丘。その中央で存在を主張する淫らな核は、今やもう擦り潰されんばかりに手指に蹂躪されている。

「しれっ、きちやう……！ きちや……っ」

全身にぎゅつと力が入っているのが分かる。やがて――

「もう来ちやう！ んんっ……！——んああっ！ ああっ！」

ぢゅくぢゅくぢゅっ——びくっ、びくっ！

朝潮の手が肉芽を押し潰したままに止まり——痙攣。秘所からどつと押し寄せる快感の波に何度も打ち震え、我慢できずに声が漏れる。

「はああ！ ん、んっ……っ！ ……はあ、んぐっ……」

びくん！ びくっ……！

俺に背を預けていることすら忘れ、鏡越しにイキ顔を晒す朝潮。口端から垂れた涎が、腰に回す俺の手にかかった。

「はあっ……きもち、いい……」

ピンと伸ばされた肢体は、朝潮が落ち着くに従って萎えていき……脱力。俺の胸元に頭をもたれさすと、虚ろな目で天井を仰いだ。

「はあ、はあ……」

「……満足したか？」

こくり、と弱々しく答える朝潮。今にも眠ってしまいそうだと言いたげに、ゆっくりと瞼が下ろされる。しかしそれは中断され、彼女は急に目を見開くと首だけを起こす。

「……あ、嘘っ、嫌……！」

「ん、どした？」

だらりとしていた両手で股間を押さえる。焦りの表情だ……が、それもすぐ緩んだ。

「んんっ、はあ……」
「しよろろろろ……」。

彼女の指の隙間から、微かに色づいた液体がタイルへ溢れだす。お漏らしだ。ほっとした表情の彼女は遂に——眠りに落ちていった。

†

「本つつつつつ当に申し訳ありませんでした!!」

後日、執務室。そこには小さな額を擦りきれそうなほどフローリングに押し付ける朝潮と、それを前にして慌てる提督の姿があった。

「司令官になんとという無礼を……。この朝潮、解体でも割礼でも受ける所存です……!」

「いやいや! 何もしないから! とりあえず土下座をやめよう!? なっ?」

あの後、一人残された提督は一通りの介抱をした後、大浴場で朝潮がのぼせていた”として他の艦娘に託し、自身は全休を取って日が暮れるまでシコった。

翌日の少しやつれた提督を見て、艦娘達はかよわい男に女の介抱をさせてしまったこと、女の裸を見せられた精神的ショックで寝込んでしまったのだらうということの後悔の念に駆られたという。

「あのときは二人ともどうかしてたんだ。それに……気持ち良かったでしょ? 俺に足ピンオ〇ニーとお漏らし見せつけてさ」

「……くっつ!」

提督の口から発せられた淫らな単語に恥ずかしさと興奮を覚えながら、朝潮は顔を真っ赤にして顔を上げた。

「でしよ?」

「……はい……」

「ならいいじゃん。はい、この話は終わり。朝潮は午後から遠征だ。旗艦らしくしゅきつとしろよ!」

「し、司令官……ありがとうございます! 朝潮はどこまでも貴方に

ついていく覚悟です！」

強・漢に限りなく近い行為を行ってしまったにも関わらず、介抱してもらった末に寛大な処置。朝潮は提督に対する尊敬の念を一層強め、より任務に励むようになった。

それと、後に朝潮は提督に見られながらじゃないとイケない体質と
なってしまうのだが、それはまた別のお話。

番外編：龍驤のハッチひらかせてーや (★)

とある日の鎮守府。とつくに陽は沈み、下ろされた夜の帳をおぼろげな月がやんわりと照らし出す。

「やあーつと終わった……」

日付が変わるまでもう数時間といったところ。今日のノルマとしていた書類の山を捌ききり、提督は一息ついていた。

「お疲れ様です、提督」

コトリ、と彼の手元に湯飲みを置いたのは、秘書艦の吹雪だ。椅子の背もたれに身体を預けて伸びをする提督に、にこつと笑いかける。彼女の手助けが無ければ就寝時間は何時になっていたのか、想像するに恐ろしい。提督は感謝の意を伝えた後、吹雪を鎮守府庁舎から少し離れている艦娘寮まで見送った。

その、帰り道。

†

月明かりに照らされた道をぼんやり歩く提督の耳に、聞き慣れた声が届く。

「だからよ、ゴムを着ける瞬間が一番エロいんだって。ち、チン…がデカいと小さいとか関係無くよお。龍田はどうだよ？ 何フェチ？」

「私い？ うーん……イキ顔？」

お、あれは……遠征帰りの天龍に龍田、それと駆逐艦達。遠征を終え、工廠へ艀装を返却しにいくところと見た。まだ距離があるので会話の内容までは分からないが、何だか楽しそう。

「い、電はシャワーを○頭に当て続けてお潮を吹かせるような——」

「うわ！ エツロ！ っつか電のフェチすげー細かいな！……って、処女ばっかでごんな話してんの虚しっ……」

「天龍ちゃんが振ったんじゃない？」

「仕方ないのです。これが俗に言う疲れマンなのです」

後ろから近付く俺には気付いていないようだ。

「そうだ、今日”アレ”やる日だよな！ 龍田、録画予約しといた？」

「えく？ 天龍ちゃんがやるって言ってたじゃない」

「おおーい!? まじか、今ならまだ間に合うかあ？」

「い、電はもう”アレ”は予約済みなのです。よかったらダビングしましょうか……?」

ん？ 何の話をしてるんだろう。聞いてみるか。俺は手を振りながら声をかける。

「おつす、遠征おつかれさん」

「っ！ てて、提督！」

一斉に振り返る彼女達。皆が皆焦った表情を見せる中、一人だけ俺を見て生唾を飲み込む電の視線になにやら邪なモノを感じつつ、天龍一行に交ざる。タイミングが悪かったかな？

旗艦を務めた天龍は場を取り繕うように、汗もたらだらに元氣良く右でVサインを突き出した。

「し、深海ども相手に傷一つなしだったぜ。フフン」

「すごいな！ さすが天龍！」

ドヤ顔という表現がぴったりだ。……が、すかさず隣の龍田が目を細めつつ天龍に言及した。

「天龍ちゃん、まず今回は会敵する事がなかったでしよ〜？」

「なっ……傷一つなしな事には変わらねーだろ!」

……おいおい。まあそんな事だろうと思っただけど……普通そんなんでVサインするか？

「天龍さん、ふ、ふふっ……」

「……なんでそれで胸張れるんだよ……っ！」

「くす、くす……」

恥ずかしがる天龍をよそに、静かな笑いが周りに感染する。

「お、おい！ 笑うなっ」

ひとしきり笑った所で……当初の予定を切り出した。

「ふふっ……ああ、そうだそうだ。聞きたいことがあったんだよ」

「お、何だよ」

「さつき話してた”アレ”って何？」

——ぴしっ。

そんな音が聞こえたかのように、朗らかな空気が一瞬で凍りつく。

「…………え？」

皆笑顔のまま固まった。天龍にいたっては一旦引いたはずの汗が再び栓を抜いたように溢れだしている。え、俺、軽い気持ちで聞いただけなのに…………。

「おい、どうしたんだ？」

「あく。えーとねえ…………」

龍田まで、視線を右往左往させながら答えあぐねている。なんだなんだ、本当に分からない。さつきまで”アレ”の話で盛り上がったのに、こんな空気になるか普通？

「駆逐対軽巡で大富豪大会がこれから始まるのです。なので皆張り切っているですよ」

「そ、そうそう！」

やけに冷静な電の話で皆が頷いた。

「そっかそっか。大富豪かあ。オリエンテーリングは大事だよな」

「なのです」

「だ、だろ？」

なんか妙に白々しいんだけど…………まあいいや。

——とその時。俺達の集団に向かって、遠くから愛嬌のある声が届いた。

「いな…………ま…………電ーっ！」

「…………雷ちゃん？」

此方に走り寄って来たのは、電の双子の姉、雷。急いでいるのか、可愛らしいピンクの寝間着のままですらから駆けて来たようだ。

「ここに居たのね。早く帰りましょ？」ハッチひらかせてくや”
始まつちやうわよー！」

「わっバカ！ しーっ！」

「え？ 天龍さんどうして…………し、司令官っ!？」

……ん？ 雷は俺に気付いた瞬間、すごい勢いで口に手を当てる。言ってはいけない事を口元で抑え込むジェスチャーのお手本といった感じだ。

「あ、もう庁舎に着いたわね。私たちは工場に行くのでお別れ。お休みなさいね」

「あ、ちよつ」

「てつ提督、また明日なっ！」

結構強引に龍田から別れを告げられると、彼女達はそそくさと向こうへ行ってしまった。ポツンと庁舎の扉の前に取り残される俺。

「なーんか怪しいな……」

焦る天龍、雷……”ハッチひらかせてーや”……。これらのピースが指し示すものに答えがありそうだ。ちよつと調べてみるか。

†

ささつと風呂に入った後、自室のPCの電源を入れ、椅子に腰掛ける。検索エンジンのバーにカーソルを合わせると、先程雷が発したワードを打ち込んだ。

「ハッチひらかせてーや……と」

パチン、と小気味良い音を響かせながらエンターキーを弾くと、検索結果がずらりと表示された。えーつと、なにになに……。

”放送コードストレスのお色気番組”…ねえ……

龍驤のハッチひらかせてーや。思い返せば、元々の世界でもそんな感じの名前の番組があったような。……と、ぼんやり考える中で、衝撃の事実に辿り着く。

「待って待て。この名前が雷から出たってことは、駆逐艦達もこれ見ているの!?!」

まじか……。これは俺自ら、この番組がいたいけな少女達にとって有害かどうかをこの目で確かめねばなるまい。

艦娘の性事情に関与しないとは言ったけど、変な番組で性癖をねじ曲げられたら目も当てられないだろ。

——でも、貞操観念があべこべな世界で言う”お色気”って……。
「かつての記憶」に若干背筋の悪寒を感じつつ、俺はテレビを点ける。情報によれば、放送開始時間から既に数十分が過ぎてしまっているが、まあしようがないだろう。
チャンネルを合わせれば、賑やかにトークを練り広げる女性達が映る。スピーカー越しの笑い声に俺の薄暗い部屋が包まれた。

+

「さあ、最後のチャレンジとなりました。彼は無事に発泡スチロールを己の棒で貫けるのか」

○のもんた……に扮した隼鷹の声。椅子に腰掛けながら、非常に険しい表情をしている。

「ファイナル・ハイッター？」

青暗いライトで照らされたスタジオで、彼女に対するのはイケメンの部類に入る男性だ——が、何故か彼は起立している上に、全身をシートでカメラから隠されている。

「もう一度。ファイナル・ハイッター？」

その男性が、隼鷹を見つめながらこくりと頷いた。

「ファイナル、ハイッター……」

彼の囁きに、満足そうに鼻下を伸ばす隼鷹。助平の文字を物の見事に体現している。

「それでは参りましょう……チエック・ザ・シャドウ」

パツ、と彼の後ろに設置された強力な照明が点灯する。その光に型を取られシートに映るのは、男性の下半身。そこから垂直に伸びた棒と……その先端に接する筒だった。

「……チャレンジ失敗……!!」

『100万円獲得ならず——』というテロップが流れた所で、場面は龍驤が壇上に立つスタジオへと移る。

「あちやく！ さすがに発泡スチロールの処女膜は突き抜けられへんか」

「チ○ポに何を求めてるんですか！」

彼女の発言にすかさず突っ込む取り巻き。なははと笑う龍驤の隣には、赤面する男性タレントの姿。

——”龍驤のハッチひらかせてくや”。

これは、戦場に生きる艦娘達の心を癒す、エロバラエティ番組である。

因みに先程の企画は、筒に着けられた様々な素材を陰茎で突き破つたら100万円というもの。

†

「……なんだこのクツソしようもない……」

視聴を始めて数分でこの様である。現在は男性タレントにセクハラまがいの発言を投げ掛けているこの番組に痛くなる頭を抱えつつ、しかし提督は割とコメディ路線の内容である印象を抱いた。

「ドギツイエロって訳でも無いか。まあ艦娘の息抜きになればこれくらいは……」

ぽつりと眩きながらリモコンを手取る。これ以上男のエロチャレンジなんて視ていられない。そうしてテレビの電源をオフにしようとした所で——

「ほんなら前回大好評やったこのコーナー。”手マンカラオケ”どうぞ」

こちらへ視線を送る龍驤の声。提督の指がピタリと止まる。

「……ん？」

”手マンカラオケ”？

†

「手マンされながらカラオケで90点以上取ったら100万円くゝ!!」

「またもや場面は別の場所に移り変わり、今度は変装無しの隼鷹が映り込む。」

「いやーものすごい反響だったらしいですねこれ。今回こそは100万円を手にする者が現れるのでしょうか」

「何処かのバーを貸し切りに行っているのだろうか、彼女の後ろにはカウターやテーブル席が整然と並ぶ落ち着いた空間が広がっている。しかしその中心に設置された派手な色の台だけが、明らかに異なる空気感を放つ。」

「という事で今回も手マンのスペシャリストをお呼びしております。はい拍手！」

拍手と共に画面外から迎えられたのは、イケメン艦と評されるのをよく聞く……木曾、松風、瑞鶴。

「前回、男性権利団体から大量のクレームが舞い込みまして、攻めも艦娘とさせて頂きます。しかし、手マンの腕は一級品！」

ここでVTRが流れ、後ろから木曾に抱きかかえられつつ真っ赤な顔で絶頂する隼鷹の様子が映し出される。

「恥ずかしながらわたくし、手も足も出ませんでした」

『潮はただ漏れやんな』とは龍驤の談。因みに、カラオケの結果は61点だ。

「数多の艦娘を抱いたこのイケメン艦に立ち向かい、100万を手にするのは誰だ!？」

+

「……まじっか」

開いた口が塞がらない。世の女性達はこれが爆笑モンの企画なのか？ いや……駄目だ。これを駆逐艦に見せるのはまずい。視聴を止めさせよう。止めさせなきゃ――

「そう心の中で言葉が巡るものの、体がテレビの前から動かない。身体の真芯が意思に反して番組の視聴を要望する。」

――艦娘が艦娘を手マンするんだぜ？

――見るしかねえよ。

「ぐっ……………」

見たい……………です……………!

理性が肉欲に屈した。しょうがないよね。

『それでは最初の挑戦者、どうぞー!』

声を張り上げる隼鷹。彼女の後ろの扉が開き、入ってきたのは、青い袴にサイドテール、すまし顔が美しい――

『百万石です。』

「加賀じゃん!!」

衝撃である。偽名もクソもない! うちの鎮守府には着任してないから面識こそ無いけど、その名前や戦績を知らない人は海軍にはいない。

そんな一航戦がこんなこととしていいの!? ……いや、今更か……………。

『百万石さんは初出場ということ。自信の程はいかがでしょう?』

『鎧袖一触よ。心配いらないわ』

『大見得切りますね〜! でもアソコを弄られたら、すぐ脳ミソがピク一色になると思いますよ』

『分かりづらいボケすんなや!』とワイプの龍驤が野次を飛ばす。少し間をおいて、再び隼鷹が切り出した。

『それでは……………ズバリ、歌う曲はなんですか』

『……………加〇岬』

『加〇岬ということで準備の方お願いいたします!』

威勢のいい隼鷹の声を皮切りに、スタジオが慌ただしくなる。始まるのだ。……………手マンカラオケが。

「やべえ、やべえよ……………」

ゴクリと生唾を飲み込む。怖れ半分興奮半分、俺はテレビの画面を凝視し続けた。

隼鷹に促されるまま、加賀は番組のために設置された台座へと移動する。腰の高さまで伸びた支柱の上から、赤色の布が被せられたそれは、ちょうど加賀の下腹部をカメラから隠すように機能していた。

スタッフからの指示に従って、胸当てを外して襟を緩める。深青色の袴は、その前部を持ち上げて臍下の腰紐に挟んだ。そうして露わになった刺繍入りの白いショーツには手を付けず、下ろさずに穿いたまままだ。すらつとした脚には太腿の柔肌とニーハイソックスの色味が映える。

そこまで行^{おこな}ったところで、突然加賀は後ろから抱きとめられた。

「百万石さん♡」

「ひゃつ……ず、瑞鶴……」

「今日はよろしくお願いしますね♡」

身体の感触を確かめるようにさわさわと動く手と、耳に吹きかかる温かい息に、思わず身じろぎをしてしまう加賀。右手に持つマイクを落としてしまわぬように今一度強く握り込むと、スタッフも準備を終えたようで、GOサインがかかった。

「それではお願いします、百万石さんで”加〇岬”！」

周囲に設置された大きなスピーカーから、何度となく聴き慣れた力強いイントロが流れ出す。普段の加賀ならば、歌いだしへ向けて目を閉じ集中している所だが、今回ばかりはそうは問屋が卸さない。

「百万石さんはどこが気持ちいいのかな？　どこ？」

「ん……っ」

目を閉じてしまうと、自らの肩に後から頭を預ける少女——瑞鶴からの刺激にばかり意識を持っていかれてしまうから。

「綺麗だよ、百万石さん」

瑞鶴は自然な動作で右手を鼠径部、左手を背中から回して左乳の辺りへと滑らせると、綺麗に切りそろえられた爪、しっとりとした指の腹で加賀の柔肌を行き来する。

フェザータッチで恥骨から内腿へ、内腿からショーツ越しの陰唇へ。ほんの少し指を食い込ませてクレバスを下から上まで一直線に

なぞれば、若干のくすぐったさに加賀の呼吸が乱される。

同じく布越しに、左の乳房は下から優しく揉み込まれる。快感こそ無いものの、これから自らへ行われる刺激への期待からか、乳頭がその存在を袴の下からしつかりと主張し始めた。目ざとく見つけた瑞鶴は、人差し指の爪でその側面を軽く刺激する。

「ん？ 触ってほしいんだ……♡ ほら、かり……かり……」

「はッ、そんな、こと……っ」

「敏感さんだね……」

もうすぐイントロが終わるAパートが始まるというのに、乳の先端から届く淡い快感に冷静を保てない。汗が浮き始め、頬が熱くなる。

「……っ……」

「ほら、歌わなきゃ」

「……この手に寄せっ、ふくき……朱の色」

入りのタイミング、音程もバツチリだが——ブレスのタイミングが乱される。

くすぐつたい。……気持ちいい。だが、自分は百戦錬磨の一航戦。この程度で音を上げてなんていられないと、加賀は歌へと集中を増す。

「この目……顔見れば——」

「歌、お上手ですね♡」

「翼たば——んう！」

集中を増すが——すぐにそれを鋭い快感が上書きしてしまう。

思わず下腹部を見やれば、ショーツの上から瑞鶴の爪で苛められる乙女の蕾。

淫らな核。肉欲を満たすためだけに生まれた器官。一航戦とて、その肉芽の役目はたった一つだけだ。

くりっ、くりゅ……。

「はっ、ん……っ」

桜色の包皮が被さり守られていたはずのそこは、指先で撫でられるごとに真芯の硬さが増し、やがてその身を晒す。こりこりとした感触を示すそれは瑞鶴の指の格好の餌食となり、加賀の意に反して興奮す

ればするほど、より直接的な快感を伝えてしまう。

くりゆつ。

「うん……」

「加……百万石さんもそんな声出すんだ……私も興奮してきちゃった」

首筋にかかる熱い吐息。自身の昂ぶりのせいか、先程までくすぐったいだけだった感覚が全て脳で快いモノへと変換される。

マイクを握る手が汗に濡れている。駄目……歌わないと。

「ゆつ、びを絡めて——なら——」

ぴりっ、ぴりっ。電撃の様に脳へ走る信号。潤む視界。スタジオの照明が目頭に溜まった涙のせいで尾を引いている。——とそこで、嬉しそうな瑞鶴の囁きが脳髓に響いた。

「あ、濡れてる……こんなに♡」

するる……くちゅ。彼女はふやけたショーツのクロツチに気付くや否や、手をショーツの下に潜り込ませる。指先に触れるのは加賀しか知らない肉の異なり。薄めの茂み、適度な脂肪で柔らかいそこは、最奥から溢れる粘性で肌もショーツも等しく温い。

「——っ炎の海も——はないの」

初めて他人に触れられる秘所。加賀の脳裏に理由のない恐怖がよぎるものの、一瞬の内に掻き消される。

「脱ぎ脱ぎしましょう、ね♡」

「ぎゃっ、?」

するっ。流れるような手つきで加賀のショーツは膝の上ほどまで降ろされる。クロツチと陰唇を繋ぐように伸びた粘性の糸。光を反射するそれは、番組側の配慮で下腹部を隠すように降ろされたシートでは録画を阻めない。

充血した淫らな割れ目がスタジオの空気に触れる。照明でてらたらと光るそこは、カメラには映されないと理屈では分かっている、どうしても恥ずかしさは否めずにいた。

直後、濡れに濡れたショーツへカメラが向けられた。羞耻。加賀の脳でその感情が荒れ狂う。

「や、やめ——」

朱に染めた顔を更に赤くし、思わず両膝をすり合わせてショーツを隠そうとする彼女。ぐちりと音を立て、愛液が光るクロツチはニーハイソックスへと染みを移していく。

「はあ……えっちすぎ……!」

我慢ならないといった面持ちの瑞鶴は、加賀の上着も肩までずり下げると、左右の手指の責めを強めた。

ちゆく、くりゆつくりゆつ……れる……ねえ、気持ちいい?……

加賀の五感を通るいくつかの音、感触。自らの身体が発端でないのは、カラオケの音源と瑞鶴の囁きのみ。乳頭、乳輪、首筋、耳たぶ、陰裂、クリトリス。

不規則なりズムで届く悦楽に身を委ねそうになる。

負けては駄目……歌、歌を……。

「あっ……翼を放つ、——」

ぬこつぬこつ。粘性に濡れた瑞鶴の指が、淫核を直接摘んで扱く——ひとときわ強烈な責めだった。

「戦の……へ——んんう!無理、無理っ……!」

——これが、加賀の最後の理性が崩れた瞬間である。

「それ、駄目っ! あん!」

マイクを口元へ寄せるのをやめ、軽く前屈みとなり台のシートへ両手を掛ける。眉を八の字にした彼女の顔はさながら泣く直前の童女のように。

「はあ……はあっ!……」

「これ、いいんだ?」

「んぐっ……!」

上気させつつ意地悪な笑みで問う瑞鶴。答えは加賀の秘所の収縮が如実に表していた。今度は責めるリズムを一定に保ち続ける彼女は、人間の絶頂へのプロセスを完全に理解している。

徐々に、徐々に性感が登り詰めていく。頬が燃えている。シートを握る手、足の爪先、ふくらはぎ——力んでいるのは、身体が絶頂を促すため。随意筋、不随意筋関係なく、加賀の意思に完全に反旗を翻し

ていた。

ちゅこつちゅこつちゅこつ。

「イキそう？ イキそうなの？」

「駄目、本当、にっ……！」

鼠径部が痺れる。腫れたように凝り固まったクリトリスが、瑞鶴の指から逃れようとひくつく。が、その動きすら脳髄への刺激となった。

「い、い……つく……！」

「恥ずかしくないよ♡ ほら、イこ？」

「いやっ、イク……！ イ——」

痺れが肉芽の根元へ——頂点へ。

「んんあっ!! んん、はあっ！」

瞬間、秘所から広がる暴力的な快樂。激しく収縮する陰裂、陰核、菊門。

加○岬は丁度サビに入った所。 F i n i s h の文字がテロップに流れるが、彼女が知る由もない。

「ああっ！ はっ、はあ——」

幾度かの視界の白みを超え、ようやく性感の頂きから降りようとしたが——

「ふふ♡ まだ曲終わってないじゃない」

「ふう——んあっ!?! や、やめ——！」

ちゅこちゅこちゅこ、にゅく、にゅくつ——！

「あああ！ ううっんん!!」

瑞鶴の手、指、舌は未だ止まらない。

「もうイツ、イツだからあ——はああっ！」

「これからが気持ちいいんだって♡」

もはや敏感を超えているクリトリスを、ぬめった指で更に蹂躪される。

「やめてえ！ あああっ!! んぐうう！」

不意の刺激、それも絶頂を経ての責めに頭が真っ白になる。声を出さないどころかに飛んでいきそうな気さえして、羞耻もかなぐり捨てて叫ぶ加賀。

——無理っ！無理い！ 漏れちゃうー！

必死の懇願も届かず、勢いを増す瑞鶴の手指に翻弄される。

「だめっ！ で、出ちゃうー！」

絶頂までとは真逆で、刺激されればされるほど、全身の力が抜けていく。それは秘所も同様であり、一瞬の気の緩みを狙って尿道が栓を開けようとひくついている。

「嫌、んっ！ んっ！」

きゅっ、きゅっ と菊門へ力を込めてなんとか締め上げる。

——が、瑞鶴の責めを前にして、長くは持たなかった。

くりゅっ！

「ああっ！」

じよっ、じよっ！

悦楽に翻弄される加賀の陰裂から、たばば、と床に溢れたのは無色透明な液体。

「んうううっっ！」

「お潮じゃん♡ 綺麗だよ」

不随意に引かれる腰。しかしそれは瑞鶴に抱きとめられ、逃げようと揺するのにも許されず快感を送り込まれる。

「もう嫌あー！ あああっ！」

じよろっ！ じよっ——

絶頂から戻って来れなかった彼女の足元に広がる透明な水溜り。曲が終わり、水源が枯れ果てるまで、責めは続いた。

†

『百万石さんは——採点不可という結果となってしまうました！』

『ナハハハハ！ イキ顔ほんまに笑える！』

「……」

テレビを前にした提督。スピーカーから聞こえる笑い声にも釣られることなく、その面持ちは神妙だ。

リモコンを取り、電源を落とす。彼の目は決意に満ち満ちていた。駆逐艦を叱りに行くのか？ はたまたクレームを寄越すのか？

深呼吸した彼は、一言呟く。

「……抜くぞ」

この特番が再び放送されることを願いつつ、彼は寢床へ向かっていった。

6. (前)

朝潮と一騒動あってから数日。

まだまだ日が高く昇る昼下がりの執務室には、秘書艦の吹雪と、一枚の書類を前に頭を抱える俺の姿があった。

「あく……」

あーとかうーとか意味も無く声帯を震わせる俺を見かねてか、吹雪が口を開く。

「今度はどうしたんです?」

コトリ、と俺の机に配された湯飲みから上がる湯気。書類から目を逸らすように俺はそちらへ手を伸ばす。

「パーティーだよ。パーティー」

「は? パーティー……ですか?」

そ、と返事をする。緑茶をちびちびと口に含みつつ、改めて目の前の文書に目を通した。

「大本営上層会議提督招集願」

——会議とは名ばかり。深海棲艦の侵攻も大分抑えられている現在、この会議の内容なんてたかが知れている。俺にとって問題なのは

「会議の後の飲みが嫌なんだ……」

「そうなんです?」

「ああ。全くもって」

体育会系を極めたようなこの職種において、まだ(上層部では)若輩者の俺が飲みに交ざればどうなるか。

「お酌、お酌、お酌……って感じでさ。疲れるったらありやしない」

自分の席に座る時間など無いに等しいんだ。思わずまた溜め息を吐いてしまう。

……が、ここまでの説明を持ってしても、吹雪の顔はクエスチョンマークを浮かべたままだ。

「……え? 司令官がお酌するんですか?」

「そう。年齢が下だから——」

「男性なのにな？」

——ん？

吹雪の目が少しだけ怒気を纏っているような、そんな感じがする。彼女の言葉に疑問を呈そうとして、少しだけ言葉に詰まった。

「え、どゆこと？」

「あ……いえ、何でもありません。さ、仕事しましよ、仕事！」

言葉を濁されたまま吹雪に話題を流される。……まあいいか。そんなことを呟きながら文書に印を押した。

あつそうだ、秘書艦には先に伝えとこう。今回の出張は俺一人だけの用事じゃない。

「そうそう。会議の時は大本営で一泊するから」

「了解です」

手元の書類を整理しながら答える吹雪。だが、次に俺が続ける言葉に目を丸くする。

「同伴に艦娘一人つけてね。申し訳無いけど同室だろうなあ」

「艦娘同伴ん!? どど同室っ!!」

ガタンツ、と音を立てて立ち上がる吹雪。

「うおっ！」

ビックリしたあ！ なんだ急に。

「艦娘同伴で一泊二日ですか!?!」

「そ、そうだけど」

鼻息が荒いぞ。何かマズったかな？ 俺の困惑をよそに、ぐわつと

此方を見つめながら吹雪は続ける。

「で、誰を連れてくんです!?!」

「ああ、そりゃ勿論。秘書艦……」

「えっ／＼／＼」

「以外の誰かだな。俺の留守を任せられるのは吹雪しかいないし」
「……」

トウク……という擬音が聞こえてきそうな顔から、一気に放心と
いった表情に移り変わる。

お前そんなに鎮守府から出たかったの？ 有給残ってないの？

「そうですか……。頑張ってきて下さい……」

「お、おい大丈夫か」

「元気です……」

ふらりと席についた吹雪を心配しながら、業務を再開した。めつちや虚ろな目してるんですけど……。

「……今度夜中にドライブでもしようか。車出すよ」

いけね、吹雪を見かねて思わず口から出任せが。

「えっ!? ……本当ですか!? 嘘じゃないですよね!?」

俺の言葉に、またすごい勢いでがつついて来た彼女。まるで抜け出した魂が戻ってきたみたいだ。

「お、おう。朝までに帰れば仕事も大丈夫でしょ。一徹出来る?」

「はっはい! 余裕です、朝までハッスルです!」

よかった、機嫌を直してくれたみたいだ。両目に炎を灯しながら「朝帰り、朝帰り……」と呟く姿はこの際見なかったことにしよう。

はあ……それはそれとして、やっぱり会議は憂鬱だ……。

そうだ、こういう日はあそこに行くに限る。

+

居酒屋鳳翔。日が暮れると店先に暖簾が掛かるここは、その名前の通り艦娘・鳳翔が開く店だ。

あくまで艦娘達のコミュニケーションの場、鳳翔が趣味である料理の腕を振るう場であり、利益を上げるための場所じゃない。模擬店とでも言うか。

「珍しいですね。提督がお見えになるなんて」

「色々あってな」

俺は今、鎮守府の外れに位置するこの店で酒を煽っていた。憂鬱から気を逸らすのにアルコールは最適だろう。

「来てくださって嬉しいです。常連の皆さんは遠征でいらっしやらないし……」

「ああ、道理で俺しか居ないわけだ」

「図らずもここの常連を全員すつ飛ばしてしまっていたらしい。静かな店内の様子に納得しつつ、お猪口に注がれた日本酒をぐいっと飲み込む。」

鳳翔の儂げな笑顔が調度いい肴さかなになる。大和撫子なごつてこういう人のこと言うんだろうなあ。そんなことを考えながら他愛の無い会話を続ける。といってもまあ、気が付いたら会議の愚痴になってたんだけど。

「——できあ、大本営からまた会議の招集かけられちゃって」

「あら……」

「そうだ。俺に同伴してもらおう艦娘、鳳翔にお願いしてみようかな。一緒にいて一番安心できるのは彼女で間違いない。」

「話変わるんだけど、その会議、一泊二日だよ」

「ええ」

「艦娘を一人同伴させる決まりなのね。その相手には悪いんだけど、同室で」

「ぴくっ、と鳳翔の眉端が動いた気がしたけど……見間違いだろう。」

「ええ……。それで、どなたと行かれるんですか？」

「それなんだけど、まだ決まってなくて。……良かったら、鳳翔どう？」

鳳翔の、皿を拭く手が止まる。全く予想だにできなかったという目で俺を見るとみるみる顔を赤らめていった。

「えっ……」

「心配事の多い出張だけど、鳳翔と居れば安心出来るんだ」

「っ……」

俺は少しだけ恥ずかしくなって思わず視線を下に向けてしまったけど、鳳翔に思ったままを伝える。

「ちらりと彼女を見上げれば、真っ赤な顔に目を潤ませていて……なんだか少し震えている。」

「……っ、……はあっ……」

……息も荒いのか？ どういう感情なのか分からない。もしかしてめっちゃ拒否されてる!？」

「ほ、鳳翔っ?」

俺は童貞丸出しの不安感に襲われて、答えを急かすように言葉を続けてしまう。

「鳳翔……どうだろう？ 行つてくれるか?」

「……いえ、その……っ……いい、イッてます……」

鳳翔がようやく口を開いた……と思つたら何？

「へ?」

「あっ……行きます! 是非お供させて下さい」

……あ、OK下りた! うわー良かった……。マジで。

「本当? よかった。断られたらどうしようかと思つてたんだ」

「断るはありますがありませんよ。他の誰でもない、提督のお願いなんですから」

何故か上気した顔のままに、にっこりと笑みを湛えて俺を見る鳳翔。こういうのを女神っていうんだなあ。俺は残った酒を流し込むと、席を立った。

「鳳翔、ありがとな! 詳しい予定はまた明日伝えるから」

「いえいえ、同伴の艦娘として精一杯の仕事をさせて頂きます」

「それは頼もしいや。じゃあ」

ガラリと戸を引き、店を後にする。若干の熱を帯びた身体に夜風が心地いい。

「帰つて寝て、出張の準備だあ」

月明かりの道を庁舎へ歩いていく。

6. (中)

「それじゃ、今日明日の業務はよろしくな」

「はい！ お任せ下さい」

早朝。白んだ空、しかし未だ日は顔を見せないような時間に、これから出張する俺と鳳翔、それを見送りに来た数人の艦娘が鎮守府庁舎前に集っていた。

「頼りになるよ、吹雪」

「えへへ……」

見送りの内の一人である吹雪には、提督代理の任を負ってもらっている。普段から秘書艦としてしっかりと仕事をこなしてくれてるし、心配事はゼロだ。

「提督。約束、忘れないで下さいね！」

「ああ、大丈夫」

ただ一つ、出張から帰ってきたらドライブに誘うって話を、妙に鼻息を荒くして期待している事だけは気になるけどな。

——と突然、吹雪の後ろから桃色が飛び出して来る。

「提督ッ！」

「うおっ ……明石？」

ぎよつとして見やれば、俺の右手をたわわな胸元に寄せた明石が、大きな瞳を潤ませてこちらを見つめていた。やたらと距離が近い。明石のしつとりとした両手の温ぬくさにちよつとだけドキドキしてしまう。

「ご一緒出来ないのは心苦しいですが……何かあればすぐ連絡して下さいね」

「わ、分かった分かった。ありがとう」

完全に気圧されていると、次に彼女の小さなお口から軽く爆弾発言が。

「ありがとうだなんて、そんな。私と提督の仲でしょう？」

「は？」

「あなた一人の身体じゃないんですからね」

「ちよッ明石さん？ 司令官困ってますから……！」

ええ……。言葉のパンチ力が強すぎる。

そうだ、あいつは以前のすれ違いのまま距離感を間違えているんだった……。いやいや間違えすぎだろ！ 子宝に恵まれた夫婦か！

よく真顔でそんなこと言えるな。そんな明石に、俺はなんて答えたら良いんだろう……。

とりあえず明石を嗜^{たしな}めてくれた吹雪に感謝の視線を送りつつ、この場をどうにかするために俺は鳳翔の方へ振り返った。

「え、えーと……さ、行こうか鳳翔」

「はい」

それじゃあ、と見送り一同に手を振ると、ここより少し先に停まっている黒塗りの公用車へと二人並んで歩きだす。

「お気をつけて〜！」

「はいはい、もう……」

「ふふ……っ」

もう結構な距離があるのにあいつら、大声で……。たかが一泊二日の出張に気をつけるも何もないだろ、と心の中で突っ込む。ほら、鳳翔に笑われちまったじゃないか。

「慕われているんですね」

「そうなのかね……。なんだか調子狂うなあ」

桜色の小ぶりなスーツケースを転がす彼女。穏やかに微笑みを湛えて歩くその姿はもう絵になるくらいの麗しさだ。……と、その端正な眉が少しだけ斜めになる。

「……提督？ 私の顔に何か……？」

「……いやいや」

いけね、つい見惚れて……。

「そうだ、荷物をトランクに詰めるから貸してくれる？」

思わずそっぽを向いて、照れ隠しに話を逸らした。

「え……？」

「ん、どした？」

いわゆるセダンと呼ばれる形の公用車の後ろに付くと、トランクを

開けてスーツケースを入れ——ようとして、鳳翔に慌てて制止させられる。

「て、提督！ 私が居るのに男性にそんな事させられません！」

「え？ だって力仕事は——」

「女の仕事、です！ ほら、運転手さんもいらつしやいますし預ければ大丈夫ですよ」

ええ……女の仕事なの？ こんなところも元々の世界と違うのか。運転席から降りてきた人も女性だし余計に戸惑う。

そんなこんなで運転手に荷物を渡して、車の後部座席に乗り込んだ。

ちらりと腕時計へ目を落とせば、予定通りの出発時刻。

車内から改めて鎮守府へ目を向ければ、朝日に包まれる庁舎や工廠、楽しげに水面を駆けて遠征に出る艦娘達を瞳に映すこととなった。

「綺麗……」

陽光が差し込む車内で景色に見惚れる鳳翔に無言で同意した。綺麗だし……何より平和だ。ここまで海を落ち着いた気持ちで眺められるのも、長く続いた深海棲艦の侵攻を凌ぎきった先代達の尽力の賜物。心の中で最大限の賛辞を贈りつつ、自らの気持ちも引き締める。よし、出張頑張ろう。

エンジンがかかり、ゆつくりと動き出した公用車の中、俺達は鎮守府の景色を目に焼き付けた。

+

「あくからしくさくんく？」

「はい？」

「はい？ じゃないですよー！」

明石に詰め寄る吹雪の声が路上に響いた。提督達を見送った後もその場に残った二人、その間に流れる空気はひりついている。……のだが、明石はどこ吹く風といった顔だ。

「周りの人が誤解するような事を言わないで下さい！」

「え、私が？ そんなこと何か言いました……？」

疑問符を浮かべる明石は、本当に心当たりがないらしい。

「何かって……。 し、司令官と……いい関係なような事とか……」

ごによごによと返事しながら頬を赤らめる吹雪。だが、すぐに血の気が引いた顔で彼女は続ける。

「とうか見ましたか？ さっきの鳳翔さんの目……」

「え？ ……ええと、微笑んでたような」

「冷えっ冷えでしたよ！ 私、明石さんが視線で殺されるかと思いましたがもん」

随分と大げさだな、と明石は笑い飛ばす。

「あつはは！ まっさかあの鳳翔さんがそんなわけないですよ。見間違いないですか？」

「いや、本当に……あれ？ 私の勘違いだったのかな……？」

「勘違い勘違い。さ、部屋に戻りましょ」

鎮守府の良心として皆に慕われている鳳翔に限って、そんなはずは。吹雪以外の艦娘は皆明石に賛同する。吹雪は小首を傾げ、最後には自らの中に違和感を残しつつも……彼女たちの考えに流されてしまった。

+

「お、見えた見えた。あれが横須賀鎮守府だよ。鳳翔は実際に見るのは初めてだよな」

時刻は一一〇〇。結構な時間を車に揺られ、高速道路から降りるとすぐに視界に飛び込んできたのは、広大な敷地に佇む庁舎。うちの鎮守府と比べて随分と古風で威厳のある見た目をしている。

紹介するように振り返ると、下を向いて膝を擦り合わせる鳳翔の姿。

「鳳翔？」

「……え？ あつ……よ、横須賀鎮守府ですか」

びくつ、とこちらへ顔を向けると、焦るようにその後ろの建物へ視

線を移した。……そわそわしてどうしたんだろう。

「まだ人と戦争してた頃からの施設だ。うちみたいに急造された鎮守府よりなんかこう……何かとデカいんだよな」

「深海棲艦の侵攻前からの……」

何せ港に軍艦を停泊させていたんだから。最初から艦娘と小型の船舶の運用しか想定されていない俺達の鎮守府とは、文字通りに桁違いの広さだろう。

検問を抜け、車は庁舎の手前の駐車場へ。

「提督、お荷物は私が降ろしますので」

「あー……ありがとうございます」

少しだけ頬をぷっくりさせた鳳翔（かわいい）。先程の俺の行動がそんなに異常だったんだろうか？ 鳳翔に釘を刺されつつ車から降り立つ。

一呼吸すると、潮の匂いが鼻腔に広がった。嗅ぎなれているはずのそれだが、普段との若干の違いを感じる。地域差とかあるんだろうな。

ドライバーに一言感謝を述べつつ庁舎へ向かう。すると、玄関口のポーチに佇む艦娘の姿。あれは確か、重巡の——と思索しているうちに、彼女がこちらを見つけて歩み寄る。

「横須賀鎮守府所属、重巡洋艦・妙高です。遠くからご足労頂きましてありがとうございます」

「豊施鎮守府、木南真中佐だ。よろしく」

うわ、随分と綺麗な人だなあ。太眉好きなんだよね。……とは死んでも口に出さないよう注意しつつ、形式的な挨拶を交わす。鳳翔も自己紹介を終えたところで、妙高がこちらの手元へ目を落とした。

「宿舎へご案内いたします。お荷物をお預かりしますね」

「お願いします」

鳳翔は2つのスーツケースを彼女へと手渡す。本当は俺が持ちたいくらいなんだけどな……。なんか申し訳なさを感じてしまうんだが。

妙高に先導されて鎮守府庁舎から少し離れた建物へと連れられる。

質素ながらも小奇麗に維持されているところが宿舎と説明され、割り当てられた部屋へと向かった。

扉の手前で彼女から2枚のキーを渡される。妙高ともここでお別れか。

「カードキーは紛失されないようお願いいたします。それでは、私はこれで」

「案内ご苦労。……あー、俺が特任の提督なの知ってたでしょ？ 肩肘張らなくても良かったのに」

久々の軍人らしい言葉遣いに疲れた俺は彼女に本音を打ち明ける。俺のような提督はただ妖精さんが見えるというだけで選ばれた、海軍所属とは名ばかりの雇われ者だ。実際、ほとんどの鎮守府は艦娘と提督は上下もほとんど無く仲良くやってるらしい。……いやまあ、というのは前の世界での認識なんだけども。

「い、いえ、そういう訳には……」

だから君もそんなにぴしっとしなくてもいいんだよ……と伝えたかったんだが、当の妙高は体裁もあつてか未だぴしっとしたまま。

「そっか、ごめんごめん。ありがとね」

「はうっ／＼／＼……失礼しますっ!」

せめてもの感謝を伝えたくて、ニコツと笑顔で別れようとしたんだけど……なんだろうあの反応？　ぴしっとしたままというか、俺の言葉で余計に硬くなったかもしれない。踵を返す彼女の後ろ姿もなんだかぎこちないような……。そんなにキモい笑顔してたかな……。

「提督」

妙高が庁舎へと戻っていくのを見届けた所で、鳳翔がこそつと耳打ちしてくる。

「どうした？」

「男性と話した経験のある女性はただでさえ少ないのですから、もう少しお手柔らかに接して頂けると……」

「……は？」

「ええと、その――」

……男とフランクに話すのが緊張しちゃってできないって？
……マジかよ。処女にしてもそこまで行く人は稀じゃないの？

「ええ……」

「男性の出生率が大幅に低下して長らく経ちますし、何より軍務は女社会です。……豊施鎮守府の皆さんくらいですよ。魅力的な男性と日常的に接しているのは」

「はえー…… 通りで憲兵も女性で……」

「はい。……すみません、提督、早くお部屋へ……」

ただ貞操観念が反転してるだけじゃ無いらしい。なんだかよく分からなくなってきた。ってか一瞬、ごによつと鳳翔が言葉を濁らせたような気がするけど……まあいいか。

……結局のところ、この間風呂で結論を出した通り俺は俺のままこの世界と接するつもりだ。これは確定事項。

+

気を取り直し、妙にそわそわしてる鳳翔に促されるままカードキーをかざして部屋の鍵を開く。中へ入れば、広めのベッドが2つにユニットバス。ビジネスホテルのそれを少しだけ広く、良質にしたような部屋が広がっていた。窮屈ではない、といったところか。

血税で建てられた施設なんだ。贅沢なんて言ってられないし、必要もないだろう。むしろもう少し程度が低くても文句を言うつもりは無かったくらい。

「お、部屋は想像より良かったかもしれない——」

ユニットバスを覗きつつ、綺麗で安心した……と鳳翔へ振り返ろうとした——のだが、彼女は俺の肩に手を添えて、優しいながらも力強い手付きで後ろへ引っ張ってきた。

「うおっとー！」

「て、提督ー！ めんなさい、お手洗いに……！」

バランスを崩す俺の目と鼻の先でバタム、と白い扉が閉められる。俺の目に最後に映ったのは、太ももに手を添えて足をくねらせたまま

ユニットバスへ消える鳳翔の後ろ姿。

「……………」

一瞬の出来事に思考が硬直するものの、続くゴソゴソと布切れが擦れる音に意識を取り戻す。

——やべっ！

俺は咄嗟に両手で耳を塞ぎつつ、部屋の奥へと移動する。

——き、聞くなっ、聞くな！

指の間をすり抜けて鼓膜に届く水音から必死に意識を逸らそうとするも、聴覚は意思に反抗してそれを拾ってしまう。

心臓の鼓動が速まる。顔に、真芯に血液が巡る。——早い話が、興奮している。

「素数、素数を……………」

…………性癖なのだ。俺にとって。その…………その我慢と放出が。どうしようもなく。

ただでさえ今日明日と自家発電が出来ないのに、のっけからこれでは俺の息子が爆発してしまう……………！

そうこう焦っている間にユニットバスから鳳翔が姿を現した。すぐく申し訳無さそうな顔をして、俺に謝ってくる。

「すみません。朝から我慢していて、限界で…………。こんなはしたない真似を……………」

「い…………いや大丈夫。言ってくれば高速のパーキングにでも寄ったのに」

あくヤバい！ 鳳翔の言葉一つ一つが性癖に刺さる。謝罪に感謝で返してしまいそうになるのを必死で押し留めた。こんな状態で帰宅までおあずけ喰らうのかよ……………！ すんごい悶々とするからさっさと話題を変えよう。

「すっ少し早いけど、食堂が混み合う前に昼食を済ませよう。その後は腹ごなしの散歩がてら、横須賀の設備でも見て回ろうかと考える」

やべ、思わず早口に…………。落ち着け俺…………。我が鎮守府の良心——鳳翔を相手に興奮してしまった自分を心中で嫌悪する俺だが、当の彼

女は自らを恥じらって頬を赤らめつつも、微笑を湛えて俺を肯定してくれる。

「はい。提督とご一緒であれば、どこへでも」

「ありがとう。それじゃ行くかうか」

や、大和撫子く！ 鳳翔の爪の垢を煎じて明石に飲ませてやりたい。ただの慣用句に聞こえるだろうが、割と本気で飲ませる手段を模索したいところだ。

+

横須賀鎮守府所属、軽巡洋艦・川内。その日は一三〇〇ヒトサンマルマルからの出撃が予定されているため、正午より若干手前にずらしての昼食を摂るために食堂の席に着いていた。

僚艦と談笑しつつ飯を口へ運び、いつも通り出撃に備えて軽く打ち合わせ。その後は艤装を背負って大海へ降り立ち、護国の任を全うする——筈だったのだが。

「なーんか鎮守府の雰囲気がおかしいんだよねー」

「それ！ 噂だと妙高さんが応対した他所の提督が原因らしいよ」

「え、どういうこと？ 半端ない鬼提督で、横須賀の空気にブチ切れだったとか？」

食堂も廊下も、すれ違う艦娘の顔つきがいつもと違う。厳しめの顔だったりポワポワした顔だったり、人それぞれだ。先程すれ違った妙高に至っては動きがぎこちなかった。あの妙高が混乱してる姿が見られるなんて一生に一度あるかないかの出来事だろう。

「逆に細マッチョの優男だったりしてー！」

僚艦の突飛な思考には笑うしかない。すかさず川内も”艦娘内で共通認識の有名A V”の名前を出して馬鹿話に便乗した。

「ハハハ！ そんなのが提督だったら着任して3秒で合体でしょー！」

「あっはははー！」

この時世、長期戦にもつれ込む戦闘はそうそうなく、夜戦など望むべくもなし。平和を謳歌しつつ若干の退屈さも持ち合わせた川内に

は、有り余ったテンションを友人とのふざけあいに投入するか、性欲として消費するかしか選択肢が無かった。

そんな日常。だからこそ食堂の入口から現れた人物は、川内にとって、いや——横須賀鎮守府にとって正に晴天の霹靂だった。

†

『この時間でも混んでるもんだなあ』

『ですね』

えっ?! 男オ!!?

川内^{わたし}たちがバカっ話で盛り上がってる最中、視界の隅に白い士官服を捉えた。あ、提督だ——と目を向けて、硬直。だってそこにいたのはこの提督じゃなくて、というか女じゃなくて。

スラツとした背、短い髪、低い声……男。テレビとか雑誌とかでしか見たことがない存在。私にとって男ってそういうものだった。左隣とそのまた隣をちらつと見れば、五十鈴と長良も目を点にして笑える。いや、普段なら笑えてた。

「ね、ねえ川内……」

グレイツ!

「あいだだっ?! なに五十鈴?!」

あの提督に目を向けたままの五十鈴が、私の二の腕をつねる。

「いや、夢かと……」

「自分をつねってよ!」

そんなことをしているうちに、彼とお付きの艦娘は今、奥のカウンターでランチを受け取っている。いやーすごい。配膳の職員さんがメスの顔してら。あっオマケつけてやがる! なーにウインクしてんだよ!

トレーを手にしてきよろきよろする提督^{おとしこ}。席を探しているんだろ
うか——あツ目が合った! ……ん? こっちを指さして……むっ
向かってきたあ!?

「こっち、座っていい?」

「えっ？ あっハイっ！」

「ありがとう。鳳翔ー！ こっちこっち」

ひえええ！ 隣に、隣に座ったんですけど！ うわ手大きい！ 喉
仏エロっ！

「日替わりメニューってこんなに豪華なんだな、びっくりしたよ」

「提督、相当なおマケをもらっていましたよ？」

「えっマジ？ あーそういうことか！ 嬉しいなそれは」

秘書艦かな？ 鳳翔さんも提督の向かいの席に着いた。その彼女
と親しげに話す提督の声、鼓膜に心地よく響く低音に酔いそうにな
る。や、やばあ……／＼／

「……い、おーい」

「はあ……はッ!? はい！」

「うおっ」

いけない、思わず夢心地で聞き入ってた……って話しかけられてる
!? 風が生まれるほどの速さで彼に向き合えば、切れ長の目がこちら
を見ていた。

「ここの艦娘だよね？」

「はい！」

「あのさ、工廠の場所って分かる？」

「工廠ですか、えっえっ——」

へ、平常心平常心……！

提督に目を合わせられず視線を落とすと、ごっごつとした大きな
手。はふうっ……不意に性癖のロケットパンチを喰らいつつ、鼻血だ
けはなんとか堰き止めて質問に答える。

「——を曲がった先か。ありがとう。鳳翔食べ終わった？」

「ええ。……食器は私が下げます。提督はお先に向かっていて頂いて
も」

「いや、鳳翔と一緒に行きたいから。食堂の外でまってるよ」

そう言い残して食堂の出口へ向かう提督は、最後にこちらに振り向
いて笑顔を見せた。

「教えてくれて助かったよ。それじゃ」

「い、いえ……！」

かつこいいい……／＼／

思わず彼の背中を追ってしまった。

そのせいで、私は鳳翔さんの声に、放つオーラに気付くのが遅くなる。

「……の職員は」

「……えっ？」

思わずビクリと反応してしまう。立ち上がった彼女と目が合う。

彼女の瞳に光は無かった。

「この職員は男性に下品なウイंकを送るのですね。仕事に集中して頂きたいものです」

ひっ！

「失礼、貴女に言っても詮無きことでした。それでは」

「あ……」

行っちゃった……。こ、怖かったあ……。視線に殺傷力が有ったら私はチリ一つも残ってなかったかもしれない。

「ヤツバ……男がご飯食べる所ってあんなにエロいんだ……／＼／
もはやあれがオカズじゃん」

「喉仏に吸い付いて舌で転がしたいわ……」

振り返れば、隣のバカ二人は鳳翔さんの事なんて眼中に無かったみたいで妄想の世界に浸ってる。なんで私だけトラウマレベルの眼力を受けることに……！

……いや、やめよう。私もバカに交ざろう。さっきの事なんて忘れて、あの人の手でイロイロと妄想しよつと！

+

「では定刻となりましたので、各海域における通商路防衛の減員の是非を巡る合同協議を開催したく——」

鎮守府庁舎内の大会議室。議事進行を務める士官さんが手際よくその任をこなす中、スムーズな会議とは裏腹に、俺は一つの事象を前

にして思考がストップしていた。

「んな……何で……!」

思わず小声で呟いてしまう。汗が止まらない。何故。どうして。

「なんで皆女なんだよ……!」

右の席も左の席も向かいの席も。見知ったはずの提督達がほぼ若い女性になってやがる!?

こうして、おっさん臭かったはずの定例会議は——異例の良い匂いに包まれながらの開幕となった。

6. (後) ★

瞬きを忘れ、目を見開く。

「……………!?!」

今の俺を傍から見たら、とんでもなく間抜けな顔をしているんだろう。……………そしてそんな様子がこの会議の場で見過ごされるわけもなく。

俺を見て怪訝な表情を浮かべるのは一人や二人ではない。その内の一人、立派なひげを蓄えた爺さん提督——だったはずの妙齡の女性が怪訝な表情を浮かべつつ声を掛けてきた。

『木南中佐、何か?』

席から見ると、恐らく横須賀鎮守府の主なのだろう。そんな彼女に名指しされた俺に、大会議室で席に着く全員の視線が集まる。よりどりみどりの女性の目、目、目。

「あついえ、その……………」

何か? つて俺が聞きたいわ! ……見知ったおっさん共が女になれば誰しもこんな風になるだろう。そう大声で叫びたい気持ちに一瞬駆られたが、実行した暁には精神異常の疑いで懲戒免職まっしぐらだろうから口を噤んだ。しどろもどろになりながら、なんとか別の理由を見つけ出して俺の発言とする。

「……………ぎっ議題に関してなのですが、かねてよりの懸案事項にプラスして新たな問題が見られるようです。議論の前にそちらも確認して頂こうと」

『ほう……………宜しく頼む』

「はいー」

緑の黒髪を後ろで1つにまとめた美女は、俺に続けろと促す。あつぶねえ、かなりグレーなラインだが危機は脱したみたいだ。俺は側に控えていた鳳翔に命じて、自作した書類を各提督に配らせる。

落ち着け、落ち着け俺……………! すんごい大きなおっぱいの彼女の谷間より、今は会議が重要っばい。……………ハッ! 俺は一体何を言っ……………。思わず手元の書類が軽くひしゃげるほど強く握り込む。

「それでは、お手元の紙をご覧下さい——」
ここから先はよく覚えていない。ただ、会議を滞りなく終えられたらしい事だけは救いだっただ。

†

「提督、体調がよろしくないのですか？ 先程の会議は……」
「だ……大丈夫。少しびびっくりしたことがあっただけで」

庁舎の廊下で、俺と並び立つ鳳翔が気を遣ってくれる。すごく心配だと顔に書いてあるようなその表情。「おっさんが女になってたんだよ」って素直に話したらゴミを見る目が変わってしまったのだろうか。

……会議が終わり、もう陽が沈む時刻だ。提督としてやるべき事は済んだが、俺にとってはこれから本当の地獄が始まる。

「ちよつと休憩したら飲み会だ。鳳翔も秘書艦同士の集まりがあるんだろ？ 会議中は気を張ってて疲れただろうし、羽を伸ばしてきなよ」

思わずため息をつく。今日は沢山の女性にお酌祭りか？ おっさんじゃない分余計に空気読む力を試されそうだな……。

†

秘書艦同士、是非仲良くなりましょう。そんなことから各鎮守府の艦娘が集められたのは、鳳翔も昼間に利用した食堂だった。

その隅にテーブルを複数個合わせた即席の大きな机が形作られ、周囲の思い思いの椅子に少女達は腰掛ける。鳳翔も例に漏れず、とりあえず適当に席を取った。

机の中央にはバスケットに菓子、つまみが山のように盛られている。ソフトドリンクは2リットルのペットボトルがいくつもあるものの、人数と比べて明らかに少量だ。

その代わりに350ミリリットルのアルコール缶が所狭しと置かれていることから、ジューズはチエイサー程度、飲酒は必至だろうと

推測される。

「お久しぶり！ 合同演習以来かしら」

「ホントですね〜」

お互い面識のある艦娘も居るようでぽつぽつと会話が紡がれるものの、鳳翔を始め大半は初対面だ。会議の直前に会釈したくらいの関係でしかない。

そんな中、一人の艦娘がおもむろに立ち上がって周囲を一瞥し、口を開いた。

「えーこの度は、お、お日柄も良く——」

「山城早くー！ 酒を飲ませろー！」

山城と呼ばれた女性はその幸薄そうな顔を不機嫌に歪ませ、野次を飛ばした三編みの少女を睨む。その後、ため息交じりに口上を省略して続けた。

「……横須賀の山城です。親睦を深めて頂けるよう準備しました。宜しくお願いします」

「テンション上げてー！」

「あーもう……では、乾杯」

横須賀鎮守府秘書艦・山城の言葉が音頭となって親睦会が開かれる。

「かんぱーい！！」

「か、かんぱー……い」

主催とは対照的に威勢のいい艦娘達が声を張る。若干気圧されつつ、鳳翔も後に続いた。

†

……どうしてこうなった。

「いや〜木南くん最近はどうだい？ 資源が足りなくなったらいつでも頼ってくれたまえ！ さあさあー！」

「ど、どうも……」

手元のコップになみなみと注がれるビール。泡と液体とが層を作

る様を眺めつつ、木南真は返事をする。ちらりと会話の相手を見れば、につこにこで話しかける上司の顔。長いまつ毛にさらさらの髪とおっさん臭い言動があまりにもミスマッチだ。その隣には、会話の順番待ちといった様子でそわそわする他所の提督が。

次から次へと俺のもとに提督がやってきて、俺からのお酌どころか席を立つことすら許されない。しかも誰が誰だか、どこの提督だか分からないんだから心労がかさむ。

ああ、また違う人に代わる。階級章は大佐。首元まで伸びるポニーテールを揺らしながらその手に持つのは星のラベルの瓶ビール。

「きつ木南さん、お久しぶり。この間の合同演習はお互い手応えがあつたよね。また君とやりたいよ」

誰だ……。凜とした顔立ちで、いかにも武人然とした姿勢の良さを見せる女性が俺の隣に腰掛ける。

「えっと……そ、そうですね！ また……」

「本当かい！ 予定を練っておくよ」

合同演習、合同演習……ああ！ 舞鶴の提督か。以前この世界の鎮守府の事情を知るために資料を漁ったから覚えている。近隣の鎮守府に申し込んだ方が色々と楽なはずなのに、わざわざ太平洋に面する豊施鎮守府に演習を申し込んでた大佐さんだ。

どう考えても俺目当てだな……。まあ大きい鎮守府との合同演習は確かに益があるから、向こうから頼んでくれるのはありがたい限り。愛想を振りまいといて損は無いだらう。確か、名前は――

「はい、嶋田大佐。是非お願いしますね」

いかん、目の前の美女の後ろに、幽○紋の様に以前のおっさんの姿がちらつく。そんな幻想は振り切りつつ、彼女に笑顔を返す。

「はうっ……よ、よろしく。……さ、コップを」

一瞬自らの胸を抑えた嶋田大佐。心臓の病か？ と疑う間にお酌の催促が。

「……ありがとうございます、大佐」

「なに、遠慮はいらないよ。それと、もっと楽な呼び方でいい。特任の君には疲れる言葉遣いだらう」

「あ、ありがとうございます……嶋田さん」

「それでいい」

ああ、またビールのかさが増す。面倒だなと思っていた行為のお酌だが、はつきり言つて目上からされると非常に気まずく感じる。居心地の悪さに辟易するぞ。

「そうだ、それともう一つ……」

そのまま嶋田大佐……嶋田さんは更に言葉を続けようとするが、後ろの提督に小突かれる。

「おい、もういいか」

「ん、ああ……濟まないね、この話はまた今度」

それじゃ、と席を立つ嶋田さんを見送りつつまた新たな提督の襲来に備える。ま、またビール……酔いがだいたいぶ回ってきた自覚があるものの、上司の誘いを断れない縦社会を恨みつつ、俺はまたコップを空にして差し出した。

+

「鳳翔さんこの提督エロ過ぎっしょー!!」

「ねね、彼のこと色々教えてよ。秘書艦なんでしょ?」

「いえ……私はたまたま同行に選ばれただけの臨時役です……」

食堂で行われる親睦会は、最初の静寂はどこへやら、今や喧々たる有様である。その話題の中心に居座るのは——いや、居座らせられているのは鳳翔であった。唯一の男性提督、それもそれなりの容姿な彼の付き人とあればこうなるのも当然だろう。

「浮ついたハナシとかないの? 絶対あるでしょあれは!」

「豊施鎮守府の艦娘が黙ってるわけないでしょ。なに、全員不能者なの?」

「いえ、そんな噂もありませんし……不能でもないです」

四方八方からデリカシーのない質問が飛び交う。相当にアルコールが回っているのだろう、見渡すと真っ赤な顔をした艦娘ばかり。鳳翔もそれなりに頬を火照らせつつ、新たに手元の缶のプルタブを引

く。

「私だったら3秒で装填だなー。あの提督の酸素魚雷」

多くの艦娘が席を立って鳳翔の周りに集まる中、三編みの少女——北上だけは机にぐでつと伏したままこちらに顔を向けている。

「あつはは！ 先制雷撃にも程があるつてー！」

「ふふん。あーもうヤっちゃいましょー……つてね」

どつ、と場が湧く。先程舞鶴の秘書艦だと名乗った彼女は、飄々とした態度で軽口を叩く。非礼だと叱責したい所だが、酒の席だからと半ば諦め気味の鳳翔。こく、と酒を煽りつつ、アルコールの力を借りて彼女への応戦を試みる。

「提督はそんなに尻軽じゃありません。むしろ女性を避けているかと」

「あーん？」

嘘はついていない。今まではそうだった。ある日を境に見違えるほどオープンな性格になり、鎮守府の性獣達を阿鼻叫喚の渦に放り込んだのだが。

「あー……まあ確かにこないだ演習したときはそうだったかもしれないねえ」

「鎮守府で心を開かれているのは、私くらいなもの……です」

思い出すように虚空を見上げる北上相手に、つい威勢のいい言葉を放ってしまう。口を滑らせた、と後悔しても後の祭り。ハツとして彼女の方を見やれば、恐ろしいほどに口角を上げたニヤけ顔が鳳翔を見つめている。

「へええー……」

ヒューツ、と二人を取り巻く内の誰かが煽る。鳳翔は自分の言葉の恥ずかしさ、周囲の好奇の目に耐えられなくなり縮こまってしまふ。が、これだつて嘘じゃない……はずなのだ。

常識で考えて、男性が女性に対して脱ぎたての上下の下着なんて渡すわけがない。世の処女が夜な夜な妄想する類の話を実際に体験した鳳翔は、勝ち組に片足を突っ込んでいると言えるかもしれない。

——そう自分を奮い立たせる鳳翔だが、次に続く北上の言葉に虚を

突かれる事となった。

「じゃあさ、しちやいなよ。夜這い」

……は？

「同室なんですよ？ 今夜、しつぽりとさあ」

「そ……そんなこと、考えたこともありません」

嘘だ。提督に誘われて真っ先に思いついたものの、意識の外に無理やり押しやった発想。たった今北上に掘り返され、実行可能なタイミングがあと少しでやって来る事を強く意識してしまう。

「提督もお酒入ってるわけだし、ちよつと押せばいけるつて」

「や、やめてください」

「据え膳食わぬは女の恥ってヤツだね」

脳裏に浮かぶのは提督の乱れた姿。妄想の産物に顔を更に赤らめつつ、度を過ぎた北上への怒りが生まれる。これ以上心の中を乱されたくない。

「いい加減にっ——」

「はい。二人ともそこまで」

パン、と手を叩き、山城がストップに入った。

「親睦は深まったみたいだし、お開きにしましょう」

「えーっ、夜はこれからじゃない」

「明日朝早く帰られる提督もいらっしやるでしょう。さっさと帰り支度して寝るべきよ」

冷静な彼女の言葉に、他の艦娘達が渋々引き下がる。北上もぶーたれながらも従う様子だ。

「後片付けは私と横須賀の職員がやるから。もう自室に戻って貰って構わないわ」

「はーい」

「お疲れ〜」

「あ……私、手伝いますね」

多くの艦娘が食堂から退出する中、鳳翔は周りのゴミを整理し始める。

「鳳翔。いいって」

「いいえ、手伝わせて下さい。空気を悪くしてしまつてすみません」
「はあ……気にしてないわ。まったく北上は手に負えない。主催なんてやるものじゃない……不幸だわ」

手を動かしている内は邪念に囚われずに済む。更には深いため息をつく山城の助けにもなると言うのなら、手伝わない道理は無かつた。

†

はあ、はあ……。

宿舎の階段を小走りに登る鳳翔。玉のような汗を流し、時折片手を内腿に添える姿からは相当の焦りが見える。

結果的に、片付けは中々に時間がかかった。ゴミ捨てや机と椅子の位置の修整といった仕事量に対して、人手不足にも程がある。

数時間に続いた親睦会の間、ずっと話題の中心人物と置かれて一度も手洗いに立たなかつた鳳翔。彼女は頭の中で存在感を増す尿意に気が付きつつ、手伝わと言つた手前離脱も憚られるとして黙々と作業を続けた。——その結果が、これ。

——も、もう限界……っ。

幾度となく緩みかけた栓をすんでのところで括約し直す。階段の途中でぶるりと腰を震わせ、数秒そこに留まって波を乗り切ると、急ぎつつ、慎重に足を進めた。

深夜の清掃で鎮守府庁舎のトイレは閉じられ、自室へ向かうしか選択肢がなかつた。アルコールの利尿作用が響き、膀胱は既に張り詰められているのに腎臓から新たな水分が送り込まれ続ける。部屋に着き次第直ぐに扉を開けられるようにとカードキーを握るその手には汗が滲んでいる。

あの時、他の艦娘と同じようにお手洗いへ行つておけば。スッキリした表情の彼女達の顔が思い出され、後悔ばかりが胸に去来する。今朝の我慢の比ではない辛さに視界がチカチカする。

頭の中はもうこの我慢からの開放しか考えられなくなっていた。

部屋の入口、ユニットバスと扉を二つ開け、目の前に待つのは白い陶器——洋式のお手洗い。そこに座り込み、乙女の熱水を、放つ。

片付けの最中から何度その妄想をしただろう。とにかく、下腹部に重くのしかかる強い排尿の衝動をなんとか相応の場所まで持ち堪えさせることが現在の彼女の命題だった。

どうにか、宿泊している部屋の階に辿り着く。あと少しだけ歩けば……手前から3つ目の部屋、そのドアノブの少し上にカードをかざして、開いて、ユニットバスへ。そして——。

「きゃん……っ！」

微かに見えた希望を前にして、秘められたダムもその限界を強く訴えかける。甘い誘惑に傾きかけた意識を再び叱咤し、覚束ない足取りで前へ進む鳳翔。

——駄目、でちゃう……まだ……あと少しだけ……！

1、2、3つ目の扉。誰も見ていないのを良い事に、袴の上からぎゅうっと股間を抑えつつ、震える手でカードキーをかざす。

キーの認識の数秒すら果てしない時間に感じながら、引いた腰を左右に大きく振って耐える。電子音が響き、扉が解錠されるや否や、彼女は排泄を許される場所まで駆け出した。

ユニットバスのドアノブに手を掛け、開く。——と、中から水音が響いている事に気付いた。前を見れば、バスタブのカーテンが閉じられている。その幕に照明によって浮かび上がっている影が一つ。すらっとした身体、女と違い無駄な脂肪の無い胸——

「て、提督っ!？」

『あ、鳳翔か。おかえり』

思わず素っ頓狂な声を上げてしまうが、それどころではない。尿意を増幅させるシャワーの音、視界に捉えた白い器。

もはや恥も外聞も考えている余裕はなく。

「も……もう駄目っ！ 漏れちゃうー！」

『へっ?』

扉を閉めることすら忘れ、片手で袴を腰上に、ショーツはもう片方の親指に引っ掛けて辛うじて股下数センチにずり下げる。

露わになる鳳翔の薄く茂った陰部、陰唇、尿道口。漏らせば汚してしまう筈だった衣服が取り除かれ、外気に触れた括約筋がその仕事を放棄する。

「はぁ……っ！」

——出る……！

腰を便座へ落とす直前からフライング気味に飛び出す、彼女の小便。我慢に我慢に我慢を重ねた鳳翔の努力が実を結ぶ瞬間。陶器製のトイレの底面へ、激しい水流が打ち付けられた。

†

じよろろっ——しゅいしゅいしゅい。

飲み会がお開きとなりシャワーを浴びていた俺。遅れて部屋へ戻って来た鳳翔は、開口一番に我慢の限界を訴えてきた。困惑する俺とカーテン一枚を隔てた向こうで鳴り響くのは……。

「んっ……はぁ……っ」

シャワーでも掻き消されない水音と鳳翔の幸せそうな吐息。とてもなく艶やかな声。水音も一向に終わる気配がない。

これ……おしっこだ。鳳翔の……それも、ギリギリで間に合ったもの。

現状を把握……すれば、するほど……。……駄目だ、頭がクラクラしてきた。体を洗うことをやめ、タイル張りの壁に手を添えて身体を支える。全身の血液が俺の真芯に集まる。今日2度目の鳳翔のそれを前に、俺の理性の限界を興奮が軽く飛び越えた。抑えられない。どくん、どくと鼓動に合わせて、俺の陰茎は段階的に仰角を成していき怒張する。

†

しゅいしゅいしゅい——

膀胱の半分は空になっただろうか。未だ水勢は衰えを知らないが、

放心状態からやや平静を取り戻すことに鳳翔は成功する。放尿以外の事を考えられるようになって真つ先に思うのは、余りに性的なシャワーカーテン。

「……」

見てはいけないと心の中で思いつつ、意に反して視線はバスタブの方へ向かってしまう。

シャワーを浴びながら壁に両手をつく提督のシルエットの美しさに吐息が漏れる。だが——先程まで見られなかった部分、正確に言えば股間から飛び出す影の存在に気が付いた。

石鱈？ シャンプーの容器？ さっきまで無かった影なのだから、考えられるのはそれくらいか——と思つたところで、一つ見落としていた事実気付く。

——これ、提督の——

男性の下腹部で大きくなるもの。鳳翔の目の前で繰り広げられるこれは、間違いなく——

勃起。

「……っ!!」

理解した瞬間、下腹部の膀胱の裏にきゅんと電流が走る。呼吸が浅く乱れ、目がそこから離せない。おおよそ人間の心拍数と同じテンポでびくり、びくりと大きくなるその影。それにつれてはつきりとシルエットに形作られていく段差、凹凸は、鳳翔が本で読んだ限り亀頭、カリ首、裏筋と呼ばれる部位なのだろう。

「はっ……はっ」

カーテン越しの、すぐそこに男性のいきり立った性器が存在しているという事実信じられないほどの興奮を覚える鳳翔。開いた口から呼吸が漏れる。カー……と紅潮するのは頬に留まらず、全身が熱を持ったかのような錯覚に陥った。

最大の角度になったかと思われた提督の剛直だが、まれにびくんと根本から上下する様を見せる。そういった動きの全てが彼女の瞳に新鮮に映った。

しゅい——ちよぼぼ……。ちよろっ、ちよろっ。

しばらくして溜め込んでいた熱水を全て出し切り、紙を巻き取って陰部についた残りを拭った。この時も、提督のそれから片時でさえ目を離すことはない。

もう一度同じルーチンを繰り返し、ショーツと袴を元通りに穿き直して立ち上がると、トイレの水栓をひねる。こうして、鳳翔の危機は過ぎ去った……のだが。

途轍もない衝撃で上書きされた鳳翔の頭の中に、最早先程までの苦痛の記憶はない。

「失礼しました、提督」

『ん、ああ』

びくん、とまた跳ねる剛直。それを凝視する鳳翔の腹の奥も締め付けられ、下着に水気が染みる。

『風呂は少しだけ待ってくれ。もうすぐ出るから』

「いえ、ごゆっくりして頂いて構いませんよ。……それでは」

手を洗うとユニットバスを出た鳳翔。静かにドアを閉め、ふらりと自分のベッドに向けて倒れ込む。

「はああ……」

今見た光景を絶対に忘れないよう脳裏に刻み込む。興奮のあまりマットに顔をぐりぐりと埋めながら、半ば無意識に股間に手が伸びた。

優しく揉み込むように指をくねらせながら甘い刺激に身を任せる。絶頂には至らない指使いだが、代わりに心地よさで胸が満たされる。このまま浅く眠りに就いてしまおうか——という所で、ユニットバスから提督が現れた。

「鳳翔、風呂空いたよ」

「ん……ありがとうございます」

微睡みまじろから意識を引き上げられ、ゆっくりと起き上がる鳳翔。まだ身体が熱い。

提督を見やれば、部屋に備えられたバスローブを身に纏い、火照った首筋、胸元を晒している。普段の鳳翔ならこの時点で相当の興奮を覚えるはずだが、今回は違った。

——あ、もう膨らんでない……。

ちら、と下半身を盗み見て少しだけ残念な気持ちになりつつ、彼女は入浴の準備に手を付ける。

「ふう……」

湯浴みを済ませ、持参していたゆったりめの寝間着を纏いつつ蒸し暑い風呂場から戻った鳳翔。普段は後ろでまとめている髪も今は下ろし、あとは就寝するだけといった出で立ちだ。

提督がスイッチを切ったのだろう、寝室はメインの照明は大方消灯されており、枕元の間接的な明るみに照らされるのみでぼんやりとオレンジ色に染まっている。

鳳翔に背を向けるように寝転がる提督からは規則的な呼吸が聞こえてくる。まだ日付は変わっていない——飲み会の始まりが早かったお陰でそこまで遅い時間ではないのだが、出張の疲労が溜まっていたのだろうか。

「お疲れさまです、提督……」

ぽふ、と提督のベッドに腰掛ける。掛布の上から寝転がっている提督。照明の影に隠れてその表情は見えないが、きつと安らかな顔をしているんだろう。

男性でありながら多くの艦娘の上に立ち、防人さきもりとしての責務を果たす木南提督。一体どれ程の決意と覚悟を持って指揮をしているんだろうか。その健気さに、思わず母性に似た愛しさを感じて鳳翔は彼を優しく撫でる。

『——しちやいなよ、夜這い』
「……」

唐突に、北上の言葉が脳裏をよぎる。が、鳳翔は頭を振って否定した。そんなことはしません。今の関係が崩れてしまうような事なんて——と心中で天使と悪魔が戦争を繰り広げる。その最中、提督がむにやむにやと寝返りを打ち始めた。

「んん……」

こちらに背を見せる体勢から、仰向けになろうと動く彼。

バスローブが無理に引つ張られ、へそから足にかけて肌が露出される。そして、鳳翔は目の当たりにするのだ。——パンツ越しの勃起を。

「っー」

伸縮性の良さそうな素材の下着をこれでもかと押し上げるその姿。伸びきった薄布はその肉棒の先端の凹凸を、間接照明はその陰影をはっきりと映し出す。

「て、提督……っ」

鳳翔にとつて2度目の遭遇。先刻の衝撃から、ようやく激しい性的興奮から抜け出したばかりだったのに——まるで差し水で落ち着いた熱湯が少しの加熱で吹きこぼれてしまうように、いとも容易く鳳翔の中で劣情が再び鎌首をもたげた。

——見たい……見たい。

胃の上辺りがぐわりと締め上げられる感覚。むらつくという言葉の意味を身体から学びとる。生唾を飲み込んだ鳳翔の頭の中は、既に天使と悪魔の戦いに決着がついていた。

——見たいっ！

天使は八つ裂きにされた。己の欲求のままに手を伸ばし、テントの間から提督のを導き出す。

ぶるん、と露わになる——提督の、陰茎。

「~~~~っ!!」

ペニス、男根、おちんちん。数々の言葉で言い表されるそれは、まさに世の女性にとつての淫欲の原点。エロスの根源。この時世、どれだけ願っても触れることなく生涯を終える可能性もある部位。

それが今、目の前にある。

「はあっ、はあっ……」

鳳翔の眼下で、一切の萎えを見せず直立する棒。先端は紅く、竿は浅黒く。根本で広がる茂みすら鳳翔の興奮の材料となる。

寝室に響くのは、提督の整った呼吸と鳳翔の獣のように荒げた息の音。

——あ、ショーツ……。

脚をすり合わせるだけで粘性がクロツチから滲み出す。愛液がとめどなく溢れる様子を文字通り肌で感じつつ、その不快感も剛直を前にした興奮で即座に上書きされた。

がぼっ、と鳳翔は提督の太ももの間へ伏せる。視界一面が提督の陰部となり、そのまま見上げた。重力に逆らい、天を衝く怒張を前についに我慢ならなくなった鳳翔は、更に顔を近づけて――

「――はぶっ」

亀頭にしゃぶりつく。

†

女性の嗅覚は敏感だって聞いたことがある。男はオナニーしてから最低2時間は身体からあのニオイが漂ってるらしく、女はその臭みにすぐ気づくらしい。

だから必死で抜くのを我慢した――手を触れずとも至ってしまった。そんな興奮を乗り越えて。次にユニットバスを使用する鳳翔が不快なニオイに戸惑わないように。自室に戻ったら何を差し置いてもまぶすはぶっこ抜くことを胸に誓って。

この宿舎に俺が自慰をするスペースなんてない。悶々としたままベッドに横になったものの、アルコールの手助けもあつてすぐに俺は意識を手放すことに成功した。

……のだが。

『んっ……んふっ……』

くぼっ、ちゆる……じゆるる……

なんだ、この音？ 何かを吸うような、舐めとるような……。眠りから浅く覚めた俺は目を閉じたまま、まずその響きを耳にする。それよりなんだか股間が温かい……。気持ちいいな……。

――いや待て。股間？ 物音もそこから!?

寝起きで思考が定まらないままに異変を察知する。わけも分からないまま、俺は瞼を開いた。

「……んっ!!!?」

目にしたのは、俺の上に跨がる……緑色のバケモノ。なんだあれ!?

「んんっ!? ん!!?」

即座に起きようとしたのだが、ぴくりとも身体が動かない。かつ、金縛り!? こんな時に! ……んあっ♡

小さい頃にかいけつゾ○リで見た宇宙人のようなソレが、タコのように伸ばした口で俺の大事な息子を包みこんでいた。じゅるりと音がすれば、敏感な先っぽから電流が走る。

た、助けっ……! 首も満足に回らない俺は必死に目を横に向け、鳳翔のベッドを見る。彼女はすやすやと就寝中だ。起きてくれ鳳翔! 宇宙人に俺の遺伝子を研究されちまうぞ! きつとそのデータを基に地球を滅ぼす気なんだ、奴らは!

「ほ、鳳翔……! ほっ♡ 翔……!」

やたらに情熱的な舌使いに意識がかき混ぜられる。この状態をどうにかできるのは鳳翔しかいない。満足に回らない舌で、必死に彼女を呼んだ。

気付け、助けてくれ! 鳳翔……!

†

雑誌やネットで聞き齧った知識を基に、ふんだんに唾液を絡めた舌——鳳翔のそれが張り詰めた亀頭を行き来する。

ちゅ、れろ……じゅぽっ。じゅぷっ。

瑞々しい唇で鈴口とキスを交わす。そのまま吸い付き、提督の溝を下から舐めれば、上端を刺激した瞬間に肉棒が大きく跳ねた。

興奮が止まらない。ふと提督の顔を伺うと、眉をひそめ、眠ったままに悶える提督の淫靡な表情が。

はあっ……提督、提督……! 以前何度も堪能した提督のあそこの匂い、下着の匂いの主は今、自分の粘膜の中。

しっとりとした陰囊を片手で遊び、舌は真っ赤な肉の鈴口を。コンクリートのようにながちがちの竿と、熟れた果実のようなハリをもつ頭かしら

の硬さの違いなんて、今日まで全く知る由もなかった。

「ほっ、鳳翔……鳳、翔……」

「……っ！ 提督……？」

目を瞑ったままの提督が私を呼ぶ。私を、情欲に負けて貴方を襲うこの獣を呼んでいる。

——んはあっ……っ！

ぞくぞくっ、と背筋に走る快感。オーガズムとは違う、だがそれより甘美な稲妻で脳内がどろどろと融解する。提督へ色目を使う人間を見るたびに胸に積もっていた、黒い……何か形容できない感情が瞬く間に浄化されていった。

今は、今だけは——提督は私のもの。

じゅっじゅっ、くぼっ、じゆるるる。

やがて提督の大切な二つの宝石が怒張の根本へ寄っていく。鳳翔はこの現象を、雑誌の特集で知っていた。

「鳳翔っ……！」

「ふっ、ふうっ！」

じゅぷっじゅぷっじゅぷっ。

射精が近いのだ。また一段と腫れ上がった亀頭からとめどなく先走りが垂れる。提督の息が荒れる。口蓋と舌で包み込まれた肉棒は、淡くも激しい摩擦で性感の頂きまで昇り詰めようとしていた。

そして、それは訪れる。

「……んぐっ！」

びくっ！ と提督の腰が跳ねた。

——びゆるるっ！ どくっ！ どくっ——

「っ!!」

鳳翔の口内に放たれる、精。オーガズムの収縮を舌と唇で感じ取る。

イかせてる！ 男性を……提督をつ！ 射精させてる!!

その事実を理解し、遅れて鳳翔も軽く達してしまふ。

一般的に絶頂とは、女性は達し易いものの、男性のそれを女性が導

くのは相当な技術か心の繋がりが必要と言われていた。初めての口淫で提督を悦楽に浸らせたとあっては、歡びも相当なもの。

ちゅっ……ごくん。

ほんの少しもこぼさないように鈴口を吸って子種を口に含むと、ゆつくりと嚙下した。むせ返るような雄の匂い。力尽き、萎えた陰莖。これほど女の性的欲求を満たす光景は他に無いだろう。

「提督……提督っ」

満足した鳳翔は愛おしそうに陰莖へ頬擦りをする……が、そこでハツと我に返った。冷静に考えて、これは強漢レイブ以外の何物でもないのでは？ 心の中で罪の意識が急速に芽吹いていく。

「いや……これは、違っ……！」

血の気が引いた顔で現実を否定する鳳翔。その間もぶにぶにと海綿体をつつく指は止めない。

——これが提督に知られたら、今度こそ本当に解体されてしまうかもしれない。提督に会えなくなってしまうのは……嫌。絶対に、嫌。

そう思い立つや否や、素早い手付きで後始末を始める鳳翔。ウエツトティツシユで陰部を拭き取り、衣類の乱れを直す。情事に関する一切の痕跡を隠滅せんと動く彼女の技術は、日々鎮守府でこなす家事のノウハウが活かされていた。

「……これでよし、と」

30分後。すっかり家事モードとなった鳳翔は達成感に包まれつつ、隣のベッドへと潜っていった。

静まった部屋に残されたのは、栗の花の匂いだけ。

+

翌日。宇宙人に搾り取られる夢を見て気分が優れない提督と、妙に肌がツヤツヤとした鳳翔——全くもって対照的な姿で出張から戻った二人を見た豊施とよせ鎮守府の艦娘達の間では、様々な憶測が嵐のように飛び交ったという。

しかし、誰が言ったか『あの鳳翔さんの事だから、横須賀鎮守府の大掃除でもしたんじゃないの。んで、提督にも手伝わせたとか?』という推測に、鳳翔の人望もあつてか誰もが納得し、事態は収束の一途を辿った。

「うくん、本当かなあ……?」

たった一人、吹雪だけに違和感を残して。

番外編：私の本当の性癖は (★)

深夜の艦娘寮。その一室、月明かりの差し込む部屋に、断続的な粘性の音と雌の匂いを振り撒く少女が一人。

『ほらッ！ イきなさい！ 貴方がパパになるのよッ!!』

『やめっ、止めてくれ……！ ああっ……♡』

部屋着のズボン、ショーツをずり下げてベッドに横向きに寝る少女——龍田。彼女はイヤホンを接続したスマートフォンを顔の真正面に寄せ、空いた手で秘所をまさぐっている。

指先で触れるのは、控えめに顔を出す乙女の蕾。桃色のフードに守られた側面を二指で挟み込み、転がすように交互に上下する。そのバタ足のような動きの間で揉み込まれる肉芽から、淡い快感が幾重の波のように龍田の脳髓を行き来した。

「ふっ……っ……」

びくり、と膝が曲げられる。肉の重みでぴっちり閉じられている彼女のクレバスからは、滲み出るように溢れた愛液が腿へ垂れられている。

眼前で広がるのは、裸の男性を組み敷いて行為に及ぶ——正常位の動画。やや女性の発言が過激な以外は、ごくごく平均的なアダルトビデオの類だ。

『大きくなってるわ♡ このまま射精して!』

『い、嫌だ……!』

「はあ……っ!」

吐息を漏らしつつ画面を凝視する龍田の顔は、液晶の光に照らされ、欲情している様子が良く見て取れる。微かに熱を持つ頬、額に滲む汗。……しかし、その目はどこか冷静さを帯びていた。

『イってしまう……! 頼む、離れてくれ!』

『ダメ。早くオスアクメを見せなさい!』

『ああ……くっ、もう……出るっ!』

男性の懇願は跳ね除けられ、破裂音を響かせながら激しく女性の腰が打ち付けられる。やがて、彼は身体を数瞬硬直させ……大きく跳ね

た。

『あああつ！ んぐつ！ は——』

吐精しているのだろう、男性が声を震わせる。——が、ここで動画は一時停止。

「んぐね……」

ボソリと呟くのは龍田の声。陰核への刺激はそのまま維持しつつ、動画のシークバーを30秒ほど前に巻き戻した。そして、再生。

『やめ、止めてくれ……！ ああ……♡』

「……」

男性が絶頂への兆候を示すシーンから再び視聴する。龍田の自慰が少しだけ勢いを増した。順調に性感が段階を昇って行き、水音がより空気を震わせる。

『ああ……くっ、もう……出るっ！』

「……っふ……！」

男性の言葉で更に興奮を増した彼女。太ももは力み、陰部全体から小さな肉芽へ痺れが集約されていく。

『あああつ！ んぐつ！ はあ！ ああ……！』

そして訪れる、男性にとっては初、視聴する龍田にとっては二度目の絶頂のシーン。

彼の苦悶の表情。悩ましげな眉。野太い声が悦楽を訴える様を前に、龍田の腰も爆ぜる。

「んっ！ はあっ！」

びくっ、びくっ……目をぎゅつと閉じ、思考を侵食する快楽に震えて耐える龍田。その最中も、駄目押しのように人差し指と中指で蕾を擦る。

「んう……♡」

これが気持ちいいのだ。理性を手放しそうな、何とか留まりそうなぎりぎり揺れる龍田だったが、やがて頂から降りるとその刺激も止まった。

「はあ……はあ……」

肩で息をしつつ、パタリ、とスマートフォンを倒す。視線の先には、

離れたベッドの上で眠る天龍の顔。よかった、起きてない。絶頂の余韻に浸りながら、そうぼんやりと見つめていたが――

「ふう……」

深呼吸一つで落ち着きを取り戻し、むくりと彼女は起き上がる。イヤホンを外し、枕元に置かれた箱ティッシュから二、三枚をまとめて引き抜くと、慣れた手付きで糸を引く指先、濡れた股間、尻肉を拭う。控え目の陰毛にも絡んだ愛液に眉を顰めつつ、もう一枚も手元に足した。

ショーツとズボンと穿き直すと、ティッシュをゴミ箱へ投げ入れ、スプレー型の消臭剤をそこに吹きかける。窓を若干開けて海風で空気の入れ替えを促すと、筆筒から寝間着と替えの下着を取り出して廊下へと歩みを進めた。

「お風呂、お風呂……」

これが、龍田が自慰をする日のルーチン。

同室の天龍が寝静まった頃、事を済ませると……入浴し、就寝。週の半分はこの通りに秘部を濡らす。彼女のストレスを発散させる行為として、決して小さくない割合を占めているのである。

†

なくんか、物足りないのよねえ。

最近、いつも通り遠征任務を遂行する龍田^{わたし}の頭の中で、たった一つの違和が存在感を増していた。

というのも、自慰に満足出来なくて。天龍ちゃんの入れ知恵でその気持ち良さの虜になって以来、二日に一回くらいの頻度で繰り返しているけれど……ここ一週間くらい、何故だか作業の感が強くなってしまっている。

「はあ……」

「ん？ どうした、龍田？」

つい大きな溜め息をついてしまうと、隊列的に私の一つ前を駆ける天龍ちゃんがそれを拾って気遣ってくれた……もう遠征の帰路、おまけに彼女は旗艦を任されてヘトヘトの筈なのに。

そんな優しい姉の愛に、ちよつとだけ甘えちゃおうかしら。

「天龍ちゃんって、毎日オナ……自慰してるじゃない?」

「はっ……? なんだよ急に!? やめろよ! チビ共の前で……」

「あら? 天龍ちゃんが私に教えてくれたのに、質問もさせてくれないのかしら」

ぼつ、と顔面を真っ赤にする天龍ちゃんは、慌てて私達の後ろに続く駆逐艦へ目を向ける。弄り甲斐があるわあ。

「天龍さんが龍田さんの手ほどきを……」

「それは誤解だからな電!」

生唾を飲み込む電ちゃんの見線が、天龍ちゃんの手と私の股間を行き来する。そんな中「Gって何?」と割り込んできたのは暁ちゃんだ。

「処女どうていには早いのです」

「電もだろ!」

「なっ……け、経験あるもん! セックスセックスうー!!」

「お前ら静かにしろおお!」

收拾がつかなくなりかけたギリギリのラインで天龍ちゃんが声を張る。息も絶え絶えに私達を睨む彼女は、観念したように口を開いた。

「はあ……はあ……そうだよ。毎日やってるよ」

「だよね。友達と大浴場に行く10分前に、お手洗いでしてるんだよね?」

「あっおい! 何もそこまで言う必要は……もういいよ。根掘り

葉掘りオレのオナニー事情聞いて楽しいかよお」

「もおくごめんごめん、拗ねないで天龍ちゃん」

いけない、ついからかい過ぎちゃった。ふくれっ面でそっぽを向いちやっただ彼女の視界に回り込みつつ、私はやっ和本題に入る。

「でき……天龍ちゃんは毎日スッキリ出来てる?」

「は? どういう事だよ」

本気の声色に気づいてくれたのか、ツンとした態度を解いて私と向き合う天龍ちゃん。

「最近、伊っても物足りないというか、モヤモヤが残るのよ」

「い、イツ……でも、か。オレはそうなった事ないな」

「オーガズムを感じても……。あんなに気持ちいいのにですか？」

顔を赤らめてちよつと口ごもる天龍ちゃんと、スパツと発する電ちゃんの対比が少し面白い。絶対に口には出さないけれど。

「うん……気持ちいいのは気持ちいいのだけど……」

「あ、分かったかもしれないのです」

そんな中、さながら某少年探偵のように鋭い顔で顎に手を当てていた電ちゃんが何かを閃く。そのままこちらを振り向いた。

「天龍さん、この間自分のフェチを、”コンドームをつけたおちんちん” って言っていましたよね」

「ぶっ！……んああ、あの時は深夜のテンションで口を滑らしちまったんだ……そうだよ。悪いかよ」

「悪いなんて言っていないのです。つまり和漢わかんモノで天龍さんは毎日致してる、と」

確かに以前、ゴムが好きと言ってたっけ。「オレを弄りたいだけだろ?! そうなんだろう!？」と騒ぐ天龍ちゃんを尻目に、電ちゃんは続ける。

「どうどう。推理ショーは順序が大切なのです。……で、龍田さんはイキ顔と言っていました」

「ええ、そうね」

「それが間違いなのですよ」

「……え、何？ 私、フェチを否定されたのかしら。」

「ひっ……か、勘違いしないで欲しいのですが、イキ顔は電だつて大好き物なのです」

少し後ずさる電ちゃん。いけない、怖い顔をしていたわ。

「ただ、龍田さんの好きなきイキ顔” っていうのは、女なら誰でもオカズにする類のものなのです。つまり、電に言わせれば——それはフェチじゃない」

「どういう意味だ？ まあオレだつてそれにはそそられるけどよ」

「電は男を快感で泣き喚かせるのが好き。天龍さんは穏やかな愛のあるセックス。これは中々に解り合えません。でも、イキ顔は二人とも

通じている。……尖っていないのです、イキ顔は」

ハテナを浮かべるのは私だけじゃなかったみたい。天龍ちゃんも彼女に問いかける……が、直後に天龍ちゃんはその膝を叩くことになる。

「例えるなら、性癖を術式として……龍田さんののは、まだ呪力コントロールの途中程度なのです」

「ん？ ……つああ~~~~っ!! そういうことか! なるほど!!」

突然大声を上げて納得する彼女。でもごめんなさい、全然分からない。

「だからよ龍田、お前は自分の本当のフェチを知らない可能性があるんだよ」

「私の、本当の……?」

「はい。もつと自分にあつた性癖を見つけてられないせいで、気持ちはいいけど心が満たされなくなっているのです」

電ちゃんは続ける。

「自分との対話で、性癖の核コアを見つけるのです!」

「見つけるって言っても……」

「多分龍田は業者が制作したまともなAVしか見て無いんだろ。適当なサイトのURLを後で貼っとくぜ」

「あ、ありがとう……?」

そうと決まれば、と天龍ちゃんが戦速を最大に引き上げる。そのお陰もあって、帰投したのは夕食の前。こうして、私の性癖探しは始まった。

食事を済ませ、私と天龍ちゃんも自室でくつろいでいた。もうそろそろ消灯時間というところで、天井の照明は切っている。

天龍ちゃんがメッセージアプリで送信したリンクをタップし、アダルトサイトへ足を踏み入れる。数々の動画のサムネイルの下に、少し怪しい日本語で説明が書かれていた。

「海外のサイトだけど、日本の動画もたくさん載ってんだぜ」

にしし、と笑う天龍ちゃん。もう入浴(と自慰)を済ませた彼女は、

私がベッドの上でぺたりと座る様を見ていた。

「ありがとう。色々探してみるわね」

「おう。んじゃ、ごゆっくり〜」

彼女は私の様子に満足すると、枕元の照明も消し、ベッドへ潜る。

「……」

つつ、と適当にスワイプしつつサムネイルを眺める私。

性癖、かあ……。自分で分からない以上、このデータの海から見つけ出すしか無いとしても、余りにも骨が折れる作業のような気がしてならない。

取り敢えず見てみようかしら。そう思い立ってサムネイルを開いていく。

和漢モノ、時間停止モノ、陵辱モノ……。色々と渡り歩くものの、一向に琴線に触れる動画に出会わない。

そんな中、一つの動画が目についた。

「自撮りオナニー」……」

サムネイルを上下に貫く浅黒い棒。その圧倒的なインパクトにつられた私は、思わず動画のページへ飛んだ。

ところで、自撮りって何かしら？

+

『……ん、撮れますか……う？』

……え？ え？

暗転した画面、ガサゴソと端末を弄る音。しばらくすると、質素な部屋とベッド、そこに腰掛ける青年の姿が映された。マスクで半分は隠れているものの、顔はそこまで悪くなさそう。

画質が少し粗い。今までしっかりとしたサイトで動画を購入・視聴していた私にとっては、これも新鮮に映った。

「あ、自撮りってそういう……」

アマチュアの投稿動画なのね。やっと意味を理解しつつ、男性の次のアクションを待つ。

『それじゃ……』

おもむろにチャックを下ろし、しなやかな指で中から秘部を導き出した。

「……っ!!」

現れたのは、無修正の陰部。萎えた茎がぐねりと引っ張られるその姿は、半分ほど頭が皮に覆われていた——その全貌が、何一つとしてぼかされていない。

「……!」

言葉を失った。だって、今まで利用していた動画は、ただの一つだってモザイクの無いものは存在しなかったから。規制だか何だかで、ピンクと肌色の組み合わせとしか認識していなかったそれ。

今までだってもちろん生で見たいと思うこともあったけど、法律だからと諦めていた。

その規制を、さも当たり前かのように無視した動画が目の前で再生されている。

「はっ……はっ……」

『誰かに見られてると思うと、興奮するな……』

シームレスという言葉でしか表現できないような滑らかさで、彼の海绵体が大きくなっていく。血が通っていくのが見て取れる。まず茎部が怠そうに立ち上がり、真っ赤な先端も張りを得る。

『触るね……』

青年の手が竿を握り、ゆっくりと上下する。血流を促すような手付きで表面を撫でるそれ。更に怒張を増していく、おちんちん。

「……」

ゴクリ、と生唾を飲み込み、私は股間に手を伸ばした。興奮の度合いが今までと違う。もういつものように横になるのも、ズボンを下ろすのももどかしい。下着の隙間から手を差し入れ、茂みの下へ滑らせると柔らかな肉を揉む。

だ、駄目……。まだ天龍ちゃん、絶対寝てない。気を使って向こう

を向いてくれているのだけど、きつとそれだけ。

ほんの少しの理性が訴える。けど、もう無理。熱を持った私のあそこから滲む、普段より粘り気のある液体が指先に絡む。止められない。

『あ、気持ちよくなってきた……』

彼の手の勢いが増す。もうすっかり剛直と呼べるような形になったおちんちん。

「ふっ……！」

それを眺めながら、私は私の一番気持ちいい所を中指で柔らかく押しつぶす。次第に硬くなり指の腹を弾く位になったところで、人差し指を足していつも通りに挟み込む。

『んっ……』

しゅっしゅっしゅっ——

「はあっ……っ！」

——くにつ、くりゅ、くりゅっ。

陰茎を扱くりズムと、お豆を圧迫するリズムが合致する。き、気持ちいい……。この人も、私と同じような快感がお股に走っているんだろうか、そう考えるや否やむらつきがいつそう増した。

とそこで、青年が思い出したかのようにカメラを見つめる。

『あ、ごめん。遠かったよね』

火照った顔で艶やかに笑いながら、手がこちらに伸びる。録画機器が移されたのは、彼の腿と腿の間。……おちんちんの真下。

「……っ!!」

『(汗)どいこっ?』

画質が粗かろうが、ここまで近づけばそんなのは些細なもの。少し湿った先っぽの割れ目、そこから伸びる赤い筋、若干余り気味の肌色の皮——おちんちんの全てが私の目に飛び込んでくる。

やばっ……やばい……!!

その何もかもを初めて見る私には刺激が強過ぎた。暴れる指、背筋を駆け上がる電流。もう鼠径部が痺れを訴えている。最中、抑えの利かない指が勢いよく私のお豆を弾いた。

——ぺちり。

「んあっ……っ！　っ！」

駄目！　声、抑え——っ！

スマホを手放し口を抑える。漏れそうになる声を喉元で殺しながら指先で割れ目の甘い収縮を感じ取った。

……か、軽くイっちゃった。おちんちん、見ただけなのに。

ちよつとだけの絶頂に落ち着きを取り戻し——たのは、私の頭だけ。お股を弄る指はまた刺激を始め、手放した先で再生され続ける動画に再び目を落とす。ベッドに片手をつけて、覗き込むような格好。『ほら、分かる？　もう……イくかも……』

鈴口から垂れた汁が上下する彼の手によって引き伸ばされ、てらてらと光る。私は荒れた息を整える事すらできずにそれに魅入った。そして、気付く。

竿と先端を繋ぐように走る筋。そこへ繋がるように伸びる皮の肌色と、亀頭の赤色——そのグラデーシオンに。

「あ……あっ……」

——どくん。心臓が大きく鳴る。理由は分からない。分からないけれど、目が離せない。目が離れない。

まるで材質が違うかのような棒と肉。けれど、引き伸ばされた皮はその2つの色合いを併せ持ち、下から見れば肌色から赤、上から見れば赤から肌色と自然な階調を見せる。

こ、こんなの……なんでこんな……！
えっち過ぎい……！

指の先——クリトリスの硬さが増した。びくりと震えるそれを中指で上に引つ張れば、包む皮から目一杯顔を出す。我慢ならなくて、直接指で押しつぶした。

「ううっー」

普段ならこんな弄り方、絶対しない。刺激が強すぎるから。でも今は、これでも頭の中の沸騰に快感が追いついてこなかった。

止めどなく溢れてシヨーツを濡らす液を掬って、上に擦り付ける。

でろんと撫でるように指の腹で触れても、敏感に感じ取ったお豆がチリチリとした刺激に変換して脳髓を焼く。

もう青年の悩ましげな表情なんて眼中になかった。きゆうつと寄せられる睾丸より、びくりと跳ねるおちんちんより、皮の境目。肌色と赤。

「はあっ！ つううんっ！ 無理、無理い……！」

声を抑える余裕がない。身体を支えていた腕から力が抜け、肘をつく形になる。もう画面も見ず、ひたすらに腰からの快感に震える。

「い、いく、また……！」

て、天龍ちゃんに聞こえちゃう。どれだけ声が漏れたって、いつてる時のそれだけは絶対に聞かれない。

焼かれるように熱いお豆の先っぽに私の意識が侵されていく。背筋を走っていた痺れは今や下腹の、女クッだけの特権トリスで爆発の時を待っていた。

「イツ、ううう……！」

歯を噛み合わせて耐える。いく、いくっ——！

あ——

「——づづっ！ んっ！ んぐっ！」

溜めに溜めた性感が、暴力的に腰から全身へ拡がった。

意識が吹き飛ばされそうな快楽に、思わず腹筋に力が入る。ベッドに顔を埋めたまま背筋をくの字に曲げて、何度も訪れる波に跳ねる身体を抑え込んだ。

「づづづ……っ！」

シーツを握り込む手、力む腿とふくらはぎ。 軋むベッドの音。

な、長っ……！ まだいくの？ ああ——

視界が真っ白なのか、真っ黒なのか分からない。脳裏に動画の光景がちらつく度に新たな絶頂へ押し上げられる。

口端から涎が垂れていた。ベッドのシーツに染み込んでいるのはこれか、それとも愛液なのか。私にはもう考える力は無い。

「づっ……はあ……はあ……！」

何秒か何分か。時間間隔も無くなった頃、ようやく頂から降りた私。ずるつ、とお股に伸びていた手を抜く。その際にほんの少しくりに触れた刺激でまた腰を震わせながら、私はベッドにうつ伏せになった。

や、ヤバかったあ……♡

電ちゃんの言ってた通り、私の性癖ってイキ顔じゃなかったみたい。私の本当のそれは……おちんちんの……。

そこまで思考したところで、また身体の奥が疼き出す。でも、もう今日は無理。……眠い……あ、お風呂……入らな……いと――。

†

「おい龍田、龍田！……ったくどうしたもんかな……」

困り顔で頭を掻く天龍が見下ろしているのは、もう起床の時間だというのに、幸せそうな顔で寝息を立てる龍田の姿。朝日が差し込む部屋、彼女の指先には粘性の糸がきらめいている。

昨夜、冗談めかして「ごゆっくり」という言葉を妹に贈ったのだが……まさか直後に獣のようなうめき声を上げて自慰を始めるとは思ってもいなかった。

その一部始終を耳にしまった天龍。痴態を思い出すと、同性として、姉妹として流石に恥ずかしいというもの。

「おーい、起きろって……」

「ん、ん……」

正直、顔を合わせるのも気まずさを拭えない。そんな気持ちから控えめに肩を揺すつてしていると、当の彼女が薄っすらと目を開ける。

「おねえちゃん……」

「え？ えっ……どうしたよ」

寝ぼけているのか、幼い頃の呼び名で天龍を見る。

「ふえち、見つけた……」

「……は？」

そんな彼女から、口調に全くもってそぐわない内容が飛び出した。

「ちんちんの……皮の色……」

「……あ、そう……」

……

……

……こいつ、睫毛長いな……。

唐突に開示された龍田の真の性癖を前にして——現実逃避しか、天龍には手立てが無かった。

7. (前)

「今日はお早いですね、提督」

「ん？ ああ……。お客さんが来るんだ。さつさと食べて迎えの準備をしたくて」

朝食の席。俺の向かいに座りつつ玉子焼きを箸の先で細く分ける明石は、はむ、とその小さな口に運ぶ。

そんな彼女が、普段より早起きかつ忙しなく頬張る俺に疑問を投げかけた。……のだが、正直言って俺の方こそ問い返したい。「なんで俺達、毎日一緒にご飯食べてるの？」って。

「……なあ、無理して俺と食事の時間を合わせなくてもいいんだぞ？

明石、いつも夜遅くまで仕事してるだろ」

「いえ、そんなこと！ お、お互いの事を知る時間は必要ですからっ」以前にちよつとした勘違いをさせてしまった以来、すんごいグイグイ俺に迫るようになった明石。彼女の中では、俺と明石は付き合う一歩手前くらいまで進展しているらしい。

今までの事を思い浮かべる。いくら早起きして食堂へ向かおうとしても、執務室のドアを開けると目の前に明石は立っていたんだ。どれだけ恋する乙女の顔をして待ってたって、軽くホラーだぞ。

飯だつてあんまり共通の話題もないから、大抵は頬を赤らめながらこちらをチラチラ見る明石の視線に曝されているだけだし。……まさかこいつ、俺をオカズに白メシをかつこんでるんじゃないだろうな!?

……とにかく気まずい。非常に……。とはいえ素直に断れないのは、処女のガラスのハートを知ってしまったているが故の優柔不断か。

——つと、もうこんな時間。

「ごちそうさま。じゃ、明石」

「は、はいっ。お昼は——」

「悪い。今日は駄目そう」

そうですか、と俺の言葉に小さく相槌を打つ。そのしゅんとする姿を見て、思わず罪悪感が湧いてしまった。ああくそっ、こうなった原

因が俺のアホみたいないな行動（雄っぱいを露出しようとする）だから穏便な解決策が見えない。

いや、今悩むのはよそう。臭いものに蓋じゃないが、目前にもつとでかいヤマが迫ってるんだ。

——もうすぐ舞鶴鎮守府から、提督と選りすぐりのエリート艦隊がやってくる。

長い一日になるのは目に見えていた。

†

秘書艦の吹雪と二人、鎮守府の正門の前に立つ。

「うわ……今日も死ぬほど暑そうだな、吹雪。……吹雪?」

うう、シャツが蒸れる。外は朝っぱらからムシムシしていて、真夏日を予想させた。……つてのに、隣の少女は歯をガチガチと鳴らして震えている。

「ほ、本日はヒトサンマルマル一三〇〇から、えっ演習となっておりますしゆ。私はそちらの艦娘の誘導を——」

彼女はぎゅっと握りしめたバインダーに齧りついてひらすら何かを復唱していた。どうやら寒いわけじゃなく、極度の緊張由来のものらしい。

舞鶴提督と会った時の連絡の練習か？ 確かに秘書艦の大事な役目だけど……たったそれだけの言葉を紡ぐためにここまで焦る姿は随分と可笑しいな。

「はは、そんなに固くならなくても」

「なりますよ！ 遥かに格上の鎮守府さんですよ!? お迎えするのは二度目ですけど、慣れるわけじゃないです……!」

ぶつぶつと小言を連ねる吹雪。どうやら舞鶴鎮守府に相当の引け目を感じてるらしい。

まあ、うちみたいな小規模な鎮守府とは艦娘の練度やら提督の資質やらも訳が違うだろうし、そももなるか。

「焦りもしますよ……」

彼女は未だに青ざめた顔でバインダーの用紙を見下ろしている。そういう俺自身も若干気持ち昂ぶつてるところはあるしな。気持ち分かるよ。

そうだ、ちよつと茶化して緊張を解いてやろうか。

「焦る、か。それって……俺のおっぱい見たときより?」

そう。それはこの貞操観念の逆転した世界に来た時、何も知らない俺は下着姿で吹雪に迫った事があったのだ。その後俺の乳首を見た彼女は失神した。

「へ?」

「俺のおっぱい見たときより焦ってるの? って」

ちらり。制服の胸元のボタンを開け、俺は少しだけ肌を白日の下に晒した。

「——ぶっ!! ちよ、それ、それっ違っ!」

俺からの発言に一瞬きよんとした吹雪だったが、直後に俺の方へ向き直し、両手をわたわたと動かして何かを伝えようとし始める。

「お、おっぱ、それも焦りましたけど! えつと!」

「スケベだなく」

「いや、スケっ! スケベじゃ——」

真っ青だった顔がトマトみたいに赤くなってるし、おまけに視線だけは胸元から離さない。これは面白いわあ。更に追い打ちしてやろう。

俺は向こうの方へ指差しながら呟いた。

「あつ、舞鶴さん来たな」

「あ!?! あわわっあつ!」

胸元と指差した方とを歩き来させる吹雪の目。明らかに胸を視る時間の方が長いのは、愛嬌だ。

「どっ何処ですか!?! 司令官襟正して、襟! 早く——」

個人的に満足したところで肩をトントンと叩いて、彼女に言う。

「……うっそー」

「ん!?! あつ……くくくくっ!」

「あっはは、面白っ!」

ついけらけらと笑ってしまう俺。そのせいで、涙目で手を強く握りプルプルと震える吹雪が続けた言葉を半分くらい聞き逃してしまっ
た。

「……役得、役得……ああもうだめ、もう組み伏せて分かせてやりた
い……！」

「え？　なんて言った？　分からせ？」

「いつ!?　何でもありません！　ありませんから！」

よく聞き取れこそしなかったが、単語の陰に不穏なモノを確かに感
じる……。分からせ、だっけ？　今夜にでも検索してみるか。

……とまあそんなしようなないやり取りを続ける内に、正門前に公
用車がやって来た。

黒塗りのセダンから降り立つのは、凜とした顔をこちらに向ける
嶋田大佐。それと……秘書艦の北上か。

「嶋田大佐。わざわざ舞鶴よりご足労を」

「やあ木南中佐。この間ぶりだね」

手早く敬礼、答礼を済ませると、吹雪が今日の予定を読み上げる。

……筈だったのだが。

「ほつ本日は、ひ——」

「二三〇〇より演習、つしよ？　ねー中佐さん、後続の艦娘輸送車もも
うすぐ到着するよ。艦娘たちの誘導はそっちの秘書艦さんに頼んで
もいい？」

「えっ？」

まるで吹雪のことなど眼中に無いかのように彼女の言葉を遮り、俺
にぐいっと顔を寄せた北上。

「木南中佐さーん？」

後ろ手を組み、上目遣いにこちらを見つめる。重力に従って襟元に
できた空間に現れた鎖骨、その窪みについて目が奪われてしまった。

ふわりと鼻孔をくすぐるシャンプーの香りは妙にぬるい空気に
乗って、なんとというか……生々しさにくらりとする。

「あ、ああうん！　そうするよ」

「ありがとう」

はっ、つい空返事で受け答えしてしまった。ちらりと隣を見やれば、役目を奪われたショックで放心した表情の吹雪が。

「こら、北上。あちらを困らせるな」

「失礼しましたー」

嶋田大佐の叱責も意に介さずといった北上は、ふにやりと笑って大佐の後ろへ引き下がる。こちらは緩急つけた彼女の空気感にたじたじだ。

だが、確かに彼女の言った通り、ディーゼルエンジンの重い音を響かせて人員輸送用のトラックは到着した。

停車し開いた扉からは、複数の艦娘が顔を覗かせる。見た感じ、以前の記録とは顔ぶれが違うな。別の艦隊を連れてきたってことか。

「おとこっ！ 男よ！ 噂通りー！」

「なにー！ 嘘をつくでな……ちくくまーっ！！」

……なにやらすごい騒いでるんですけど。まあいいや、とにかく彼女達と大佐を庁舎へお連れしないと。俺と吹雪は事前の打ち合わせ通り、手分けして案内を始める。

+

嶋田大佐を応接室へお通しした所で、やっと肩の力を抜いた。

「改めて。ようこそ豊施鎮守府へ。嶋田さん」

「木南くんとうこうして会えて嬉しいよ。今日は宜しく」

「よろしく願います。北上もよろしく」

「はい」

お互いにテーブルを挟んで向かい合ったソファーに腰掛けつつ、ようやくといった感じで砕けた言葉を交わす。

以前嶋田さん直々に、崩した口調で構わないと言われたんだけど、流石に外でそんな真似はできなかつたからな。

「いちいちを」

「ああ、悪いね」

コトリ、と俺と嶋田さんの手前に冷えた麦茶が置かれる。現れたのは我らが鳳翔。吹雪が舞鶴の艦娘たちを案内するからと、応接室での給仕役を鳳翔に頼んでおいたんだ。

今日も今日とてお淑やか、それとしゃがんだ際にニーハイ越しに見えた膝のラインがすごいえっち。

いやもうホントにね普通のそれと比べると実は短めな袴ね。だから膝から下は白日の下に晒される。そこに白ニーハイが合わさってさあ肌色よりも影が際立つんだ。んで鳳翔の脚。この肉の柔さと無駄のない細さ、真理が唯一矛盾を見逃している。真理に愛された脚なんだわ。まあそんな中でも膝は骨と皮膚が近い分硬さが出てしまう筈なんだけど白ニーハイが中和するんだなこれが。だから俺は膝のラインがすごいえっちだなって思ったわけよ。

……っといけね、つい雑念が。

「よ、鳳翔。おひさ〜」
「むっ……」

嶋田さんの後ろに立つ北上が、鳳翔に気付くや声を掛けた。そうか、この間の会議で知り合ったのかな？ 対する鳳翔は——あれ？ 口ごもって頬を膨らませてる。かわいい。……じゃなくて。二人の間に何かあったのか？

しかし推測する暇もなく、嶋田さんが麦茶に口をつけながらこちらへ話を振った。

「今日は午後からの演習が大きな予定だけれどね。その打ち合わせの前にもう一つ、君に頼まなければならぬことがあるんだ」

——え？ 突然のカミングアウトに思わず目を見開く。彼女を見れば、いつの間にかだろうか、至極真面目な表情でこちらを見つめていた。

「……失礼、文書ではそのような事は」

聞いてない。今日は演習（勝てる見込みは無いが）、その後にはうちの艦隊を教導して頂いてお開きの筈だ。筈だった。

「いわゆる機密事項だよ。と言っても大した事じゃない。ちよつとしたお守りをしてほしいだけで」

機密？ お守り？

「と、いいいますと？」

ある種先の見えない恐怖の様なものに冷や汗を滲ませる。俺、なにやらされるの？ まさかヤバめの弾薬……劣化某弾の使用と戦闘データ収集とか？ 勘弁してくれ。

嫌な想像が脳内で渦巻く中、俺の表情が面白いのだろうか、若干頬を緩めつつ勿体ぶった態度を取る嶋田さんがようやく口を開く。

「なに、もうじき分か——」

とその時、応接室の扉が大きな音を立てて開けられた。

「たのもーっ！っ!!」

ばんっ、と現れたのは——これまた小さい女の子。駆逐艦より頭身が低く、幼女と言える体躯だが、身に着けているのはセーラー服だ。

「佐渡様の新しい司令はどいつだい！」

「対馬は、ここに♡」

いひっ、と八重歯を見せて、佐渡と名乗った彼女。

その後ろには、同じような背丈の娘がもう一人。威勢のいい佐渡とは対照的に、妙に大人っぽく右手を顎に添えながら身体をくねらせる仕草を見せる幼女は、対馬と呼ぶらしい。

佐渡、対馬——待て、この娘らもしかしなくても海防艦か？ 初め

て見た！ こんなに小さいの!?

「待ってえ！ もう、廊下は走っちゃだめって言ったでしょっ！」

「遅いぜ鹿島さん！」

「鹿島さんも走ってるじゃない」

「あなた達を追いかけるためですっ！ って——あっ」

理解が追いつかずに固まっていると、ぱたぱたと続く足音が。

二人より遅れて現れ、幼女達を見下ろし叱りつけたのは。ウエーブのかかったツインテール、優しげな目元、スラリとしつつも出る所は出ている身体の——鹿島。

かつて居た世界では、男達の子種を何度も無駄撃ちさせた女王その人が、扉の前でこちらへと敬礼を見せた。

「し、失礼しました！ 香取型練習巡洋艦二番艦、鹿島です。こちら

の択捉型海防艦、佐渡、対馬と共に豊施鎮守府への着任となりました」

「は？ 着任……？ うちに？」

「はいっ！ ——えっ男性!?」

「ほら、もうじき分かると言ったろう」

わたわたとする鹿島を尻目に、嶋田さんがこちらを見て笑った。

”海防艦”の艦娘が新たに顕現してね。こんなちゃんまいのが数隻、戦列に加わった」

「え、最近ですか？」

海防艦。俺も名前だけは知っていたカテゴリーの艦娘だ。とつくの昔に運用されてると思ってたけど、この世界じゃようやく艦娘として現れたらしい。

やっぱり前の世界と若干の違いはあるみたいだな。……ああいや、貞操観念以外の話でもってことね。

嶋田さんはそんな俺の思考なんて知るはずもなく、言葉が続ける。

「どうもこれだけ幼い見た目だと世間体が宜しくない。なのでしばらくは公表せずに運用していく方針らしい」

「は、はあ……」

……で、何故ここに？

「なぜここに？ と言った顔だね」
「うっ」

なんだかこちらをじっと見つめる彼女の瞳に全て見透かされているような気さえする。

「なに、新人研修みたいなものさ。海防艦には各地の鎮守府を転々とさせている途中なんだ」

「で、今度は豊施きみたちの番、と。しばらくの間あの2隻と保護役の鹿島を預かってくれ」

な、なるほど。

扉の方をちらりと見やれば、俺達の会話が終わるのをうずうずしながら待っていたらしい海防艦達と目が合った。

「よろしくな！ おとこの司令！」

「こーら、その言い方は失礼でしょ？ 司令、存分に働くつもりですから、楽しみに……ね♡」

「しばらくの間、お世話になりますっ！ ……お、男っ、男っ……」
し、尻尾が……、ぶんぶん振られる尻尾の幻が見えるぞ。よーしよし、待てが出来て偉かったなー。……なんて思考停止に陥りそうになるも、そこは上司の手前。あんぐり開いてしまいそうな顎にそつと右手を添え、思慮する素振りでなんとか支える。

そんなこんなで唐突な海防艦2隻とサキユバス（前世の認識だけど）の着任に言葉を失いつつ、応接間での歓談はお開きとなった。

†

風いだ海に硝煙が幾筋も連なって上る。俺は吹雪と二人、埠頭で艦娘達を待っていた。容赦ない日差し、海面からの輝り返しに思わず目を細める。

暑さに反して、胸の底には冷たさが広がっていた。

『いやあ……流石は嶋田さんの艦隊です。完敗だ』

ひとまず海防艦達の事は後にして、定刻通りに演習は行われた。大方予想していた事だが、豊施こちらの第一艦隊は向こうの第二艦隊に手も足も出ず。

『なに、私のじゃないさ。むしろ私が彼女達の指揮をさせて貰えることが光栄なくらいだよ』

『さて……私は今の模擬戦のフィードバックといこう。北上、旗艦を呼び戻せ。どうせ暇だろう』

こちらの旗艦が大破した際、居ても立っても居られず、つい口から漏れてしまった言葉。彼女の答え慣れている気さえする返事が脳裏にフラッシュバックして唇を噛む。

もちろん鎮守府としての規模も歴史も長い向こうに分があるのは当然だ。だが、やはり俺自身の——提督同士の能力の差も大きいだろう。

「くそ……」

身の回りが色々破茶滅茶だけど、それはそれとしてやるべき事はやらないとな……。

「テートク……！　s o r r y、また舞鶴に負けたヨ……」

「金剛！」

演習の場となった近海域から艦隊が帰投した。肌は煤に汚れ、艤装もひどい有様で。伏し目で縮こまる彼女達を見ているのが辛い。

「お前達は良くやったよ。あの舞鶴相手だ。負けて当たり前とは言いたくないが、編成を捻らずに真正面からぶつける演習にした俺の責任が大きい。すまん」

「そんな、謝らないでください……」

後学の為とはいえ、負けてこいと言える俺はなんて非道なんだろうな。こんな俺が彼女達にできる事といえば……。

できる事といえば……。

……うーん、ハグくらいかな？

「辛かったろ。入渠の前でも後でも大丈夫だから、俺を抱いてくれ」

俺の胸を皆に貸すぞ。俺の身体を通して出る包容力ちからで少しでも安らいでほしい。

「……え？」

そんな俺の思いと裏腹に、ぴし、と空気の固まる音がした。あれ？嫌だった？　なんなら艦隊のみならず、隣の吹雪までこつち見て口をあめぐり開いてるし。

「抱くって……アメとムチのバランス滅茶苦茶ですよ！」

「嫌だった？　ごめん」

「いい、嫌じゃ無いですけどっ！」

「エロっ……司令官……」

皆顔を真っ赤にして俺に迫ってくる。そんな中、金剛だけはひとり両頬に手を当ててイヤイヤと体をくねらせていた。

「テ、テートクっ、そんな……ハグなんて……」

「ちよっ！　金剛さん、ピユア過ぎ……」

「え？　金剛は間違っでないぞ。　ハグだよ」

何言っただ？

「は、ハグかあ……」

「皆、なんだと思っただよ？」

「やだあ、ハグなんて恥ずかしいネ……っ」

露骨に肩を落としてどうしたんだよ。

「いや、司令官とハグなんて最高ですけど……でも……抱きたい……」
「どうやら別の事と勘違いしてなかったのは金剛だけだったみたいだ。っていうか、金剛も金剛でハグで恥ずかしがるようなキャラじゃなかった気がするけどな……？」

†

うわ、死にてえ。

”抱いてくれ”って……。アホばっかりのこんな世界じゃそつちだと思うのか。さつきは色々と感情が入り乱れててすっかり失念してたけど。

艦娘達の性事情に悪影響を及ぼしてしまっただかもしれない……。結局誰一人としてハグせずに入渠へ向かってしまったし。

「ただの○ツチじゃん俺……」

父性からの発言だったんだけどな……。ひとり手洗い場の鏡の前で頭を抱える。

もうすぐ夕方といった時間帯。演習・休憩を終えた両艦隊は再び近海へ出て、舞鶴からの教導を受けていた。あと一時間半もすればそれも終わり、相手方は帰りの準備に入るだろう。

残りの俺のタスクとしては、嶋田さんからの戦術指南を頂いて、お見送り。それだけ！ 今日の仕事はおしまい！ 風呂入って寝る！

……なーんて事にはなる筈もなく。予定のために隅に押しやっていた書類の消化もさることながら、今日中に海防艦と鹿島に対してコミュニケーションを図る必要もあるんだこれが。

「……っしや」

パンと両頬を張る。気合充分、日付が変わる前には全部終わらせて

寝てやるからな！ 待ってる布団！

番外編：処女（どうてい）三人寄れば姦しい／奥手な
エースのバーニング・ラブ（★）

癖っ毛ショートカットの元気っ子、深雪。しかし今の彼女に普段の陽気さは見られない。神妙な面持ちで腕を組み、ボソリと呟く。

「最近の鳳翔さん、すげーハツラツとしてるよなあ」

ここは夜更けの食堂。一日の任務を終えた艦娘達が詰めかけそれなりに賑わう時間帯だ。

しかし、そんな中で長机の端席に腰掛ける深雪は、眼下で湯気を上げる夕餉をそっちのけで思索に耽っていた。

「なあ？」

そして、隣・前に座る艦娘に同意を求め視線を向ける。

「うん、提督との出張から随分とご機嫌じゃねえ」

「ハッ！ ヤバい匂い……NTRの匂いがする……！ まさか私の提督に手出しを……!?!」

深雪の言葉に返事をしたのは浦風に秋雲。女子中学生然とした見た目年齢通り、猥談大好きな青春真っ盛りの三人組である。

「はあ？ 司令官と付き合ってるみたいない方すんなよ」

「う”っ……じゃあこの胸の痛みは何!?!」
[ファントムベイン]

「幻肢痛やね」

彼女達が集えば、文殊菩薩も真つ青のスケベな智慧——もとい無駄言が口から飛び出すのが常であった。

「なんだかこの痛み、クチュリテイに繋がりそう」

「しよ、正気かよ秋雲……」

「考えてもみなよ、スペックで完全に上回る鳳翔オウケンさんに誑ナかされて、自分とやる時よりよがる提督！ 辛い……いい、いいわあ……!」

蕩けた顔を見せる秋雲。仕事帰りの疲れからか、誰に聞かれずとも性癖を語り始める。

対する深雪は彼女の妄想に否定的なようだ。

「いーやーだ！ 寝取られとか……なんで苦しみながらオナらなきや

なんねえんだ！」

「んなつ!? このらぶちゅつちゅ和漢原理主義者！ 毒も喰らって性癖を広げなよ！」

ばん、と机を叩き睨み合う。そこには幸せを糧にする者、苦しみを力に変える者の譲れない戦いがあった。——と言い飾ればそれなりだが、内容は自慰のネタの対立なのだから始末が悪い。

「まあまあ落ち着きんさい、ほらご飯食べよう？」

火花を散らす二人を苦笑して眺める浦風。どうどう、と宥める仕草に合わせ、彼女の双丘がもちもちと撓たわんだ。

実の所、今この中で誰よりも興奮しているのは彼女である。

浦風は何者かがオーガズムを感じている(妄想が出来る)ならば、なんでもオカズにできる極地に達しているのだ。動物でも可。

清濁(?) 併せ呑む、いわば護身完成に至った艦娘なのである。

「……確かに。冷めちまう」

「……いただきます」

しかしそんな事を他の二人が知る由もなく。

冷静に振る舞う浦風の言葉に、ひとまず目の前の食事を摂る事にしたのだった。

†

ご馳走様を済ませ食器を下げる内に若干頭を冷やしたのか、秋雲は大きく溜め息を吐くと「まあ……」と口を開いた。

「正直”あの鳳翔さんがそんなことするワケ無い”って分かってるから、安心して興奮できるところはあるよ」

「そりやあな。まじで司令官が喰われてたら、精神的轟沈する艦娘が出るって」

「……お話は終わった？そろそろ提督ブロマイドの見せ合いっこしたいんじゃないけど」

深雪と秋雲が適当な着地点を見つけたところで、浦風が切り出したのはブロマイドの話題。

これは、当鎮守府所属の重巡・青葉が秘密裏に販売している提督のオフショット——ではなく盗撮写真の数々である。

「あっそれ！　今月はどうかなあ」

「エッチなのありますように！」

パツと目の色を変えた深雪と秋雲に浦風は苦笑しつつ、懐からプラスチックの個包装を取り出した。

月毎に変わる内容は完全シークレット、全何種かも不明、ダブリ有というソーシャルゲームならば訴訟待ったなしの代物のだが、それでも圧倒的な需要の下で成り立っているそれ。

もちろん三人はそれなりの枚数を購入している。お互いに公開し合うことで所持・未所持を確認、場合によってはトレーディングへと発展するのが日常であった。

「今月は8枚買っちゃったぜ」

「やるじゃん、秋雲は6まいい」

「うちも6枚じゃ」

机の上に中身が透けない黒い包装がいくつも並ぶ。それじゃ、と深雪の一声でそれぞれが袋の上部の切り口をつまみ、小気味よく引張った。

「おっ……おっ!？」

「うわあ、エッロ……」

「当たり前じゃな！」

各々が鳴き声を上げながら複数枚を開封していく。

「あ、被った」

「これヤバ……っ！　……あーいてて、秋雲お腹いたい。10分くらいお手洗い行ってくるっ！」

「バレバレの嘘つかんの。抜く気じゃろ」

「ぐっ、ぐぬぬ……」

最後の一つを引つ張り出した所で、手に入れたブロマイドを整然と並べていく彼女達。

「さあ、じゃあお手並み拝見と——」

おもむろに立ち上がった三人は円陣を組むように等間隔に机を囲

む。

鼻下を伸ばした顔に影を落としながら、目下の写真を一望したのだ
が――

「……………」

皆一様に口をあんどり開けて固まった。

何故か。

――それは、彼女等にとってあまりに過激すぎたから。

曰く、とある写真は提督が下着シャツを捲くりあげて額の汗を拭う姿。露
わになる健康的な腹部、へそ。

元々薄手なその下着は肌の色を透かせるエロティックなもの。だ
が世の女性が見たいと願う胸部の突起は、シャツの裾を掴む提督の腕
によつて遮られていた。

しかし、むしろ見えないことにより想像力を喚起し、更なる興奮へ
と高める舞台装置と化している。

また、他のある一枚は提督が革靴と靴下を脱いでいる最中を写して
いた。ややニツちなものだが、男性からの電気按摩あしこぎフェチを抱く女性
はそれなりに居るのだ。

意地悪な笑みを浮かべた提督に自らの両足首を掴まれた上、彼の形
のいい素足でショーツ越しに陰部を揉み込まれ、無様に果てたいM気
質の艦娘のニーズに応えたショットと言える。

「これ、これ……エロ……っ」

極め付けは、執務室でうたた寝する提督の写真であった。

昼下がりの陽気にあてられたのか椅子に背を預けて安らかに眠る
提督。その股間には――ストラックスを押し上げる確かな怒張の存在
が。

神聖視すらされる男という生物、そのとびきり美しい寝顔と、生殖
が可能な事を生々しく主張する男性器のギャップ。

提督の行為中の逸物、行為後の寝顔の両妄想を究極のリアリティを
以て提供するこの写真に、処女達どうていの脳髄は易々と灼き切れ、性的欲求
に支配される獣と成り果てる。

今まで配布されてきたブロマイドなら、良くて提督の鎖骨を捉えたもの程度が最高位スーパールレアであつたはずなのに。たつた今、今月の購入分がこれまでのベストショットを全て過去コモンへと追いやつた。

「はっ……はあっ……」

「……今回はトレード無しで」

「賛成。……なあ、もう解散せん？ 解散しよ？ 部屋戻るね？」

少女達は肉欲に脳のメモリを侵されながら言葉を紡ぐ。浦風は片時もブロマイドから目を離せないままに、震える手でそれらを回収し始めた。

興奮のあまり上気した顔からは汗が、股座からは何かが滴り落ちてゆく。

「——それじゃっ！」

深雪の台詞を皮切りに、大慌てでブロマイドを片付ける三人。自室で、厠で、はたまた何処かで——秘所を弄りたい、甘美な悦楽に浸りたい。それしか考えられずに、少女は急ぐ。

「また明日！」

「あ、ちよっ……！」

秋雲は他の二人と足並みを揃えられず出遅れてしまった。乱雑にかき集めた写真を胸に抱え、出口へと向かう彼女。

——その時、例の写スーパールレア真を落としてしまったことには、気付く様子もなかつた。

†

テートク、最近どうしてしまったんでしょう。まるで人が変わったみたい……。

そう独り言ちたのは、当鎮守府の第一艦隊旗艦・金剛。彼女は遠洋での深海棲艦の掃討任務から艦隊全員ほぼ無傷で帰投した後、一人で食堂へと向かう途中であつた。

何故艦隊の仲間達と同行していないのか？ その理由に先程の言

葉が深く関わってくる。

「……最近の皆は特に 下 v u l g a r 品 過ぎマス……」

——我が提督に対し、周りの艦娘は獣のような欲望を抑えられずにいる。

それが、金剛にとって不快でしかなかったのだ。

金剛がこの鎮守府に異動したのは数年前。そして、現在ここを統括する提督も同タイミングでの着任であった。

艦娘として生を受けてから元氣澆^{はつらつ}、明朗快活をポリシーに生きてきた金剛にとって、初めて見た本物の男性——きなみ 木南提督の風のような穏やかさ、任務に失敗しても艦娘の身体を慮^{おもんばか}る器の深さは、まるで父親の胸に抱かれるような安らぎを覚えるものだった。

そして誓ったのである。提督を穢してはならない、私が守る——と。

元々男性が貴重な世の中、また更に貴重な男性の提督とあつて艦娘達が浮足立たない訳も無く、彼が着任した初めこそ強漢^{ごうかん}事件でも起きるのではと危惧されていた。

だが、そこまでの事態に陥ることは無かった。何故か。

それは、提督が女性をあまり得意としなかった故に、艦娘と彼の心の距離感に大きな開きがあったから。

要するに、提督が高嶺の花過ぎたからである。

指揮こそすれ、日常的なコミュニケーションなど望むべくもないような状況。だから少女達は性的欲求を諦める事ができた。

——ほんの少し前までは。

ある日突然、提督の態度が豹変した。

それまで執務室で搦っていた食事は食堂へと顔を出すようになり、目があった艦娘に笑いかけながら手を振る。きっちり着用していた制服は「暑い」と切り捨てラフな格好に。

隙を見せるようになった、と言うのだろうか。お陰で”絶対不可侵な高嶺の花”から”死ぬ程エロい上司”へと印象が変わり、艦娘達の

抑圧されてきた欲求が表面化してきたのである。

人が集まればやれ提督工口い、やれ提督舐めたい、提督提督提督。彼に対して騎士のような忠誠を抱いていた金剛は、ついに艦娘達にうんざりしてしまったのだった。

思い返すと湧いてきた若干の苛立ちを、提督と出会って世界が鮮やかに変わった記憶——心の中の宝箱に大切にしまわれた宝石の輝きで霧散させ、やや虚勢じみた鼻歌を交じらせつつ庁舎へ足を踏み入れる。

と、食堂を目前にして駆逐艦が中から駆け出してきた。

「あっ！ 金剛さんごめんなさい！」

「ワっ!？」

「待ってってばー！」

深雪と浦風、少し間を置いて秋雲の三連星のような猛撃を、素っ頓狂な声を上げながら紙一重で避ける。

「び、be carefulネ……」

「すみませーん！」

落ち着きのない背中を見送りながら、何だったのかな、と金剛は呟いた。そのまま歩みは止めずに食堂へと入る。

結構な時間だが、未だ内部は盛況である。金剛はカウンターで夕食を受け取ると、数多の艦娘で雑然とした中央を避け、長方形に伸びた机の末端の席に腰掛けた。

「……いただきマス」

黙々と料理を口へ運ぶ金剛。

元来どちらかといえはしやく側だった彼女は、喋る相手に事欠くこの状況が不満ではあった。ただ提督に関する下世話な話を聞かされる事を拒否する感情と秤にかけた結果、こうするしかなかったというだけだ。

しかし金剛にも一度だけ、周りの話に乗ったことはあった。

『ワタシだって、シたいよ。……キスとかハグとか』

頭を撫でてもらったりとか。

彼女にとっては結構な内心の暴露。しかしそう打ち明けた途端、周

りの艦娘達の笑顔が引き攣つたのを金剛は見逃さなかつた。何故かは分からない。妙に生温かい空気になった理由はなんだろうか。

ため息を一つ吐き、咀嚼のペースを速める。とにかく早く食事を済ませて寮へ戻ろう、そう思った矢先であった。

「……what?」

机の下に長方形の何かが落ちているのが目に入った。

ひとまず箸を置き、それに手を伸ばした金剛。摘んだ指の先からは、ざらつきの無い非常に薄い感触が伝わる。

「光沢紙……?」

胸元まで寄せれば、それは何の変哲も無い真っ白な紙だった。

きつと誰かが何かしらの作業でもしていたのだろう。早くも興味を無くした金剛はフンと鼻を鳴らし、お冷の注がれたグラスに口を付ける。

そのまま紙を机の上に放ろうとして――

「……ぶっ!!?」

――光沢紙を裏返した途端に水を吹き出した。

食堂内の幾らかの視線が自分に向けられる。慌てた金剛は咄嗟にその紙を懐にしまい込むと、机にかかった水を急いで布巾で拭いた。

えっ……テートクの、写真?

あれは白紙ではなかつたのだ。印刷されていたのは、穏やかな日差しに照らされる天使のような寝顔。軍服越しに伝わるがたいの良さ。そして……。

「……ッ……!」

きゆううん、と下腹部が不随意に収縮する。唐突の鋭くも淡い感覚に腰を振った金剛は、一瞬で網膜に焼き付いたそれによって全身の火照りを感じ始めていた。

このまま公共しよくどの場に居ては不味い。主に精神的に。

興奮で鋭敏になった皮膚の感覚に鳥肌を立てながら、彼女は必死で残りの料理に手を付ける。

ドアノブを捻り、バタムと大きな音を立てて扉を閉めた。

「ハア……ハア……っ」

艦娘寮、金剛の自室。食事を終えたその足で帰宅した彼女は、扉に背を預けて肩で息をする。

呼吸に合わせて上下する豊満なバスト、その部位にある内ポケットの中に、持ち帰ってきてしまったあの写真がある。

僅かな理性が取り出す事を拒否した。再び目にしてしまえば最後、提督への清らかな尊敬、忠誠の心が、純粹な恋慕の気持ちで穢されてしまうだろうから。獣のような感情で濁ってしまうことが恐いから。

しかし一度鎌首をもたげた性的興奮は、もはや自らの意思で抑えられる域を軽く超えていた。

「……っ！」

身体が、熱い。我慢ならずひしと自らを抱きしめれば、露出した肩から二の腕にかけて赤く灼けている。

恐らく顔も同様なだろう、頬が燃える感覚に額から垂れる汗。無意識に擦り合わせる内腿は、快い感覚を下腹部から脳へと送り届ける。

深い呼吸を繰り返し、心の中でのせめぎ合いに意識を向けること数分か、数秒か。

——テートク、s o r r yネ……。

ついに理性が最後の一步を譲ってしまった。金剛は心の中で彼に謝ると、胸元に手を伸ばす。

表面に脂が付かないように丁寧に指を添える。するりと取り出された写真は、月明かりが差し込む部屋の中で異様な存在感を醸し出していた。

わなわなと手が震えた。視線が上下に定まらない。

交互に見やるのは、提督の顔、下腹部。

「はっ、はっ……」

無意識の内に、空いている手が金剛の胸元へと滑り込んでゆく。

柔らかな脂肪を包む手触りのいい晒しを下からフェザータッチで

なぞり上げると、とある一点から金剛の脳へと電流が走った。

「んっ」

肉丘の頂点、そこにぽつんと存在する乳頭に人差し指が触れたのだ。

指先でそこに狙いを定めると、親指と中指で乳輪の周りを抑える。やや押し広げるように圧を加えれば、柔く沈む指先と反比例するように突起の主張が強まった。

そして自由をきかせた人差し指を曲げ、爪の先でその先端を蹂躪する。

かり、かり。

ぴくり、と思わず肩が跳ねた。

胸の先から、くすぐったいような、甘く痺れるような感覚が広がってゆく。

ぶわりと広がる鳥肌に指先の突起も硬くなり、さらしが押し上げられてぴんと張る。

ぽつりと浮かび上がる乳首に対し、刺激の方法も爪先から指の腹へと移行した。

頂点を撫でる。側面を擦る。

感度を増したそこを労るように、慈しむように。

すり……すりすり……

小さな円運動で周回する。何度も、何度も。

「はん……っ」

すりすりと断続的な刺激が走り、思わず声帯が震える。

気持ちいい。じんわりと脳を焦がすこの感覚。それに呼応するかのように、ショーツが下腹部の奥からの湿りで温くなる。

ドアに背を預け、甘美な刺激に吐息を漏らす、美しい女性。

潤んだ瞳で提督の写真を見つめるその表情は、普段の快活な彼女からは想像できないほどに淫靡なものだった。

「……っ」

金剛は無言で窓際へと足を進めた。

そこにあるのは、普段から旗艦としての書類仕事などをこなすため

に設置されている机だ。

格子窓越しに月明かりが差し込む長方形の机に対し、何故か斜めに身体を向ける金剛。そして提督の写真を机の上に、やや奥の方に置いた。

しばらくそのまま立ち、提督の顔を見つめる。

心中に去来する恋慕の情が胸を締め付けた。

まだ、戻れる。

このまま写真は引き出しの奥にしまい込み、お風呂に入っただけに眠る。そんないつも通りの日常に帰ってしまおうか。

先程失いかけた理性が、微力ながらも再び立ち上がろうとしていた。

……が、一瞬で砕け散る。

抑え続けていた性欲を前にして、他の何かが打ち勝つ訳が無いのだ。

「我慢できないよ……テートク……」

自分が情けない。自責の念で今にも泣き出しそうだ。

しかしそんな表情に反して、彼女の身体は欲求に従い、短いスカートの中程からたくし上げた。

露わになる白いショーツ。端に施されたレースやフリルが清純な印象を与える下着だ。

しかし粘性を吸ってふやけたクロッチからは、淫らにも雌の匂いが振り撒かれていた。

彼女は両手を机に置いた。

そして、それに合わせて身体を寄せる。

木製の机の角。軟いカーブを描くそれにショーツが迫り——強く押し当てられた。

「……………」

くにゅ、とショーツ越しに柔く変形する乙女の秘所。

レースのあしらわれた高級感のあるショーツは今、クロッチからは愛液が滲み出し、固く勃起した肉芽の形状をはつきりと浮き出させている。

そのまま、くいと腰を引く。圧迫されたままに動いたショーツはしわを生み、その下に隠された淫らな核を包皮から引きずり出した。「んっー!」

先程と比にならない電流が下腹部から走った。

ぬめったシルク生地がクリトリスに集まる神経をなぞる。ぞわりとした感触と机の硬い反発が相互に性感を高めてゆく。

「気持ち、いい……っ!」

しゅ……しゅりっ。

両手と股にも体重を預け、金剛はその腰を前後させ始める。

一往復一往復をしっかりと味わうように、ゆっくりと、ゆっくりと彼女の肉芽を擦り付ける。

段々と揺する間隔が短くなる。机の角に掛けられる体重も割合を増し、勢いが強まった。

その動きは、獣の交尾のよう。

「はぁ、はぁっ!」

ちゅっ、くちゅっ、しゅり。

愛液をとめどなく漏らす陰裂と下着に鳴らされる水音が部屋に響く。

視界がとろんと潤む。

気持ちいい。

最早、荒げる吐息が皮膚に触れるだけで鳥肌が立つほど敏感になっている。

ちゅっちゅっちゅっ。

月明かりに照らし出されるのは、まるで絵画から抜け出たかのような美貌を持つ女性が快感を求めて激しく腰を振る姿。

情熱的で、淫靡で、そして幻想的なこの光景は、しかし誰にも知られる事のない秘密のもので。

「テートク……っ! テートクっ!」

だからこそ、金剛は自ら封じ込めた思いの丈を、澱のようにどろりとした劣情を吐き出せたのだろう。

目を閉じ、慕う男を呼ぶ金剛。悩ましげに眉を顰めるその瞼の下に

は、彼女の妄想の世界が広がっていた。

テートク、気持ちいいデスか？

『あ、ああ……っ！ 金剛お願いだ、挿れさせてくれ……！』

だーめ、デス、テートク……っ！

士官服をはだけさせて仰向けになり、快感に喘ぐ提督。そんな彼に金剛は跨って、腫れ上がった剛直を迎え入れ——ずに、その先端や裏筋を陰唇で挟み、ぬるぬると擦る。

いわゆる素股の形で、彼女は提督を見下ろしていた。

そんなに挿れたいんデスか……？

『頼む、金剛と繋がりたいんだ……！』

ふふ、どうしましょう。これを耐えられたら挿れてあげマス。

頬を赤らめ、挿入を懇願する提督。対する金剛は冷静で。

腰を前後する度に、刺激を受けた提督の肉がびくりと跳ねる。その感触が金剛の軟肉に届き、より一層の興奮が巻き起こった。

「んんっ、あつ……！」

ちゅっちゅっちゅっ。

金剛が夢見る、提督との女上位のセックス。焦らし。彼の先走りと金剛の愛液が混ざり合う妄想の世界。

ここも好きデスよね、テートク……。

『ああ、やめっ、駄目だ……！』

ホラ、やっぱり。乳首も敏感なんデスね。

『うう……金剛っ、出てしまっそうだ……っ』

ええ？ 早いネ。我慢、して……っ。

提督の絶頂寸前の表情を思い浮かべるだけで、金剛の陰核はその硬さを増した。

「はあっ、はあ……っ！」

今やすり潰されんと机角に擦られる、濡れた秘所。

ピンと伸ばされる脚。

やがて金剛の鼠径部に、びりびりと張るような痺れが走り始めた。それは確実に彼女の快感の中心地へと、乙女の蕾へと集ってゆく。

『いく……、出る……っ』

私も、もうすぐイクから。まだ出しちゃ駄目っ。

『無理っ、ああ……出る——！』

……あつ。

『ああっ！——ううっ！——っ！』

想像の中の提督が頂に達する。鈴口から吐き出される精は濃く、そして止まらない。

そんな光景に合わせて、現実の金剛にも限界が訪れた。

性感が下腹部で渦を巻く。

そして、痺れが一点に上り詰め——

「い、イク、イク——っ！」

ちゅっちゅっちゅっ——びくっ。

「——ううっ！——うあつ！——はあつ！」

絶頂。

びくり、びくりと腰が跳ね上がった。陰裂を机に押し付けたまま、ショーツにしわを生んだまま、幾度も張り詰める太腿。その度に彼女の形のいい臀部にも震えが伝わった。

「んんっ、んっ！——ふう……っ！」

頭が真っ白になり、何も考えられない。

下腹部から破裂するように広がる快感。垂れる涎。燃えるような頬。何も啜えていない最奥が収縮を繰り返す。

ただただオーガズムに打ち震え、飛んでしまいそうな意識を繋ぎ留めるために声を上げる。

それを抑えようと口端を噛むが、しかし意味はなく、性感が減衰するのを待つしかなかった。

びくっ、びくっ……。

「ふっ……はあああ……ああ……」

仰け反った背筋をようやく萎びさせ、深呼吸を繰り返す。

足りずにいた酸素が頭に回り始め、金剛は徐々に冷静さを取り戻した。未だにひくつく秘所を机から離し、スカート越しのしわを伸ばすよう

に手で払うと、金剛はポツリと眩いた。

「……最低、ですよネ……」

深い歓びには深い賢者モードが付き物だ。中で達すればその限りでは無いらしいが、処女の彼女には真偽の程は分からない。

濡れた下着と机の角に不快感を露わにし、眉を顰めながら金剛はティッシュを数枚抜き取る。

そして、愛液を拭き取るうとして——再び目にしてしまうのだ。提督の写真を。

「……っ！ ウソ、また……！」

きゆうん、と下腹部に電流が走る。

それは深く沈んだ精神と反対に、全くの不随意の反射であった。

再び、敏感な箇所^{ツボ}に血が巡り始める。どくん、どくと耳の奥で大きくなる鼓動。

視界がぐらつく。

性的興奮がまた巻き起こった。

「なんで……！ んっ♡」

金剛は自らの欲求に抗えず、きゅつと腰を据え、机に陰裂を押し付ける。二度目の自慰が間を置かず^{ツボ}に始まったのだった。

その日、夜更けの艦娘寮に、秋雲の悲嘆に暮れた叫びと金剛の嬌声が響き渡った。

しかし周りの艦娘達は声の主を知ることではなく。しばらくの間、艦娘寮の女幽霊という怖い話が流行ったという。

7. (中)

「——と、ここからは応用になるけど」

「はい」

「この時に陣形を変える、と」

鎮守府庁舎内、西日の差し込むとある会議室。

天板の広い机の上には鎮守府近海域の図が広がり、2つの異なる色をした凸型の駒が複数並べられている。

それらを前に肩を並べるのは、腕を組みウンウン唸る俺と、余裕の表れた笑みを浮かべつつこちらへ語りかける嶋田さんだ。

「変則的だが、ここで重巡を前に出せば——」

彼女は図上の駒を棒で押し、ゆっくりと敵対する駒を指し示す。

コツリ、と天板を小突く音が、静かな室内に響いた。

「——相手の隙を突くことができる」

「なるほど……」

つまるところ、俺は今嶋田さんから、先程行われた演習の解説兼、図上での再現演習をして頂いている訳だ。

正直、かなり為になる。民間上がりでなんとか基礎を固めて指揮をしているような俺にとって、でかい鎮守府をまとめる提督達のような応用力を学べる機会なんて、幾らあっても足りないくらいだからな。

今日一日を共にしていたお互いの秘書艦は、今は隣の部屋で休憩させている。北上はともかく、吹雪はもうかなりヘトヘトな感があったし。

そんな訳で、俺は嶋田さんと二人つきりで会議室に詰めていた。

何はともあれ集中集中。少しでも技術を盗まないと……と言いたい所だが、そうは問屋が卸さない。

駒を動かすために身体を机へ乗り出す嶋田さんが視界に入る度、思わずそちらへ目が行ってしまうのだ。

すらりと自然なラインを描く背筋、純白の制服の下から丸みを主張する肢体、艶やかな黒髪の揺れるポニーテールと、その下に覗くうなじ。そして凜とした顔つきに、笑みを絶やさないうその表情。

とてつもない美人だ。それも、艦娘達と並んでも遜色ないくらいに。

「ここを……ん？ どうかしたかい」

「あつ、いえ……」

俺の視線に気付いたのか、身を乗り出した姿勢のまま振り返り、こちらを見上げて疑問を口にする嶋田さん。

小首を傾げる彼女の仕草に、大人びた外見とのギャップを感じてドキツとしつつ、対して俺のその感情がバレていないかと若干ヒヤツとしながらも準備していた質問を口にした。

「その……この動きの意味は？」

「そこか。よく気付いたね」

ほっ……。危ない危ない。気付かれてはいないみたいだ。

この世界に来てから触れ合った人——グイグイ来る明石とか、お淑やかに俺を肯定してくれる鳳翔とかと違って、あくまで等身大に俺を扱ってくれる人は正直ありがたい。

……でもやつぱ、前世のおっさんの顔が脳裏にチラつくんだよなあ……。

「……中佐、聞いているかい」

「す、すみません」

そんな考えを巡らせているうちに、目の前のことが疎かになっていたらしい。

いけないいけない。俺は少しでも雑念を捨てられるよう海域図に一層近付いて、嶋田さんを視界の隅に追いやった。

†

豊施・舞鶴両鎮守府の提督が会議室に詰める間、それぞれの秘書艦である吹雪と北上は、隣接する部屋での小休止を言い渡されていた。

「暇だよ。暇〜ヒマ〜」

「まあまあ……。折角お時間を頂けたんですから、しつかり休みましようよ」

実際の所、ぶーたれる北上を宥める吹雪という、ただでさえ疲れていた吹雪の心労を余計に重ねる光景が広がっていたのだが。

「中佐さんとお話ししたい。あわよくばしつぽりしけ込みたい。嶋田提督ずる〜い」

「欲望ダダ漏れじゃないですか……」

「あ、そういうえば吹雪さあ」

「はい？」

備品の椅子に逆座りで凭もたれつつグツタリとしていた北上だが、おもむろに吹雪の方へと振り返ると、ニタリと口角を上げて彼女に問い掛ける。

「中佐さんの秘書艦って事はさあ……シたの？ 色々」と

「した？ って……？」

「ほら……」

彼女の言葉に理解が及ばず、一時は頭にクエスチョンマークを浮かべた吹雪。しかしその反応に若干白けた北上が、手を輪つかにして上とするハンドサインを見せると、ようやく吹雪はハツとして、顔を真っ赤にしつつ北上に吠える。

「し、シてませんっ！」

「ええ〜。やっぱこの鎮守府、不能者しかいないよお」

「不能じゃないですよ!!」

やれやれといった仕草を見せ、北上は続ける。

「こないだの横須賀の集まりの時に、鳳翔も似たようなこと言ってたなあ。んでさ、アタシが夜這いすればって焚き付けたっけ」

「え？ 鳳翔さ……夜這いっ!?!」

鳳翔の名前が出てきたことにリアクションする間もなく、続いて口を衝いて出た単語に吹雪は驚愕する。

怒ったり青ざめたり、吹雪の百面相が余程面白いのか、いつの間にか北上の口角は限界まで釣り上がっていた。

「よ、夜這いって……」

「ん？ うん。 鳳翔と中佐さん、同じ部屋で一泊するんだからヤッチャえー……ってね。それで——」

「そ、それで……?」

「翌朝の鳳翔、ツヤツツヤだったなあ。キラ付け完了って感じで」
「な——ツ!!」

北上の発言に、吹雪は驚愕のまま硬直する。

しかし微動だにしない身体とは対照的に、その脳内は激しく活性化していた。無数の電撃が四方へと走る。これまでの鳳翔に関する疑惑や噂が全て一本の線となって繋がり、遂には完璧な推理として出来上がっていったのだ。

ついでに脳破壊も行われた。

「そういう……事だったんだ……!」

「……んん? ショックなの吹雪? 吹雪ー? おーい……なんだよ、つまんない」

吹雪は目を見開いたままわなわなと震え、北上の声が聞こえていないようだった。

「ふあゝ。やりたいな……」

もう少しからかうつもりだった相手が反応しなくなってしまった北上。しばらくして興味を無くした彼女から、つまらなさそうなくくびが一つ漏れる。そうして再び背もたれにぐでりと寄りかかると、ぼけつとした表情で頬杖をついたのであった。

それから室内に静寂が訪れ、時間だけが流れていった。

+

鎮守府庁舎の前で、俺と吹雪は朝と同じ様に立っていた。……いや、正直言うとうと吹雪の疲労が限界か。なんだか灰になっているような……。しかも、俺をちらりと見ては涙を滲ませている……。? これは無理矢理にでも休ませる必要があるかもしれないな。

まあそんな俺達は置いていて。

陽が沈んで間もなくといった頃合い、空で紺と朱が層になっているその下で、今まさに公用車に乗り込もうとしているのは嶋田大佐だ。それは今日の一大イベントの終わりを意味していた。

「本日はありがとうございました」

「ああ、こちらとしてもいい刺激になったよ」

珍しく提督らしいことをした一日を振り返りつつ、一礼して彼女の言葉を聞く。

……と、大佐に続いてドアノブに手を掛けた北上がこちらに振り返ってひらひらと手を振った。

「バイバイ中佐さん。奥手な嶋田提督だけど仲良くしてやってね」
「こ、こちらっ！」

ウィンドウを下げ、車内から顔を出してこちらへ話しかける北上。彼女の言葉に、嶋田さんの余裕たっぷりな表情が一瞬にして焦りに変わった。

「中佐すまない、こいつ余計なことを……」

「はるばるアナタに会いに来たのに、仕事の話しかないんだから世話ないよねえ。ねえ中佐さん、この人の水揚げ——わぷっ」

「済まない！ 車出してくれ！ それじゃ、また！」

「は、はい……？」

「んむ〜！」

茹でダコみたいなお顔色の北佐に口を押さえられた北上。

車内に引きずり込まれた彼女の姿を、せり上がるウィンドウのスクリーンがすっかり隠してしまったところで、公用車は走り出した。艦娘輸送車も後に続く。

何というか……フリーダムな艦娘だなあ……。

「あんな秘書艦あり……？」

隣で吹雪がボソリと呟いている。……俺もそう思うよ。

嶋田さんのあんな顔を引き出せるのは、彼女しか居ないだろうな。

†

最後に北上が言いかけたのは何だろう？と小首を傾げつつ踵を返す。まあそれはさておき、ようやく肩の荷が下りたって感じてほっと息をついた。

腹も減ったし、早速食堂へ……といきたいところだけど、俺達は一旦そこを素通りした。

まず向かったのは執務室。これから、この鎮守府に電撃着任した3人の艦娘と合流するんだ。運用に関しての諸々の書類仕事を済まさないといけないわけで、彼女たちにはそこで待機してもらっている。まだ遠くに見える、廊下と執務室を隔てる古めかしい扉。その向こうからは、複数のくぐもった声が漏れ聞こえていた。

歩みを進めて近付くほど、少しずつ鮮明になってゆく。

『なーなー。オトコって、佐渡様達オンナとどう違うわけー?』

『知らないの佐渡ちゃん。鹿島さんが教えてくれるよ』

『わ、私!? えーつと……その、身体に……大事なものがついてたり、ついてなかったりする……なんだよ?』

『そうなのか!? なにがついてるんだ!?』

……なんだろう、何を言っているかは分からないけど、佐渡が元気な事だけは伝わってくる。

『大事なものってえと、心臓か!? 心臓が2つあるのか!?』

『違うよ佐渡ちゃん。つぶふ、鹿島さんが正解を教えてくれるって』

『ええっ!? その……ち、ちん……』

ガチャリ。結局何の話だか分からないままに、俺は執務室の扉を開く。

『お待たせお待たせ。それじゃあ着任の手続きを——』

『ちんち——ほええええーっ!!』

『うわあ!』

入室した途端、奇声を上げてビクーンと飛び上がる鹿島。

なんだよ!? 視界に飛び込んでくる彼女にこっちまでビックリしたじゃないか。

その足元でこっちに顔を向けるのは、しいたけ目をした佐渡と、口元に緩やかな弧を描く対馬だ。

……何が何だか分からないが、きっと子守が大変なんだろうことは伝わってきたぞ。

「……お疲れ鹿島」

「へっ……?? は、はい」

「ん、司令っ！ 司令にだけある大事なものを見せてくれよー！」

彼女を労う俺の足元に、佐渡が駆け寄って抱きついてきた。手袋を嵌めた小さな手でスラックスの端を掴むと、揺らすように引つ張りながらおねだりをし始める。リズムよくグイグイと揺れるちびっ子の瞳は、先程と変わらずキラッキラとしていた。……で、俺にだけある大事なものってなんだ？

「階級章のこと？」

「え？ かいきゆう……？ うーん多分ちーがーうー！」

俺の返事が気に食わないらしく、大きく首を振る佐渡。

彼女が欲しかった答えは階級章じゃないらしい。なんのことだよ。

「こら、佐渡ちゃん！ 司令官に抱きつかないの！ 上官だし、それに男性なのよ」

「えー、なんで！」

「なんでも！」

俺の後ろに控えていた吹雪が、海防艦の視線の高さに合わせて膝を突き、珍しくまともな顔をして佐渡を注意する。彼女の表情は、まさにお姉ちゃん、といったものだった。

流石吹雪型の長女だ。からかうと真っ赤になるところも、真っ直ぐな瞳で人を叱るのも、生来の生真面目さから来るものなんだろうな。うんうん。真面目なお姉ちゃんに肌を見せたりして性的にからかうのたまんねえや。……いけない、つい心の声が。

俺はそんな内心をおくびにも出さず、未だ足に引っ付く佐渡に優しく声をかけた。

「今はお仕事の時間だからな。今じゃなければ良いよ。その時にもっとお話ししような」

「し、司令官……」

「うー……しろうがねえ。約束な！」

視線を逸らし、頬を膨らませてぶーたれる佐渡。その手はスラックスから離され、吹雪に導かれるままに鹿島と対馬のもとに引き下がった。

よし、ようやく話の続きができる。

「落ち着いたところで、3人の着任手続きと行こう。さ、そつちに座ってもらって」

「はいー」

「はあい、ふふ」

「おう」

†

諸々の用紙に各自名前を記入してもらい、書いたそばから秘書艦の手に渡り、最終的に執務机へ届いたものに俺が決裁の判子を押していく。そんなルーティンが幾度となく繰り返し返される。

綺麗な筆跡が鹿島で、所々が丸みを帯びて女の子らしさ全開なのが対馬、そして筆圧の強さがはつきりと伝わってくるゴリゴリの字が佐渡だ。すげえ、癖字だけでどんな人間なのかが分かってしまいそう。

「これで最後、と」

ポン、と押印した最後の一枚を、山積みになった書類の束の一番上に置く。疲れた。ファイリングは明日だ明日。

あんなに元気だった佐渡も、単純作業の繰り返しは相当堪えられない。ソファーに座っていた姿勢から身を投げだして、隣の鹿島の膝を枕に倒れ込んでいる。

「3人ともお疲れ様」

提督こそ、と気を遣う鹿島に笑顔を返し、俺は席を立つ。

「よし、それじゃあ食堂で飯だな。その後の入浴・就寝だけど、大浴場の場所は吹雪に――」

「司令と入るっ！」

俺の台詞に割り込むように、佐渡が大声を上げて起き上がった。

「お仕事の時間は終わった。じゃあさっきの約束！ 佐渡様に司令の秘密を全部教えてくれんだろ？」

「ごっころ佐渡ちゃん、お話なら食事中にでも……」

「メシの間は話さないって、鹿島さんが言ったんだ」

「うつ……」

「いいよな司令！　お願い！」

八重歯を隠さず、澆漉とした笑顔でこつちを見る佐渡。彼女を宥める鹿島も言いくるめ、その瞳の決意は固そうだ。

うーん、折れるしか無いか。別に嫌じゃないし。

「分かった、そうしよう」

「し、司令官っ！」

「いつひひ！　そうこなくっちゃー！」

「ただし、俺はこの時間の大浴場に入れないから、私室の小さな風呂になるよ？」

上等だぜ、と佐渡がガッツポーズを構える。その隣で、しなりとソファーに腰掛ける対馬にも俺は目を向けた。

「対馬も一緒でいいか？　佐渡だけって訳にもな」

「うふふ。お願いします」

手を頬に添え、流し目で返事をする対馬。この二人、すっごい対照的だなあ。

「提督さん、いいんですか……？」

「い、いいなあ……」

狼狽える鹿島と吹雪を置いて、チビっ子二人と俺の間で話が進んでいくのだった。